

鹿児島県史料集
(61)

通
昭
録
(十)

鹿児島県立図書館

刊 行 の こ と ば

鹿児島県史料集第六十一集としてここに「通昭録（十）」を刊行いたします。

「通昭録」は、江戸時代後期 得能通昭（享保十四年生 寛政元年没）が郡奉行や勧農使として務める傍ら収集したものを江戸在勤中にまとめたものです。

内容は、薩摩藩主の編年記・薩摩藩及び公儀の法令・故実・室鳩巢などの漢学の説、番町皿屋敷の由来などの話、和歌・和文・随筆等を含みます。

今回は、八十余巻のうち巻之六十七から巻之七十二までを刊行することといたしました。

本史料集は、鹿児島県立図書館所蔵本を底本とし、都城島津邸所蔵本、東京大学史料編纂所蔵本を参考に、前始良市歴史民俗資料館館長の尾口義男氏、鹿児島大学教授の丹羽謙治氏によって、編集・校閲・校訂が進められ、刊行の運びとなりました。

長期間にわたる二方の御苦労に対し、心からお礼を申し上げます。

また、この史料集が本来の目的であります郷土資料の保存と地方史の研究や県民の文化向上に大いに役立てられるよう期待いたします。

令和四年三月

鹿児島県立図書館長

古川 仲二

目次

解題		i
例言		x
通昭錄卷六十七		1
通昭錄卷六十八		18
通昭錄卷六十九		35
通昭錄卷七十		55
通昭錄卷七十一・卷七十二		69

解題

本書は『通昭録』卷六十七から卷七十二を翻刻したものである。卷六十七・六十八の二巻は和文を、卷六十九から七十二は漢文を収録している。これらは「越昭随筆」の一部を構成しているが、その巻数は記されていないので、いまだ編集の途中にあつたものかと推定される。内容は得能通昭自身の文章は僅かで他人の文章を全文ないしは適宜抄録したものがほとんどである。

以下、和文の部分と漢文の部分とに分けて収録されている文章について内容の紹介を行う。

宝暦五年（一七五五）薩摩藩の八代藩主となつた島津重豪（当時十四歳）は、その治世前期（明和・安永期）、藩政に積極的に関与して、自ら家臣・領民に人倫・五常の大切さを説き、開化政策や藩政改革を意欲的に主導、推進した、好学・多趣味の指導力優れた名君であつた。

得能通昭（享保十四・一七二九年生）は、重豪の藩主就任前年に二十代半ばで家督を相続した城下士である。彼が残した著作・編纂物を通読すれば、その家は代々学問をもつて藩主に仕え重用された家の一族であつたことから、彼自身も若くして好学の徒や実務官僚として精勤するかたわら、法令や故実・史書・和歌・漢詩・伝記・著作・文献等、各種の文書・記録類を広く精力的に博搜・書写して研鑽に勤めていたことが知られる（『鹿児島県史料集54 通昭録（三）』解題）。

また、本書『通昭録』卷六十八所収「樺山久智高山申渡」によれ

ば、明和二年（一七六五）三十代後半には藩家老樺山久智の下で藩と高山郷の取次役も務めるなど能吏として働いていたことが窺える。

そして安永六年（一七七七）齢四十九歳にして徒目付に任じられ、その年暮の藩主特命により、翌七年と八年の両度にわたつて奄美大島に横目（監察官）として赴任し、貧困と飢餓に苦しむ島民救恤のために、従来の代官支配の統治手法や弊政を改め、島の農業や社会発展の阻害要因となつていた旧慣・旧弊の除去に優れた手腕を発揮した。

さらに安永九年（一七八〇）には藩の農政を掌る郡奉行に抜擢され、同年秋から天明三年（一七八三）にかけては勸農使として大隅諸郷や鹿児島近郊各地の村々を巡回して、疲弊農村の救済や復興、農業振興にも尽力している（『鹿児島県史料集57 通昭録（六）』解題）。

本書『通昭録』卷六十七・六十八には、この時代に得能通昭が書き留めたものと推測される記録・文書など、和文三十編を収めている。以下、項目順に内容を簡単に紹介する。

『通昭録』卷六十七所収分

桜島炎上記

薩摩藩の藩校造士館の聖堂奉行（のち教授）山本正誼が著した安永八年（一七七九）十月に起きた桜島大噴火の記録である。噴火の経緯や桜島の被害の惨状、緊急事態下における藩主島津重豪の指令を受けた藩の対応や島民救済策等を知ることができる。

平田可竹与伊東氏書

享保三年（一七一八）二月平田可竹が伊東五右衛門に与えた書状。五右衛門の父祐房は、可竹がかつて師と仰いだ甲州流軍学の達人で屋敷続きの隣人でもあった。父の跡を継いだ五右衛門に、父の凄まじいまでの修行ぶりや武芸志願者必須の心得等について語ったものである。可竹は平田民部左衛門宗弘の老号。

山内無窮斎

江戸の芝同朋町に武芸道場を開き、門徒千人以上を誇った山之内刑部左衛門秀久（無窮斎・無休斎）について紹介した記事。

加藤権兵衛略伝

江戸中期の武芸者加藤清風（宝暦十三年・一七六三年死、年八十二）について紹介した記事。清風は、本田次郎左衛門の示現流、山之内無窮斎の居合・柔術・腰廻組討・棒術・鎌術、岡雪斎の天真流ほか、鏡知流や戸田流の鎧、大坪流馬術・雲弘流剣術等広く学び、鹿兒島城下で武芸諸流を伝えた。

安永中御即位記

安永九年（一七八〇）十二月光格天皇の即位式が行われた際、薩摩藩京都詰算用役隈元源太左衛門は、御所出入の知人等に特別に頼み主殿司香持として御所に入り、終日儀式を庭上で拝見した。これは翌年（天明元年・一七八一年）正月隈元が藩庁に送った見聞録である。

坂元織部捕別府氏

寛永十二年（一六三五）七月江戸詰の別府主計が、宇田六右衛門と共に謀して薩摩藩の上屋敷金蔵に放火し、金銀を盗み行方にくらます事件が起こった。主犯の主計は、藩命により諸国を捜

し回った坂元織部によって、翌十三年五月に捕縛され、その功により織部は褒美として知行百石を賜った。この記事は、二十余年後の万治三年（一六六〇）、織部が事件の顛末を子孫のために書き遺したものだ。

興運・西長捕罪人

安永元年（一七七二）に重罪の大島流人肥後五右衛門・大始良の伝十が破牢して行方をくらました。西間切西古見村の興運と与路島の西長は、大島代官の命で捜索にあたり、翌年四月重傷を負いながらも伝十を捕縛した。この記事は、その顛末を記した興運・西長連名の報告書で、末尾には兩人へ褒美として米十五石の付与を達した同八年（一七七九）の薩摩藩家老達を収める。

佐栄秀孝行

大島詰御目付得能佐平次（通昭）と横目鎌田次郎左衛門が、焼内間切大和浜村の佐栄秀の父親への孝養とその人となりについて、藩勝手方大目付と近習衆宛てに連名で書き送った安永八年（一七七九）の報告書。

伊勢貞昌与相良氏書

江戸初期の薩摩藩家老伊勢貞昌が、島原の乱勃発直後の寛永十四年（一六三七）十二月に相良藩家老相良清兵衛に宛て送った書状。

『通昭録』卷六十八所収分

年頭祝物并しうたつく事

慶安四年（一六五一）正月元旦に与（組）中に布達された三カ条の禁制（藩主仰渡）。

若キ者共氣任付 仰出

若い諸士の五つの行いの厳禁を達した慶安四年二月布達の藩主
島津光久の仰出書。

車落・坂落之事

端午の節鶴丸城大手口や道場坂での車落・坂落行事において、
思慮に欠ける行いを禁じた慶安四年五月の藩達に係る記事。

笹踊停止 (略)

甌島天童山之事 (略)

鹿兒島・外城踊之事 (略)

親咎ニ付子共御咎目之事

士身分剥奪の重罪人の子供等に対する赦免後の身分の取り扱い
を定めた藩達(発出年代不明)。

宝永中衣服定

諸士はじめ領民の絹布の衣類のみだりの着用や衣服への無益な
出費を禁じた宝永五年(一七〇八)正月の藩主島津吉貴の仰出
書と翌六年改めて衣服定の励行を指令した仰渡書を収める。

重豪公御役軽重 仰出

役格はじめ身分等に応じた高下の礼節を守り、諸士はじめ領民
ともに以前より庵礼の多い薩摩藩の風俗を矯正することを指令
した明和八年(一七七二)十一月の藩主島津重豪の仰出書。

同公言語容貌 仰出

前掲仰出を受け、その遵守につき藩家老島津左中(久金)以下
六人連名で改めて同年月付で領内に布達された達。

初狩之事

例年と変わり穴打停止での初狩実施の布達を藩勝手方大目付に

令達した宝永二年(一七〇五)十二月の藩家老達。

日本左衛門触流

江戸中期に大盗賊団を率いて東海道筋の諸国を荒らし、延享三
年(一七四六)公儀お尋ね者となった、日本左衛門こと濱島庄
兵衛の人相書。

重豪公御筆 仰出

明和五年(一七六八)四月島津重豪最初の儉約令とされる着用
衣服を制限し無益の集会等を禁じる仰出が発せられた。それは
翌月藩家老連名で関係部局を通して領民へ布達されている。

樺山久智高山申渡

三通の文書を収める。最初は前掲島津重豪仰出の郷内布達を同
五年五月付で高山唼衆へ令した藩家老(同郷地頭) 樺山久智達。
二つ目は、その樺山が藩と高山郷の取次役をしていた得能佐平
次(通昭)と但馬市兵衛を介して同郷へ布達した明和二年(一
七六五)六月の島津重豪仰出。三つ目は同じく樺山が高山・串
良両郷が領内で最も農村疲弊による百姓困窮が著しく救恤が必
要との認識の下に、与力得能佐平次と徳田甚助を介して、高山
唼衆に救済の施策を示し励行を達した子年(明和五年力)十一
月の書付。

平家与党大島落下事

奄美大島には屋島や壇ノ浦の源平合戦で戦死した平資盛・有
盛・行盛等が、実際には生き残って部下を率い奄美大島に来島
し、先住の民を討ち従えて島の支配者となったとする伝説が古
くからあり、「平家没落由来書」の名で知られる。本書の記録
は宝暦八年(一七五八)に瀬名方黍横目貞俊と通事方与人寿文

が大島代官所横目に提出した書付。

大島漂着朝鮮人具稟

航海中不意の風浪で遭難して屋喜内間切の宇検洋に漂来し救助された朝鮮船の船主李再晟が事の顛末や乗組員等について大島代官所役人に提出した乾隆四十四年（一七七九・安永八年）の報告書。

霊夢之記

安永八年（一七七九）春、二度目の大島勤務を終えて鹿児島に帰るのに先立ち、得能通昭が大島の民害除去や勧農のために断行した事業が、愚頑の徒により後退し、再び旧慣や旧弊に復することを心配して著した文章である。

大島歌

得能通昭が主導して奄美大島の島政刷新が進められた安永七・八年頃、島人が作り謡った歌。

手遊草

大島住用間切の九十五才の翁が、安永七年五月以来の得能通昭の島政刷新を喜び称賛と感謝の意を込めて記した著述と歌の句。

都瑠柴書

島政刷新や勧農・百姓救恤に尽した得能通昭に、西間切の百姓や島役を代表して都瑠柴が安永七年四月に差し上げた書状。

○

卷六十九は、目次にあるように、四つの漢文資料を収録している。『通昭録』には漢文資料を集めた「藻彙編」「通昭録」卷十九（二十八）があり、その補遺とも言えるが、中国や朝鮮の儒学者らとの問答を中心としている点に特色がある。

1 舜水朱先生語録百五条

2 長門鶴台韓客筆語

3 七子韓客筆語

4 徂徠題問様

まず、1の「舜水朱先生語録百五条」は、朱舜水（一六〇〇—一六八二）の文章を抄録したものである。舜水は中国明の遺臣で現在の浙江省余姚の出身、徳川光圀に招聘され水戸藩に仕えた儒学者である。舜水は儒学を学んだのち仕官をせず、明朝復興（抗清復明）のために中国と安南と日本との三角貿易に従事し、長崎にも六回渡来している。鄭成功（国姓爺）の抗清復明の戦に加わったのち、万治二年（一六五九）の冬に長崎に至る。舜水、当時六十歳、七度目の渡日であった。柳川藩に仕える安東守約（省庵）の援助を得、寛文五年（一六六五）水戸藩儒の小宅生順の推薦で水戸藩に迎えられた（石原道博『朱舜水』）。

通昭は朱舜水の文章や舜水と日本人学者たちとの質疑応答を簡条書き（一つ書き）で配列する。目次には「百五条」とあるが、簡条の実数は九十五である。一つの簡条に複数の簡条を含めているのか、未完成、あるいは数え間違い（目次の誤り）か、詳細は不明である。

朱舜水の詩文は、舜水没後三十三年の正徳五年（一七一五）刊の徳川光圀輯・徳川綱條校『舜水先生文集』（二十八卷・附録一卷）に収められている。

『舜水先生文集』の「題普賢画像」（卷十七）、「題安積覚逐日功課自実簿」（卷二十一）、「与小宅生順」（卷十一）、「墓祭議」（卷十四）、「与諸孫男書」（卷二）の計五編が『通昭録』卷二十二「藻彙

編 二」(鹿児島県史料集54)に収録されているが、「語録百五条」との重複はない。「藻彙編」所収のこれらの文章は省略がなく写されているのに対し、「語録」は一部全文のものを含みながらもほとんど抄録(抜き書き)であるところに特徴がある。また、抄録に際しては、引き写しではなく、問答の形式を取り払って客観的な事実を取り出そうとしている。一例を挙げておこう。

一 中国去日本水道一千六七百里、交趾去日本八九千里、来則向
東北方行、交趾故宜在西南也、(『通昭録』卷六十九)

答、中国去貴國水道一千六七百里、交趾去貴國八九千里、来則
向東北方行、交趾故宜在西南也、(『舜水先生文集』卷二十
三)

『舜水先生文集』の多くの文章からどのようなものを選んで収録したのかは簡単に言えないが、別表(本稿の末尾)を見ると、小宅生順や安東省庵の文章や質疑に関わるものが多く採録されていることに気づくであろう。小宅生順は水戸藩の儒者で、名は順、字は安之・坤徳、号は處齋、生順はその通称である。延宝二年(一六七四)に三十七歳で没。徳川光圀の使いとして舜水に会うために長崎に赴いた人物である。

○
いわゆる朝鮮通信使は、豊臣秀吉が起こした文禄・慶長の役(壬辰倭乱)の後、しばらく国交が断絶していたが、慶長十二年(一六〇七)以来、近世を通じて全十二回来日した。十二回のうち慶長十

二年、元和三年(一六一七)、寛永元年(一六二四)の三回は幕府が先に送った使節の回答兼刷還使で、寛永十三年(一六三六)の第四回以降通信使という(李進熙『江戸時代の朝鮮通信使』)。

2の「長門鶴台韓客筆語」は明和元年(一七六四)の、趙曦を正史、李仁培を副使、金相翊を従事官、南玉(秋月)を製述官として来日した第十一回目の使節にかかるもので、江戸や赤間関(現在の下関)で日本人の学者と朝鮮使節との間で交わされた交流の記録である。通昭は筆談(筆語)から抄録を行っている。筆録の内容に興味の中心があるためか、筆録の会席の日時の記録や応酬された漢詩などは省略されている。内容は朱子学(朱子の註解)をめぐる問題、学者・文人の消息、食物、税制など多岐にわたっている。通昭が写本から転写したのか、刊本から抄録したのか断定はできないものの、他の資料の筆写の状況を考慮すると、通昭が用いたのは長州藩藩校明倫館が明和二年(一七六五)に刊行した『長門癸甲問槎』であった可能性が高い。これは藩儒、滝鶴台が中心となつて編纂したものである。滝鶴台は、名は長愷、通称龜松、字彌八、徂徠門の山県周南・服部南郭を師とし、明倫館祭主、藩主侍講を務める。安永二年(一七七三)に六十五歳で没した。

3の「七子韓客筆語」は、正徳元年(一七一)の江戸期第八回目の使節の記録である。正使は趙泰億、副使は任守幹、従事官は李邦彦、製述官は李磧(東郭)であった。今回の使節は宝永六年(一七〇九)一月に徳川家宣が將軍職に就いたことを慶賀する使節として来日したもので、新井白石が使節の待遇を簡素化し、將軍の称号を従来の「日本国大君」から「日本国王」としたことでも有名である。朝鮮通信使と各地の儒者や僧侶などとの交流の記録として『鶏

『林唱和集』正編十五卷、続編十巻が正徳二年（一七一二）に刊行された。正編は江戸、京都、大坂、下関における知識人から庶民にいたる幅広い階層の交流を記録したもので、続編は、將軍徳川家宣から任命された幕府儒官ら七人との詩文の応酬を筆記したもので外題には「七家唱和集」、内題には「正徳和韓集」とある。この七人とは、本文にも引用されている通り、次の面々である。

木下寅亮 字汝弼、号菊潭・竹軒（木下順庵の長男）

深見（高）玄岱 字子新、号天濤

三宅緝明 字用晦、号観瀾

室直清 字師礼、号鳩巢

服部保庸 字紹卿、号寛斎、又号龍溪

土肥元成 字允仲、号霞洲、又号松巖

祇園正卿 字伯玉、一字斌、号南海、紀伊州儒臣

『鶏林唱和集』続編のうち、通昭は高玄岱、三宅観瀾、室鳩巢の三人の集から摘記している。この三人はいずれも薩摩藩と関係が深い儒者たちである。高玄岱（一六四九—一七二二）はもと福建省彰郡の人で、父の時代に長崎の通事となり深見氏を称した。医師として薩摩藩に仕え正徳年間に幕臣となった。書家としても有名である。三宅観瀾（一六七四—一七一八）は、名は緝明、通称は九十郎。山崎闇斎の弟子浅見綱斎に師事したのち、木下順庵に就いた。水戸藩儒、彰考館総裁で大日本史の編集に関わる。後に新井白石の推挙で幕府に仕えた。三宅観瀾『助字雅訓』は文化五年（一八〇八）に薩摩府学蔵板として刊行されている。室鳩巢（一六五八—一七三四）は前田綱紀に見出され十四歳で木下順庵の門に入り、その後金沢藩儒となり、正徳元年（一七一一）には幕府に儒官として仕

え、將軍吉宗の侍講をも務めた。山田月洲を初めとして薩摩藩士が多くこの門に学んでいる。

4の「徂徠題問槎」（「題問槎篇首」）は先述した正徳元年の使節との徂徠門の応酬を門人が整理しまとめて一卷としたものに付した序文。『徂徠集』（三十巻、元文元年（一七三六）序）の巻十九に収録されている。

○

巻七十から七十二にかけては中国の史書『後漢書』の摘録である。『後漢書』は中国南北朝時代の宋の范曄の撰で、本紀十巻、列伝八十巻、志三十巻。志は晋の司馬彪の『続漢書』から取っている。本紀と列伝には唐の李賢の注、志には梁の劉昭の注が付されていたが、宋の乾興元年（一〇二二）に合わせて刊行し、現在の形になった『中国学芸大辞典』。江戸時代初期には活字版が、後に製版でも制作され、知識人の間で流布した。通昭はこの『後漢書』の刊本（どの版本かは不明）から本文や注を抜き書きしたと推定される。

巻七十は『後漢書』の語や句に焦点をあてて抄録がなされている。冒頭には項目の一覧が掲げられているが、引用は箇条書き（一つ書き）でなされ、比較的短いのが特徴である。また、『後漢書』本文の引用もさることながら、割注からの引用も多く見られる。配列はおおよそ『後漢書』の順であるが、時折『後漢書』の後半の列伝の引用が入ることもある。たとえば、「京師」は光武帝紀（巻一下）の引用だが、続く「涉獵」「鏐鄒」「舐犢之愛」はそれぞれ巻四十七の班超伝、巻五十一の龐參伝、巻五十四の楊震伝よりの引用、その後はまた光武帝紀に戻っている。

後半には一部、荻生徂徠の『論語徴』（元文二年（一七三七）刊）

の引用が見られる。

卷七十一は『後漢書』の帝紀・列伝からの引用が多くを占める。列伝中の本文（本伝）を引用する場合（a）と注を引用する場合（b）との二つの型がある。卷七十に比して説話が中心であるため引用も長くなっている。通昭の引用の具体例に見てみよう。まずは（a）の本文の引用例として『後漢書』卷三十九（列伝二十九）の趙孝を取り上げよう。通昭は引用する際に出身地を省略し、細かな履歴も削りながら、エピソードを取り出している。傍線部が引用の部分である。

趙孝、字長平、沛國蘄人也。幾新……及天下亂、人相食、孝弟礼為_レ飢賊_レ所得、孝聞之即自縛詣_レ賊曰、礼久餓羸瘦不_レ如_二孝肥飽_一、賊大驚並放之謂曰、可_下且歸更持_二米糲_上来、孝求不_レ能_レ得復往報_レ賊、願就_レ烹、衆異之、遂不_レ害、郷黨服其義、州郡辟召進退必以禮、舉孝廉不應、永平中辟大尉府、顯宗素其行、顯宗詔拜_二諫議大夫遷_二侍中_一、又遷長樂衛尉、……

次に注釈をそのまま引用した（b）の例を示す。

一山林之士為_レ名故往而不能反也、朝廷之士為_レ禄故入而不能出、

韓詩外伝

右は『通昭録』七十二卷に載る文だが、『後漢書』六十九卷下の謝該伝の割注（次の引用の傍線部）に当たるものである。

謝該、字文儀、南陽章陽人也、善明春秋左氏、為世名儒門徒數百千人、……（中略）……猥使良材抱璞而逃踰山河、沈淪荆楚、所謂往而不反者也、

韓詩外伝曰山林之士為名故往而不能反也 朝廷之士為禄故入而不能出

この他、卷七十一、卷七十二には、熊本藩の儒学者の藪慎庵（一六八六―一七四四）の文章が収録されている。これらが写本から引用されたものか、版本の『慎斎遺稿』（宝暦十年（一七六〇）刊）から写されたものか判然としないが、おそらく後者であろう。藪慎庵は名を弘篤、通称久左衛門、号ははじめ震庵、のち慎庵。江戸に出て荻生徂徠の古文辞学を問うたが、朱子学に留まり、公務の傍ら家塾を開いて藩士に実践を主とした教えを授けた（『日本漢文学大事典』）。なお、慎庵の次男の藪孤山は赤崎海門（島津斉宣侍読）の師であり、島津久徴（加治木島津家六代当主）の招きで伊形靈雨とともに鹿兒島を訪れ詩文の交流を行ったことでも知られる。収録されている巻を次に掲げておく。

- 「与物茂卿」 『慎庵遺稿』卷一
- 「問目」 『慎庵遺稿』卷一
- 「与物大寧書」 『慎庵遺稿』卷四
- 「書物茂卿往復書後」 『慎庵遺稿』卷六
- 「書返魂丹後」 『慎庵遺稿』卷六
- 「書疑問書（首）」 『慎庵遺稿』卷六

先述の『長門癸甲問槎』といい、『論語微』といい、藪慎庵が徂徠と関わった文章といい、得能通昭が十八世紀に儒学の世界に影響力をもった徂徠とその一門の思想や文章に興味、関心を抱いていることが看取できよう。

なお、他と性質の異なる文章として、大島登世勝の「恭奉上行仁政大歛序」が注目される。『通昭録』（巻四十六）所収の「丁酉大島紀行」で、通昭が安永六年（一七七七）十二月、公命により奄美大島に下ったときのこと、名瀬で船に乗る時に和歌の応酬をした人物が「登世勝」であった。以下、濁点を補って引用する（傍線は引用者）。

六月六日

公の事ども沙汰し終りて赤木名を出、名瀬の湊にて船に乗ける。
登世勝といへるがよみて遣しける、

いにしへの賢き御代に立かへり島もゆたかに末が末まで
とよみしかへし、

日のもとゝ何かかぎらん敷島の道は尽せぬやまと言のは

通昭の公務に関わる文章は巻六十七、六十八にも散見されるが、題名の通り島津重豪の仁政を謳歌したこの「恭奉上行仁政大歛序」は漢文の形式のゆえに、巻七十二に振り分けられたのであろう。

参考文献

- 『鹿児島県史料集54 通昭録（三）』（鹿児島県立図書館、二〇一五年）
『鹿児島県史料集57 通昭録（六）』（鹿児島県立図書館、二〇一八年）
『鹿児島県史料 旧記雑録追録六』（鹿児島県、一九七五年）

『新薩藩叢書（三）』（歴史図書社、一九七一年）

坂口徳太郎『奄美大島史』（丸山学芸図書、一九八四年復刻版）

石原道博『朱舜水』（吉川弘文館、一九六一年）

近藤春雄『中国学芸大事典』（大修館書店、一九七八年）

近藤春雄『日本文学大事典』（明治書院、一九八五年）

李進熙『江戸時代の朝鮮通信使』（講談社学術文庫、一九九二年）

長澤規矩也監修、長澤孝三編『改定増補漢文学者總覧』（汲古書院、二〇一一年）

院、二〇一一年）

『和刻本正史 後漢書（二）』（古典研究会、一九七一年）

『和刻本正史 後漢書（二）』（古典研究会、一九七二年）

『和刻本正史 後漢書（三）』（古典研究会、一九七二年）

武藤嚴男編『肥後先哲偉蹟』（肥後文献叢書 別巻（二））歴史

図書社、一九七一年）

『舜水先生文集』と『通昭録』卷六十九との対応関係

『文集』の 対応箇所	通昭録 の順	本文の冒頭
卷一・11 ウ	93	與陳遵之書畧云、弟飄流無已時、
卷一・19 オ	94	與孫男毓仁書 ^弔 、日本禁留唐人已四十年
卷一・30 ウ	95	答王師古書、畧云、近者上公礼待日益隆重
卷二・6 オ	86	上公臨蓬華僕亦感亦媿然不敢侈為一身之榮也
卷三・16 ウ	87	朱子道問学、格物致知、聖人未有所戾
卷四・8 オ	83	日本風俗大夫以四十二歳為厄、
卷五・18 ウ	84	生順曰、大明者有火器否、前言不佩刀劍、
卷五・32 ウ	85	文公家礼皆士礼間有及於大夫
卷六・12 ウ	79	伊藤誠修誠貴国之薺楚、頗有見解、
卷六・13 ウ	80	与安東守約書曰、世間淳誠謙厚、
卷六・16 ウ	78	伊藤誠修学識・文品為貴国之白眉、
卷七・27 ウ	81	答守約書云、来札云、不佞非能言不能行者、
卷七・29 ウ	82	前聞久留米磯部勘平目下行三年之喪、
卷十一・14 オ	60	大明国俗五月五日、裏角黍投之大江巨川
卷十一・16 ウ	90	王弇州・李夢陽・李于鱗・徐中行皆大名公
卷十一・22 ウ	61	官家乃天子之称、他無敢称之者、
卷十一・23 ウ	62	急性子乃鳳仙仙子、不弁是非、
卷十一・24 ウ	63	妻之姪曰外姪、
卷十一・31 オ	91	雖古礼不修墓然補偏救敝猶愈於不為者
卷十一・39 ウ	64	鯉魚俗名鯉鱖膾炙殘魚惟堪作生不堪作脯、
卷十二・7 ウ	65	凡作書助語、如之乎者也等字
卷十二・10 ウ	66	伊藤誠修兄策問甚佳、
卷十二・21 オ	67	以百歳為上寿、八十為中寿、六十為下寿
卷十四・16 オ	92	明朝承百王之後、修明礼制建興膠庠、
卷十五・1 オ	70	作文以氣骨格局為主、当以先進秦
卷十五・3 ウ	71	大明講書講及註否安東守
卷十五・4 ウ	73	省庵問老師徵辟不就其義如何
卷十五・14 ウ	72	昔者鄭子產小国之卿耳
卷十六・14 ウ	57	送林道榮之東武序云、吾素聞
卷十六・19 オ	58	明室之制、卿相之子不学則為庶人
卷十六・21 オ	59	為加賀綱利作宗廟因序云、
卷十七・19 ウ	89	蘇文忠公像贊云、天才不及介甫
卷二十・06 ウ	54	聖廟即學校也、中為聖廟、西為明倫堂
卷二十・20 オ	47	銘旌以絳帛為之、広竟一幅、六品以下七尺、
卷二十・20 ウ	48	棺不用木槨厚約四寸以上太厚恐重而難
卷二十・21 オ	49	神主陷中於領下本身上刻深四分
卷二十・21 オ	53	立一小石碑於墳前、高四尺、濶尺以上
卷二十・23 ウ	1	舜水朱之瑜曰、
卷二十・23 ウ	2	黄河之水從西域入
卷二十・24 ウ	74	竜門在陝西西安府韓城県中、
卷二十・25 オ	3	取妻不取同姓
卷二十・25 ウ	75	取妻不取同姓、即是周礼也、
卷二十・26 ウ	4	日本之所謂柚乃橙也
卷二十・28 オ	55	対或問神主書法凡有官爵者皆書之婦人、
卷二十・28 ウ	56	対或問殷奠殷奠者君祭大臣之盛礼也
卷二十一・20 オ	88	王義之居会稽、有山陰老姥
卷二十一・20 ウ	50	文義如流水如積雪、因方則為珪
卷二十二・1 オ	5	加藤明友問曰、四書六經
卷二十二・2 オ	39	加藤明友問、太極生兩儀、

『文集』の 対応箇所	通昭録 の順	本文の冒頭
卷二十二・3 オ	6	宋儒之李可為
卷二十二・4 オ	7	水火玄黄之戰
卷二十二・7 ウ	8	明朝近来傳經
卷二十二・9 ウ	9	晦翁先生以陳同甫為異端
卷二十二・9 ウ	10	古人席地而坐
卷二十二・10 オ	11	拜者鞠躬、即今之立而揖也
卷二十二・15 ウ	38	大明之党有二、一為道学諸先生
卷二十二・17 オ	12	孝子・孝孫編次其父祖素行而請之郷先生
卷二十二・18 オ	37	野節問、懲忿塞欲者人之所難也、
卷二十二・18 ウ	13	養子之子即序於諸孫之列
卷二十二・21 ウ	32	安東守約問作詩文
卷二十二・27 ウ	14	明朝自太子・親王・郡王・將軍・中尉一概
卷二十二・29 オ	15	柳下惠之称、乃其妻謚之
卷二十二・30 ウ	16	安東守約字省庵、柳河人、問、飲酒・饋食、
卷二十二・31 オ	51	守約問、由布惟長奉書老師称頌高義、
卷二十二・33 オ	33	守約問、陽明之学近異端、
卷二十二・33 ウ	34	蘇氏瞻聰明絕世、読書每百過
卷二十二・33 ウ	35	明道先生甚渾厚寬恕、
卷二十二・35 オ	36	中村玄貞問曰、伊川先生治喪、
卷二十二・35 ウ	46	明朝文集極多、好者亦寥々
卷二十三・1 ウ	17	舜水答小宅生順曰、貴国山川人物之秀美
卷二十三・2 ウ	18	生順問媽祖・関帝、答曰、媽祖者天妃也
卷二十三・2 ウ	19	関羽著靈於明室
卷二十三・3 ウ	40	小宅生順問曰、蜀漢自古有英傑出焉
卷二十三・4 ウ	20	生順問、本朝文粹入高覽、
卷二十三・4 ウ	41	生順曰、聞先輩如薛文清・蔡虛齋者所謂君子儒
卷二十三・4 ウ	42	生順問、我国当今志学者、易用朱義、
卷二十三・6 オ	52	瑜之視日本同為一體未嘗有少異於中国也
卷二十三・11 オ	43	生順問、右北平去沙漠幾千里、
卷二十三・11 ウ	22	生順曰、古来中国称我邦曰倭奴
卷二十三・12 ウ	44	中国去日本水道一千六七百里、
卷二十三・16 オ	24	問鄭玄曰、格来也、物事也、
卷二十三・18 オ	23	看從古大方之文、
卷二十三・18 オ	29	生順問、雷災大行十余年
卷二十三・19 オ	76	生順問、今早上公見先生謝札曰、
卷二十三・19 ウ	77	問解額何謂也、
卷二十三・21 ウ	26	問、父之姉妹何称、答、姉曰姑媽
卷二十三・21 ウ	27	問、父之兄妻曰伯母、
卷二十三・22 オ	28	父母俱存者曰具慶下
卷二十三・22 オ	45	問韓祭十二郎云々、此十二字何数量、
卷二十三・27 オ	25	至正有相兼之義、非以正物也、
卷二十三・28 ウ	30	藤井徳昭問曰、刀劍弓馬鎗戟等技藝
卷二十三・30 ウ	21	或問公義解、
卷二十三・31 ウ	31	或問猩々、答曰、前在交趾、聞其国海邊有此種
卷二十四・8 ウ	69	成湯自責致雨、古今美談、
卷二十五・23 オ	68	阿房宮賦、晦庵先生・西山先生泥定其人二字

例言

一 底本は、鹿児島県立図書館本とし、東京大学史料編纂所本（島津家本 さⅠーⅠー12ー33）を比較参照した。

一 本文作成に当たっては次のような方針をとった。

1 漢字は、常用漢字にあるものはこれを用いたが、別字である「藝」「聯」を一部使用したほか、「台臺」（相手に対する敬称）などのように直すことが適当でないと判断した場合、一部の異体字・略字・俗字を底本のままとしたところがある。略字・通字・俗字で表記されている次の漢字は現行の形に直して翻刻した。

【例】 佢↓徳、弟（第の意で使用） 𠂔第、来↓来、段↓段、通昭の癖として「于」の意味で「干」、「候」の意味で「候」、「斎」の意味で「齊」を用いることがあるが、これらは原文の形を残し文脈を考慮して適宜正しい形を（ ）で右傍に注記した。

【例】 仁^{（書）}齊、干^{（手）}今

2 変体仮名は通行の字体に直したが、「ニ」「ハ」「ミ」は底本のままとした。

3 和文のうち、助詞「江」「而」は残した。

4 合字については和文と漢文で扱いを別にした。すなわち、和文においては「𠂔」「𠂔」などはそれぞれ「より」「シテ」と開いたが、漢文においては原文の形のままとした。

5 踊り字「ㄣ」「ㄣ」はこの形を残した。「ㄣ」は「々」「ㄣ」

「ㄣ」に改め、「ㄣ」については底本のままとした。ただし、「中ㄣ」の様な漢字一字の繰り返しに使われている場合は「中々」に改めた。また、読点を打つことで前後に別れてしまう次のような場合は、本来の漢字に戻した。

（例） 於人心々々↓於人心、人心

6 底本にある訓点が残すように努めた。ただし、返り点（一二点）の「二」が省略されていることも多く、これについても原文のままとし点を加えていない。また、東大本の訓点はその一部のみ反映させた。

7 闕字・平出・抬頭はこれを反映させた。

8 読みやすさに配慮して、句点（、）、並列点（・）を施した。

9 本文の上欄に、挿入すべき語句の記載がある場合、指定箇所を組み入れた。その際、一々注記しない。

10 虫損や破れなど本文の欠損部分や判読が困難な箇所は字数に応じて□で示した。

11 本文に異同がある場合、当該箇所の右傍に東大本の本文を「」で括って示した。

12 脱字・脱文は、「」で東大本の本文を補った。他資料で補った部分は「」を用いて示した。

13 頭注がある場合、該当する本文の前後の適当な位置に、【頭注】として「」で括って掲げ、必要に応じて対応する本文の位置を*で示した。

14 読み仮名については、東大本に読み仮名があつて底本にない場合、「」で括ってこれを示した。また、一部に見られる左訓はポイントを落として（ ）ないし「」で括って本文の中

に組み入れた。() は底本にある場合、「」は東大本のみにある場合に用いた。

15 卷六十九に一部朱書があるが、文字の右傍に――を付してこれを表した。

16 校訂者による注記は() で該当箇所の右傍に示した。また、必要に応じて、*1、*2などと傍書し、本文の末に注記を記載した。

17 丁付および丁移りは示さない。

18 卷六十七・六十八・六十九において、各文章の冒頭に見出しを付した。

19 底本には卷七十の「一騏驎負塩車…」の項と「一」一九章算術曰……」の項との間に欠落がある。東大本で丁度見開き一丁分に相当する。この部分は東大本で補っている。また、底本の七十二卷には乱丁があり、第四十八丁目と第四十九丁目それぞれ「48」「49」と丁の番号を押印されたうえで丁が入れ替わって製本されたと推測される。翻刻では本来の順に直している。

一 本文および解題の作成は、尾口義男と丹羽謙治が共同で行なった。

通昭錄卷之六十七・六十八

通昭録卷之六十七

- 一 桜島炎上記
- 一 平田可竹与伊東氏書
- 一 山内無窮斎
- 一 加藤権兵衛略伝
- 一 安永中御即位記
- 一 坂元織部捕別府氏
- 一 興運・西長捕罪人
- 一 佐栄秀孝行
- 一 伊勢貞昌〔与〕相良氏書

(桜島炎上記)

桜島炎上記

安永八年己亥九月廿九日夜より十月朔日に至り、本府城下及東南北数十里の間、地の震ふこと頻なり、已に当日未尅を過て、城下東方対岸〔キシムカヘ〕桜島の上に火を發し、大に炎上れり、火炎れハ地愈震ふ、地震へハ火愈炎ゆ、或ハ相応するに似たり、或ハ〔相〕激〔ウキタル〕に似たり、而其烟の出るや結んで万〔マン〕朵〔カ〕タリとなる、簇て数隊〔イククミ〕となる、沸騰〔ワキアガル〕すること驚濤〔ウナミ〕怒浪〔ウナミ〕の如し、競起すること疊嶂〔カサナルヤ〕層巒〔エ〕の如し、愈升愈高し、幾丈を限るへからず、愈漫〔ハヒコシ〕愈遠し、幾里を限るへからず、其光の耀〔カキヤク〕や烈々焼天は、則九里の上尽く紅なり、煌々照海ハ、則千尋の底悉明なり、星斗為之に色を失て出ること不能、魚竜為之に形を現して遁ルこと不能、疾電縦

横するは焰を閃〔ヒラメカス〕なり、流星〔トフホシ〕上下するハ石を飛すなり、迅電動山ハ其声の震〔ウツカス〕なり、烈風蕩海ハ其響の轟〔マサヒ〕なり、応〔オウカス〕是千巖崩て無底の谷に墜、万壑陷て不測〔ウコシレ〕の穴に淪へし、大凡一昼一夜所覩、奇々怪々にして難名難狀〔カクナメ〕タチ、変々幻々にして難認〔ミト〕難指、見之者ハ乍目の眩を恐る、聞之者ハ頓に耳の塞るを覺ふ、若是なること五日を経て、而後稍〔セウ〕微なり、然共其火勢未遽已なり、或は三四時を過て炎、或ハ一二日を隔て炎、其烟已に伏せり、而復起、其声已に止れり、而復鳴、又東北五六里の海底より炎上る、其響日夜隱々として不已、既にして海上頓に中洲を現す、水を出ること高サ式丈余、周リ半里計なるへし、蓋一月を既して全く無事なり、是に於て桜島の形、突然〔マキンタルカタチ〕として出る者ハ平となれり、隆然〔ナカタカキカタチ〕として起る者ハ凹となれり、復旧日の面目〔ヌカタ〕にあらず、如其〔ニ〕城下の人民初て火の作るを見るや、家々周章〔アワテル〕し、人々倉皇〔サワ〕し、座して席を不〔レ〕安、食して味を不〔レ〕甘、荷担〔ニナイモ〕して立ち、包袱〔フクロシキツ〕して出つ、互に相驚して、或ハ余焰将及といふ、或ハ飛石将落といふ、或ハ海嘯将至といふ、訛言〔サウセツ〕区々にして人情洶々〔ウワカル〕たり、既にして而城下に灰を雨す、飄飄〔ヒラ〕として風に随ひ、續紛〔ハラ〕として城に満つ、碧瓦朱甍〔モウ〕俄に素を積、青松・緑竹頓に花を著く、至若簾戸に入り筵席に集り、器〔タラシ〕皿〔ラフヒ〕に落ち、飲食に糝〔マシ〕る、而道を行者ハ張傘戴笠〔ギカサ〕といへとも、撲面昧目〔マシ〕、頗る患をなせり、然而時方に三冬に向ふ、日夜西北風多し、東南風少し、是を以て城下灰を雨す事、猶差〔ヤ〕少しとす、垂水・牛根・福山等の諸邑、下風に在る者ハ、則灰を雨す

こと簳^(ニギ)沙に似たり、石を飛す事投^レ礫に似たり、隴畝^(リウコ)を没し、溝渠を埋む、菜蔬^(サイソ)を殺し、草木を傷^ルに至る、而峽内^(セトリ)十余里の間にハ往々浮石^(ウカイシ)屯聚^(トン)す、厚さ六尺許、周半里計なる者あり、以て舟楫の往来を絶といふ、若^シ乃^チ桜島に至てハ、則地の震ふ事、他所^(ホカ)に十倍せり、室に入れハ恰も鞆^(ツツ)に乗るに似たり、庭に出れハ却而江海に漂に似たり、臥ときハ則転ひ、立ときハ則顛り、行ときハ則僵る、其患既に不可言者あり、而其火の作るに及んてや、盤石の落ること霰の如し、俄頃の間に積て五六丈に至る、灰燼の降こと雨のことし、須臾の際に深さ二三十尋に至る、飛鳥も翼を折、走獸も蹄を傷り、輕猿も枝を墜、老馬も道を失ふ、加之黒烟湧出、上下に充、四方に塞る、冥々濛々、陰々漠々たり、是に於て其民座する者は起ツに不及、立者ハ走に不及、或ハ抑圧^(ウチツメニアフ)せられて死す、或ハ乱撲^(ウタル)せられて死す、或ハ掩埋せられて死す、不然是則或ハ船を争ふて江海に溺れ、或ハ方を失て溝壑に陷、或ハ路上に羸頓^(エキタブル)し、或ハ巖間に飢餓す、数日の後に及て戸^(カマド)口^(ヒト)を点検^(アラタメテミル)するに、島民死する者総て百四十拾余人なり、鶏犬牛馬の死者に至てハ枚挙^(コトクアクル)すへからず、而東北海上七八里の間にハ魚の死する者無數也、蓋海底の炎の為に傷らるゝと云、是に於て都鄙伝言、^(イツカタ)某^(コノボ)処^(ワチカ)に屍あり、焦^(ヤ)頭爛^(シ)額なり、其処^(某)に屍あり、折^(コンボ)脅^(ワチカ)摺^(シ)齒^(シ)なり、某処に屍あり、已に壘粉^(サイフ)となれり、某所に屍あり、殆と臭腐^(ササル)となれり、某岸に漂到の屍ハ小兒也、某色の緋を着たり、某岸に漂到の屍ハ婦人也、某色の帯を帯せり、慘毒^(キモノ)の甚き聞に不忍也、嗚呼是日如何なる日や、無辜の民をして如此の極に至らしむるなり、然共桜島の地

に十八村あり、而火の作ることや適^(ツセ)に古里村・有村・脇村・瀬戸村・黒神村・高面村の上に当れり、是を以て六村の民死する者多し、其外十二村の民ハ則免るゝ者多し、乃チ麋鹿の属の如きハ、海を洄て北の方吉野に至る者あり、而火作ルの日、^(島津重豪)公^(ツツ)命^(チクバ)して速に舟船数百隻を出し、軸輻相接^(チクバ)ヲネカラフネツ、として島民を濟す、是を以老を扶、幼を携て免るゝ者二千余人也、又於城下^(コゼ)菅舍數十間を作て以て之を置、倉実数百斛を出して以て之を飼^(ヤシナフ)、是を以て其初て至や、則露处^(テメツユニタル)飢死の患に免るゝ事を得たり、既にして又庫錢二千緡^(クワ)を出して以て之を賜ふ、是を以て其反ルに比てや、則以て居処を繕、産業を治むる事を得たり、嗚呼、我公の島民に徳あることや大なりといふへし、抑又聞^ク之、桜島の絶頂に権現社有り、号して是山之主と称す、世俗相伝て、其神兎を愛すといふ、是に由て島民若兎を見る者あれば、輒^レ拜^レ之、平生其名を諱て不敢言^ルに至る、其是を尊信すること如此、而每年是日を以て祀^ル之、未嘗て懈らざる也、則為之神者亦宜く禦^(シム)災^(シム)難^(シム)て以て祚^(シム)之へし、而に今日反て是山をして是禍を發せしめて以て害^レ之する者ハ何哉、豈民の自其咎を招坎、将神怒る所ある坎、抑禍福の数は神といへとも奈之何ともすることなき也、然とも神自尊^キこと不能、必人に依て而後に尊きなり、故に曰、民者神之主也、若一島の民をして靡^レ有^ニ了遺^シしめハ、則神も亦当に其祀を廢すへし、今や幸に我公の徳に頼て、余の黎民性命を保、郷土^(ラサト)に帰り、復神の主となることを得たり、則神も亦巍然として斯土に廟食すること初の如し、是に由て觀^レ之、我

公の徳ハ唯民に被るのミにあらず、亦神にも及ふなり、蓋

公素より愛民の心あり、一たひ其災を被を聞、愍然として而之を憐む、是を以倉廩を發き、府庫を啓て之を振救すること如此、其速也、則一島之民其徳を感ずること宜く如何とすへきや、唯一島の民威之のミにあらず、一國の民も亦感之へし、一國の民感する時は則鬼神感すへし、鬼神感するときハ則天地感すへし、是に於や必將に和氣降て五穀熟し、嘉瑞見レて百禄臻らんとす、則我公も亦以て千秋万歳の福を享へし、於戯休哉、既にして而

公以為、非常の災不可不記なり、因^テ臣山本正誼に命して書之せしむ、謹て按に、続^日□本記に^{天保三年八月七十四}「^二大隅・薩摩之堺^一烟雲晦冥、七日之後天晴、於鹿兒島信爾村之海沙石自聚化成三島、望^ニ似^ニ四阿之屋^一」^{（とあり）}、此説島の名

を不^レ著といへとも、其地と形とを以て之を考れば、則^{（其）}桜島たること疑なかるへし、其後文明八年桜島炎たり、其事福昌寺所蔵旧記に見へたり、今所謂炎へ崎ハ其遺跡なり、其後^{（其）}是年復炎たり、蓋土中に硫黄の氣あり、故に有^レ時而炎と云、然共宝字八年よりは年に至り千有余年なり、而其間炎る事^二七^一に過されハ、則絶^テ無くして而僅有の事なり、非常の炎といふへし、然とも天災流行国家代有り、適に其期に至るときハ、則固に人の予防^{（其の徳を）}□□□□□□□□なり、但し非常の炎に当て而非^{（非常の徳を）}□□□□□□□□施す、是我

公の之を濟ゆえん也、其事宜く伝ふへき也、故に臣謹て詳に之を書すること如此、

公又画工をして桜島炎上之図二枚を写さしむ、一ハ昼の所^レ觀を写す、一ハ夜の所^レ觀を写す、所謂難^レ名難^レ狀難^レ認難^レ指と云者

をして眼目の下にあらしむ、則画も亦巧なり、而一たひ其卷を開く者各自觀之へし、故に不復言と云、

安永八年歲次己亥十月知学事臣^{（七七七）}「山本正」誼謹記、

公命既に倉庫を開て島民を救へり、□□於て城下の富商・大賈先を争て之を救ふ者あり、或ハ錢若干縑を以衣服を買て之を与ふる者あり、或ハ米「若干」斛を以て饘^{（粥）}□為て之を飼ふ者あり、或ハ粟若干斛を官に納て振貸の用を資^{（資）}□□、其尤者を曰某日某日某なり、嗚呼上好^{（上）}上則下好^{（下）}義こと固に如此なる者あり、下の義を觀るときハ、則益以て上の仁を知るへし、故に附^二録之^一、

（平田可竹与伊東氏書）

一拙僧俗ニ而罷在候内、御親父様祐房丈より甲州流軍学之儀ニ付、段々御相伝受得、極意之所迄御□□仕、誠武士之理を受候事、一生ならぬ冥加に候、貴殿御事も祐房丈之志を継軍学御修行と承、大慶之至候、親たる人之数寄好候事ニ、我不得手之事ニ而候と雖、其志を繼修行して、一世下手ニ而終るとも辱心入ニ候、如何となれば、親存生之内合体ニして互に道を論し樂まんハ、第一之孝行ニ而候、己々之得手不得手候得は、其不得手之事打捨、得手を仕得て、主君之御為に成候得はと申は親之心ニ而候、少も我に依恨なき故也、如何に不得手ニ而も身命を捨習請給ひし事を、余所に見んやと信実^{（可及其實可）}に思心ハ為子者之志也、愚に似候へとも□□□□□□及其愚と、論語にも御座候、必以て□□□□□□被成間鋪候、依之祐房丈之為報厚志愚意を不殘書付致進覽候、御一覽候而、万に一ツ軍学之便にも罷成、武士道に御志も深く染入候

は幸ニ存申候、

一何れ之道も、今日の上を徒ニ罷居候而は成就不罷成候、於御当国名人・上手と申候人之事を承及申候に、其道身命を抛候より別に近道無之と相見得申候、無左候而上手・名人に成候は一人も無御座候、祐房丈と拙僧此已前ハ屋敷次に罷在候故互に能存候、始ハ天流之鑑を稽古被成候、垂水に師匠御座候而御通被成候事、十年余鑑一辺ニ而、昼夜余事無御座候、其内弓兵法其外武藝何色ニよらす大□□御付候、只今時之人御奉公に隙なしと云、遠路之師なれハ不叶と云、或ハ貧にして不成と申候、皆偽ニ□□、御奉公に無隙人、碁を打将棋をさゝれ候、歌□□詩も作られ候と相見得候、夜咄なとハ鶏の鳴まで被致候、如此之類皆する事ならん迄、御奉公に隙入候ハ不氣根成ん、当世の人身命つゝき申間敷候、貧にして成らぬと申せ共、東郷重位ハ金細工稽古ニ上方に登て、少之隙を得てハ兵法を習ひ、示現流を伝へて、下菌之梅木を打枯して名人となる、又東郷長左衛門重尚も貧にして巻藁を射るに灯もなく、畳に草履を閉つけ、其を踏て稽古被成候、加治木に居住故、鹿兒島に掛て一日越に通て三年「に」修行被成、兩人ともに貧者ニ而候へとも、名人とて干今□□□□□□、兎角申事ハ、皆藝能に心之乗ん故に候、祐房丈其後甲州流軍学被成候に付、拙僧ニも同学仕候、爰元ニ而も師五人程ニ立入、其師之是迄と云所迄究尽し□□上方へ御登、勢州桑名迄御越奥義を「伝」得成就被成候、是ハ居ながら名聞利用之為にするとハ各別成ル仕方ニ而候、御吟味役迄被仰付、地頭職迄為被成人之家来、只一人にてお上り、世上の評判をも不看、一大事を究ん為、皆不分別の働ニ而候、人之誠、跡先之考にかゝり候人は、一藝を得心する事難成候、是ハ平生

御奉公方世間之交の事ニ而は無之候、武士之藝能修行之事ハ不分別に働く人無御座候故、名を揚る人なき事尤ニ而候、信実ハ天心を動す事に候得は、何れ之師□□憐を垂て奥義を究御下り候故、不求殿中□被召、神妙に被思召之旨御褒美被仰出、拝領物等御座候、武藝ニ付ケ様之事ハ昔ハ不存候、私并一代にハ無御座候、此本ハ信実一ツに極申候、当世之人一藝□□学とも習たる迄にて、疑も差而懈怠ねは疑おき□□へきともせず、人并に浮世を徘徊し、上皮計を張廻して、只「人」々ニ而遊興に耽り、徒行にて暮され候、道と申者は、心に会得すれハ□□、弥堅、弥柔にして、見る程尽す、聞ほと進ミ、身を終迄成就ハなき物にて候、成就ハ無と知るか少し心掛たると申へく候、油断して打置人ハ、其道に得心なき故に徒成事を好慰候、其道に通徹しぬれば、長き夜の眠をも忘れ、長日の暮ん事も惜き心にて候得は、何そ徒に日を送ん、時々刻々無間断修行して後にハ苦とも不思議とも不思、今日も「其」事にて日を暮すハ只人ニ而無御座候、愚親私若輩之時□□教訓仕候ニ、一藝を習ふ人、其道に思入、余事を忘却し、人よりたわけ者と呼れさらん人ハ上手に難成、一度たわけと呼るゝ程志を一途に究めよと申聞せ候故、弓法を十一歳より十七歳の春迄心かけ、愚親に後れ其後四十歳迄、冬の夜の寒をも嫌ハす弓を枕にして臥、幾夜か夜をも射明して直に的をも仕候、心に存あたる事候得は、難止して曉方にも火縄に火を付て仕候、夏ハ丸裸にて自分矢を取、汗水に成て日をくらし候、三十歳、其内軍学も十七年程夜白心掛申候へとも、鈍根にして一藝も其妙を不得候故出家仕候、以後其慚愧不少、朝ハ七に起、夜ハ睡の凌かたきを限と仕候事十三年、□□□煩惱の雲厚く、吹払ふへき風之弱故に発明不

仕候、乍然仏弟子に罷成候事之辱さに、臨終を限と存極候得は外に望無御座候、ケ様に書付申候事如何に候得共、如此修行仕候而さへ難叶候間、能々御油断なき様にと存候而、祐房丈と愚僧存生之内、互ニ証拠ニ而偽少も無之故書付申候、必御他見被下間敷候、享保三竜集戊戌二月上瀬日

可竹判

伊東五右衛門殿

平田民部左（前）工門入道可竹、本府の人なり、射を善するを以世に鳴る、晩年僧と為て禅学を学ふ、其子平六業を嗣、射藝父に減〔せ〕す、仕て御船奉行たり、

（山之内無窮斎）

一山之内刑部左衛門秀久、無窮斎と称す、又武休斎、摂州尼ヶ崎の人なり、東武芝同朋町に住し、武藝を教ゆ、篇額に一首を賦して、門戸に懸て曰、法ハ釈迦、武勇・武藝ハ我そかし、天上天下唯我独尊、門徒千人に越るといふ、後麻布に卒す、

（加藤権兵衛略伝）

一加藤権兵衛ハ、世々府下の人也、父二之宮内内匠（前マツ）、東武田町別業御屋敷守と成て東武に至る、免されて妻子を従て東武に移る、権兵衛母ハ麾下石河藏人某の娘、実ハ後藤又兵衛基次の子又兵衛某の女也と云、幼名万作、十二歳にして加藤氏の嗣と成る、十六歳大玄廟（島津綱貴）に仕て表御小姓となる、武藝を好ミ、教授の人を聞は必行て学ふ、頗其奥を窮む、所謂示現流を本田次郎右衛門に、居合・柔・腰之廻・組討・棒・鎌を山内武休斎に、天真流を岡雪斎に、鏡知流鑑を梅田李之丞に、戸田流鑑を戸田伊進斎の門人小串三清

に、大坪流馬術を青山播摩守の士武井五郎太夫に、雲弘流劍術を鳥居孝雲に、小笠原流（有カ）勇職を黒田伊勢守用人森平角に学ふ、正徳年中権兵衛三拾式歳にして鹿児島に移る、後眼を病て明を失ふ、

（安永中御即位記）

（二七〇）
安永九年庚辰十二月四日

当今御即位

京都詰算用役限元源太左衛門見聞の趣被申越候書付

一十二月四日 大霜、晴後曇

一前日、京中火用心之儀稠敷被仰渡候、

一御次第書ニ、前一日紫宸殿江御装有之、元会之儀の如と有之、元日之御式之通之由、

一当日早旦 御湯殿之事有之と、是は早朝御行水被遊由候、

一刻限大臣着陣、官人ヒサツキ軾を敷しむと有、大臣は此節 御即位之御用係と聞得候、鷹司左大臣庭上に官人夫々御勉強に軾を敷せらる、軾ハやはり腰掛にて候、官人之品によりて様々取仕立有之候、大臣方ハ格別、其外ハ床机の様なるものに木綿の黄色にして虎の毛色染付たるを敷付有之、左大臣の居給ふ所ハ陣屋とあるハ、三四帖敷の杉の丸太にて作り候布屋にて候、其内に腰を掛居給ふ、都而紫宸殿の御庭、

一御即位に付、内弁鷹司左大臣、是ハ武家にて其御用達之事之由、前以左之通定文有之候、
内弁

鷹司左大臣

外弁

新大納言徳大寺

今出川大納言

下ノ
冷泉中納言

滋野井中納言

別当 日野様

左大弁宰相觀修寺様

右之通、十一月十五日内弁・外弁其外少納言・擬侍從寄役之由・宣命使当日御即位之事を祝し書記しよき告給ふのよし・少将代・大将代・中将代其外諸官人御人数不足にて、武家にて寄役を分而、其当日計定文サタズワンとして、勅を被蒙のよし、内弁ハ承明門より内之事を司り給ふ、外弁ハ夫より外を司り給ふ由、承明門とハ南門之事、其当日計南門を承明門と申候由、往古大内裏の式のよし「候」、内弁は右の布屋に居給ひ、外弁ハ此通庭上に

徳大寺

大納言

今出川

大納言

冷中納言

滋中納言

日別当

勅宰相

右、九ツ時分より庭上に出給ふ、これをねり出と云、南門前より紫宸殿庭上中程迄十間計のを、いか様シ四半時も掛り歩ミ出し給ふ、九岡一足一息とて息を九つき出し、一足つゝあゆミ出し給ふ、御冠ハ金めつきと見へ、高さ六七寸と見申候、其内に珊瑚珠にても候哉、段々玉くさり有之、御装束ハ金地、ようらく下り、歩み給へハ鳴り申候、笏を持給ひ、皆々廿チより三十迄と見へ申候、御

年行きにてハなり兼候と承候、歩ミ給へハやうらく鳴り、御冠ハ金にて赤き玉のくさり、金地の御装束、紫宸殿の檐廻りハ、此節新敷都而金めつき御造直しにて、庭上は高サ十二三丈に鳥形日像・月像・青龍・朱雀・白虎・玄武などを絵書し、大なる幢金銀にてみかき立、以上廿七八本立双へ有之、殊其日ハ晴天にて、朝日にかゝやき渡候、庭上の御行装中々目を驚し候と申ハおろかに候、此間九ツ時分より出御迄ハ、吉時を撰政より職事殿上の式を司る官人に仰て陰陽師に問ひ給ふ、時至ると申上候まで、皆庭上に見合給ふ、暫間有之、

一 此間庭上月花門・日華門より内ハ、堂上方・供廻り杯も出入不相成幕構にて、方々角々へ半畳ニ与力麻上下ニ而相詰居候、のそきも不相成、堂上と地下官人其外能々手寄を以大紋を着し候人ハ罷出候、其外ハ一向のそき不相成「候」、勿論百官万民に初而まミへさせ給ふといふ事故、京都町中へ百人ほと罷出候様御触有之由候、其人数は切手相渡「由」候へ共、夫ハ皆手寄を以外々より申受由候、

一 たとへハ紫宸殿ハ御国元ニ而御対面所にして、清涼殿ハ御書院、其当日早朝 天皇清涼殿にて常の 御衣を御召替御手水と有之、御礼服玉冠、日月星辰竜山花喜を多かき赤地に伝、書に在り、陰陽師より吉時を告奉ると、清涼殿より紫宸殿へ通御なる御通筋廊下フタシにハ布反を敷と有、にしきを敷付有る由、御先キ命婦女官左右に相双へ、又内侍二人相双ひ、皆御先也、劍璽持在、是讓伝への神璽・宝劍と承候、其跡に 天皇、御跡に撰政の九条様御従ひ、藏人頭笏を箱に入持候と御次第書に有之、九ツ半時比にも相成候時分、殿中今通御と見へ候而、どろ／＼と鳴り申候、何も見上奉らず候、

一 少し前以女孺六人、御先に出候女官、武家之御次女中格と承候、是ハ髪を掛、花色地の着物腰織分ケ草花模様、皆廿計と見へ候、右之手に大なる金地の扇子一本二百目にてをかさし、左之手に柄の六尺計頭殿団の様なるを持出、三人ッ、高御座の前に双方に分り、床机の様なるものに腰を掛、やはり扇をかさし、右之長き柄之うちわの様なるを持居、竜顔覆ヒと伝書二有之、

出御有て、高御座の帳マツを褰帳
二人女官にて御幕を揚候時、
御前には六人の女孺団にて 竜顔を覆ひ奉る、

一 高御座

一方一丈三尺、東西少し長し、

一 三方ハ階有り、其蓋ハ鳳輦の形に似て八角、其角毎に鳳凰を立、玉の幡を立て、八角毎に鏡掛る、

一 頂の上に大なる鳳凰一ツ立、高御座之上にハ大なる鏡一面掛、玉座にハ纏ウシケン端の畳二帖御茵ふと二重を敷付有之候、

一 高御座ハ都而黒ぬり、高一丈二三尺計と見ゆる、

右高御座ハ御出来行司官所へ有之、一朝拝見に罷出、得と拝見仕候、神輿にて候、

一 右高御座へ 出御なりて、摂政御後へ候し藏人頭御笏箱をさし、内侍已下高御座壇の上に侍、天皇御座に着御、此時藏人頭御帳を捧かゝく、御座定りて、内侍北の階より昇りて、東より宝剣を御座の左之方へ、神璽を右之方へ置奉る、既にして退き、摂政より御笏を奉らる、摂政ハ御座の丑寅に円座と有、次に兵庫頭座を起て御帳をかゝくる、鉦を打しむ是瀬尾 治兵衛助、御帳を揚候時、六人之女孺双方より団を以御前にさし掛奉る、御帳に褰婦の女官二

人左女子 右典侍より揚げ、此時天皇南西ニ而有司百官万民におかれ給ふ、こと／＼く面伏す、主殿つゝき、六尺計なる大なる唐かねの香炉に香を焼、四五寸計の伽羅木のまゝにて焼申候、是即位を天

に告奉らるのよし、御前の高欄涯双方に香炉二有り、一所に香立上り庭上に匂ひ候、右御帳かゝけ候時、則香を焼、其時典儀の官より再拝と称す、再拝／＼と高高からすからす二声長く呼び給ふ、武官ハ起て旗を振て万歳を称すと有り、然とも武官ハ何の事も当時は無之、其俣にて旗之本に付従有之、此時拙者主殿司焼候香を持候而庭上に有り、高御座ハ十四五間計も有之、御帳上り候時、頭を上ケ見候へともくらく候而、玉体御見へ不被遊、内侍二人御前に手をつき畏り被居候ハ、十二ひとへの袖の模様かすかに見へ申候、此間ハ暫の事にて御帳を垂れ給ふ、左候而大礼事終りぬる由を声高く呼び給ふ、又鉦師に仰て、三度鉦を打せ、天皇清涼殿へ還御し給ふ、伴・佐伯両民の官人南門を閉つ、諸衛を解く、七ッ時に成候而百官退去、拙者扨右香炉扨取直し候而罷下り候は、日暮時分に成候、

右、一通り拝見仕候而書付候にハ無之、折節京詰居候故、瀬尾道舟ハ古壺井家故実門弟にて書籍持合有之候付、御即位一件之書・絵図迄借受、其上赤井清兵衛殿同門結城筑後守殿と申人へ折節咄ニ参候処、彼方より御所の次第書を承候付、猶又筑後守より得と咄承、其当日主殿司地下官人岩室主殿と申人、香炉役ニて庭上へ被勉候付、彼方へ無拠頼込、主殿司香持ニ成り、大紋を着し、主殿司ニ相付、堂上方御列居之庭上へ早旦より七ッ過迄罷在、御次第書懷中仕引合見聞仕候、摂政様七十計と御見得候、本宮様にて御還俗多才之大豪英と沙汰ニ而候、此元

より七八寸雪積、今日迄一切不消候、近年無之珍敷大雪と申事候、元日より三日ハ御節会にて、四日之朝迄夜明しの御規式有之候、七十才に御成り夜明迄御詰通し、御所司代ハ去年崩御ニ付、泉湧寺^通にても御気分悪敷、此節会にも其通御成り被成候、去ル四日飛鳥井様御鞠初ニ付、道丹鞠の頭取被仰付、引廻にて御門弟部屋へ罷通、門弟と一所に御座末にて右之御咄物こしに、武家ハ甚よわきものしや、堂上程行儀の勉ハ中々成兼候と咄を承候付、鞠も七八寸積雪のふり候に、堂上方拾の白むく一ツに白はた着一にて御装束被遊、中々驚入候、一人も足袋ハはき給わす候、此内も御即位之御勉方有之、堂上方ハ前々日より皆々餅迄被召上、飯ハ不召上由候、其当日早朝より七ツ過迄ハ、脇も不見給、いきも鼻も不引給、さむき顔色もなく、難儀之御様子も不見得、驚入計候、

正月九日

限元源太左衛門

(坂元織部捕別府氏)

坂元織部別府主計を捕自記

寛永十二年七月十二日夜八ツ時分に江戸上御屋敷火事出来申候、^(六三三)其節我々事は、柴町之海之畑に掛作之家被成御借、山下理右衛門殿・牧野長助殿・川畑源七左衛門殿其外七人同宿申候処、亭主申来候は、火事御座候に、各は御存不被成候哉、御屋敷之様に見得候由申候ニ付、則罷出御成橋江はせ上り見申候処に、御屋敷ニ而候、先留木戸より走入、御女房衆長持兩人ニ而引出、又入可申と存候得共、最早急ニ御座候故不罷成候、然処御大名衆より火消人数過分に被為続、町中よりも過分に参、火静り申候処、^(説)夜内に

四方御囲被成、四角角に御番所作れ申候而、何れも御番被成候、我々も御番仕候、左候而伊勢兵部殿より被仰候は、火は金銀蔵と御進物蔵之間より出来候と被仰候、我々申候は、金銀蔵より火は出来申間敷候、子細は御借銀乞人数諸職人余多参候付、御蔵明ケ間敷由、鎌田源左衛門殿より度々承候故、七月初より御蔵明ケ不申候は、御広間之御番衆江御尋被成へき由申上候、扱又火事出来候時分は、諸士御屋敷之様に相続申候、別府主計は中御屋敷之様に罷帰候、是ハ不審者と何れも被仰候、左候処ニ蒲地掃部殿と主計同宿申候処、^(説)七月廿二日に掃部殿江主計被申候は、此中火事已後少気色あしく御座候付、御屋敷江も不罷出候、我等前方大坂江滞留申候時分、知人之医師日本橋に御座候、是に参り脈をも取菓のミ可申候、今日は帰間敷候、明晩は必罷帰可申由、掃部殿江申置候而罷出、八月二日迄相待、方々尋申候得共不罷帰候由、伊集院小右衛門殿其外傍輩衆余多掃部殿所江被参候、主計長持打明ケ被申候得は書置有之候、様子は我等すりきり申候間、大橋・加治木橋・呉服橋、此三ツの橋にて腹を切り身をなけ可申候、其証拠ニハ我等刀之かうかい欄干の橋柱之根に埋置可申候ニ付、^(此間等アルヘシ)。右之書付何れもより芝御屋鋪へ持参被申候、蒲地掃部殿事中御屋敷へ被召出、市来八左衛門殿宿にて繩をかゝり、籠者にてすねをはさミ御責被成候得共、主計行衛不被存候由被申、終に成敗ニ而候、宇田六右衛門も成敗被仰付候、我々事は靈社之起請被仰付、御使衆市来八左衛門殿・鎌田源左衛門殿・伊東仁右衛門殿前二而血判仕、護摩所に被召置候、左候而田中五右衛門殿・志布志衆赤崎志摩之丞殿・我等三人御国元江罷下り、寺を頼次第に御侘可申上由ニ而、海道御賦・御手形被下候、我等事は御手形差

上申、爰元ニ而出会為申儀〔三〕候得は、御国元江罷下り申上候而も御返上御座〔有〕間敷候間、諸国を尋可申と存、御暇申上、先吉原傾城町へ日に一度夜る老度ツ、續而五十日余通ひ申候而尋申候得共見出不申候処、或申候は、芝口に一句と申浄土坊主、五穀を断ち千日立行の御日待被成候而奇特を被申候人と承候故、此寺江参り兎角を不申候処に、坊主我等を被為見候而、おさな名は何と為申坎と御尋被成候故、おさな名を申候へは、人之養子坎と被仰候、養子ニ而御座候と申候得は、大事の身の上にて、生国へ帰国申度とも、爰許へ罷在候ハ、來年五六月之比ニは身上究り可申由被仰候、夫より目黒不動へ火之ものを断一七日籠、結願之曉御夢想到、我繩にて被成御縛、是織部とらへよくと、承と存夢覺、扱又忝さ無申計存候而、則下向仕、大山不動に参詣申、一七日火の物を断ち籠り、又一七日くりから不動之滝にうたれ、其後大山禅定仕、大天狗・小天狗両社之宮江参詣、随分祈誓申上、夫より下向申候而、直二甲斐国へ飯綱御座候由承候付、参詣仕、火の物にて一七日籠御祈誓申上候は、いつな之御方使にて此盜御知らせ可被下候、某身にも不審之儀御座候は、是より虚空に投させられ可被下候由申上、夫より武藏之八王子に出、爰にて上様御上洛之時御供仕御道具衆千人御座候、此町江五日滞留仕尋候得共見出不申候〔夫より武藏の府中に出尋候得共見出不申候〕故、江戸へ罷帰、吉原に日に一度夜〔ル〕一度ツ、通ひ尋申候得共尋逢不申候処〔に〕、知人に吉田志摩と申博士申候は、小宿を取尋申候哉、我等知人吉原の大門脇に休右衛門と申人尾張士にて候、是を小宿にいたし尋可申候由申に付、さらば休右衛門江頼可給由志摩江頼申、志摩我等を同心仕休右衛門所江参り、種々咄仕候而頼

申罷帰、夫より五十日程通ひ申候時、休右衛門申候は、くつわ太郎兵衛と申ものゝ内におのえと申女を請候而召置由承候、若此女にて候ハ、尋候而可遣由申候付、随分頼入由申候而、又三十日程通ひ申候時、休右衛門申候は、如何様礼銀被下候哉と申候故、我等申候は、老歩金之一切も何とぞして可遣と申候へハ、休右衛門申候は、中々之儀承候、小判金五十兩・百兩被下候而も罷成候、是か世間に知れ申候へハ、休右衛門は石こつミにあい申事ニ候、最早二度出入無用と申候付罷帰、右之吉田志摩に咄申候得は、扱も御身は誠之田舎人ニ而候、其ねきる所を社願に存候、是けそ主計よと引渡候〔ハ、〕貳百兩にても其上にても遣可申候、則我等を志摩同心仕、休右衛門所へ参り、先程礼銀之儀被仰候由承候、小判金五十兩可遣と申候得は不罷成由申候付、五十兩より六七十兩と申候得共相済不申候、夫より百兩と申候得共納得不申候付、種々申百兩に究、書付仕候而休右衛門江相渡申候得は、又々申候は、くつわ太郎兵衛内之六尺かりこめ尋度候、彼六尺に廿兩可遣由申ニ付、又々廿兩重め百貳拾兩と書付相渡申候得共、主計行衛相知不申候、休右衛門申候は、此尾上を町人にかわせ被成候ハ、休右衛門なかつと仕買手外なとへ出申候時、尾上にちわをかけ尋度と申候間、我等下人善吉と申者へ貳百目に売候而、おのへを三夜かわせ申候、其時尾上に休右衛門申やう、扱々此吉原に女郎之千人も其上も有之に、知音の男五人三人ツ、有之候、御身は一人も無之由承候、別に二三人も為有之由、其薩摩様内之太蔵とのか主計殿とか申人は、別而念比之人と承候、今にハ殿様御前悪候而出入も無之由承候、御前能候ハ、又此方へ可被参候、居処知申候ハ、文ても飛脚ても可被遣候、休右衛門てなふ

てハ申間敷とたまし候へ共、扱々忝存候、御方ならてハ被仰間敷候、とこやら居やるけな程に文ても飛脚ても遣可申と、おのへ申候付、休右衛門申候は、何れ御身の心中かむこいかと存候と申、居所尋度候得共、最早たましりそふに御座候故尋不申候、休右衛門申候は、くつわ太郎兵衛親類の方より外にハおとし申間敷候、上野国高崎に太郎兵衛太郎むす子江戸屋と申而居付候、又越後国沼田に一人罷居候、此両国の外にハ落し申間敷候由、休右衛門申に付、其俣江戸を出、越後・上野辺を尋申候得共見出不申候故、又江戸へ罷帰、河野道春・帖佐長右衛門殿へ申候は、最早根氣も尽果申候間、御検者申受腹を切可申候、書記被成候而此段御申可給由申候得は、道春は一段能候半と被申候、長右衛門殿はいや／＼命を捨て、ハ不入物、命あればこそ海月も骨に逢といふ事あれば、長右衛門口に付是非今少し尋可申由被申候、折節伊勢兵部少輔殿より有川平右衛門殿を以被仰聞候は、盗相知そうに被聞召上候間、御道具衆之五人も其上も御付可被成候、随分精を出し尋可申旨被仰聞候而、御酒肴被下候故忝奉存、則我等刀小判二両に売、江戸を出、越後沼田に参り、夫より奥に可参と存候得共、御番所稠敷御座候付通申儀難成、上野辺を尋申、高崎を尋申候処、大寝之七兵衛と申者計宿を借申候、其外諸国にても宿を借不申候付、野宿又は堂宮なとへ夜を明し方々尋申候、左候而右之七兵衛^三へ咄申候は、我等兄ニ而候もの親と中を違ひ、金銀を過分に持出し江戸を欠落申候、年ハいくつ計の者にて候、此辺左様之者罷居不申候哉、自然左様之者罷居候ハ、御知らせ頼存候、頓而尋可参由頼置申江戸へ罷帰候、然処に頼長法印と申山伏御湯殿参詣被成候付、少々参銭を上げ頼申候は、随分御山にて御祈念頼存候由申

候、又吉原へ日に一度夜^ル一度ツ、通ひ申候而尋候得共見出不申候付、又上野・越後之辺を尋候而、大寝七兵衛所へ参候而承候得共、左様之人は不承候と申候付、江戸へ罷帰、四月廿九日に頼長法印所へ参候へは、法印被仰候は、扱又夕部こそ下向申候、御頼被成候儀、御山にて随分祈念申上しはり召置候、多分煩候て居可申候、十日之間は有間鋪候、尋出し可被成候間、随分精を出し尋可申由被申候付、其俣江戸を出、上野表へ参り、右七兵衛に尋申候へは、是より三里渋川と申町に其方尋被成候年比四十計^拾之人、殊之外銀持と風聞申候、仕合明日五月七日立市にて、市ニは必出申候由承り候と「咄申候二付」、其夜七兵衛所に一宿仕、明七日渋川町に参、蕎麦切屋に入候而、そは切被下候亭主に申候は、少草臥申候間休息可申候、御免可被成之由申候へは、薄へりを數馳走申召置候、左候而立市を見被申候へハ、深編笠をかふり、小田原足駄をふみ、脇差計にて我等罷居候方に向、人に物申、咽ふへ出候を見申候へは、無紛主計にて候、頓而引返し、小路より町口へ走出、人に物申候、其時はす顔ニ而罷出候故、扱ハ爰元ニ居付候半と存しらぬ体ニ而其町をぬけ、町頭に坂東太郎と申大川に走込、水をかき、方々の神仏に祈誓をかけ、本の小宿に参り、亭主を表によひ申聞せ候は、某ハ薩摩家中之者ニ而候、走人を尋行候処に、当町ニ而見逢申候、定而爰元へ居付候半と申候へは、亭主とかくを不申、やれ候やれと申、かゝよひ申聞せ候は、此御行人ハ走人を尋て被為行候処に、当町にて見逢被成候由、五兵衛殿事にてこそ可有御座と、かゝに申候へは、「かゝ申候は」爰元之衆も江戸衆と被申候へ共、江戸衆ニ而は有間敷候、とかく西之國之人にても可有御座と皆々申由申候、左候而我等より亭主に申

候は、爰元は誰様之御領内にて候哉と尋候へは、井伊兵部少輔殿と申候而、是より六里安中^{アノナカ}と申所居城にて候、爰元掟衆はと尋候へハ、是も安中に被居候と申候、左候ハ、当町庄屋に断被仰候而可給候由頼申候、様子ハ某薩摩家中之者^某にて候、走人を尋候而二三年方々行申候処に、当町にて見逢申候、其方より搦可被下候様^儀、又は某からめ可申候哉と、委細申入候得は、急き御方より捕可被成由申候付、左候ハ、庄屋所へ可被召寄候、右之人参所を取可申由申候得ハ、亭主申候は、あれこそ五兵衛殿所へ使に参人と申候付、立市の中に入候而待申候へハ、主計は庄屋所へ心さし、小田原足駄をふみ、深編笠をかふり、添着一ツにて参所を、後より大たきに取てたをし、縄をかけ、扱^と是ハ大事之科人にて候、縄取被仰付、左候而彼者家を教可給由申候而、町之もの案内申候而主計所に参候処、六尺一人・女一人罷居候、右之兩人に縄かけ、庄屋衆を呼候而申候は、先程ハ某宿主を以様子申入候、是ハ大事之科人ニ而候、少々財宝も可有之と見及申候間、書改被成可給と申度候へ共、今日ハもはや暮に罷成候間、外ニ御座候道具納戸に入、印判仕、庄屋衆も相判被申、左候而番衆を被仰付可給由申候得は、町中出立、内に拾人外ニ廿人、かゝり火にて番被仕候、左候而女申候は、各被為知候通、五兵衛殿久々煩被申、今日も飯少も不参候、飯可進と申候得共、何としたか、今日はむなさわきして何そくわりふものでない和被申候、茶なりともたてゝ進度候得共、此体ニ而候間各頼申候、庄屋申候は、兼而五兵衛殿被申候、江戸に口式拾間入三拾間之家屋敷有之候得共、江戸は商無御座候、爰元は商有之候間、次第ニは江戸之女房子共召寄可申と被申候故、誠と存、今に驚入候由申候、左候而主計を別宿に召置候

故、番衆をのけ、我等尋申候は、扱如何様にして金銀藏ニは入候而火を付候哉と申候得は、宇田六右衛門と申候者、町屋に入て盜をせふか、品川などに出すり切もせふかと談合申候へハ、夫もならず、扱々三代相恩の事なれとも、御藏金を盜取可申と談合申候而、御進物藏下よりつき上ケ戸鑰仕合候へとも不入候故、扱何として可入と存、茶湯坊主衆茶引被申候二階より可入と申候而、御成の時分三寸角打候而御座候を切ふり^{ゆふり}申候へハ落候付而、金銀藏に六右衛門釘ぬきを持入候而、戸棚の鎖を迎し金子を取、主計此かね持て出よと被申候、六右衛門ハ其夜御広間御番ニ而候、主計金子を持、玄喚に出、跡を見申候得ハ、二階に火あかり申候、扱ハ六右衛門火「を」付候やと存候、其夜踊御稽古濟候而皆人寝静り為申時分にて候、火を付ねハ外ニ出候事難成に付、右之仕合ニ而候由申候、扱我等より申候は、同類余多有之由候、先蒲地掃部殿ハ同類之由候、市来八左衛門殿宿ニ而縄をかゝり、腰をはさミ被成候而終に御成敗ニ而候、此外にも過分に有之由、誰々ニ而候哉被尋^と申候へは、宇田六右衛門外にハ一人も無之候、去年吉原に差越候時分、吉原にて其段承候、扱々掃部殿ハ夢にも知らん人を御殺被成候事、痛ハしき事と存候由申候、扱其後庄屋衆へ申候は、御檢者申受度候、飛脚老人被仰付可給由申候得は、則安中江飛脚遣度候得とも我々可参と被申、其夜明松ニ而被参、明る八日九ツ時分沢正右衛門殿と申乗馬衆一人被成差越候故、「先」大福帳三冊差出申候、被為見候而、米粃麦大豆小豆町中へ抑売に御売被成候、正右衛門殿「へ」申入候は、彼者致欠落程之者に御座候間、爰元衆之金銀を借用為仕儀も可有之候間、互に出入共御座候半、左様之衆は申出候様郷々ニ札を御立被成度候、左候而返済申

儀共候ハ、互ニ申合返済可仕由申候ヘハ、正右衛門殿夫にハ及申間敷由被仰候、次に主計衣類等は江戸へ持参申候、主計家は如何様ニ被成可給候哉と申候得ハ、是は爰許ニ而あかり物になる、いかたニ而候、是も御取被成候ハ、御家老衆御書物可被遣候、左候ハ、則売調遣可申由、正右衛門殿被仰候、六尺「一人」ハ山伏之子ニ而候、かたわの候故、本金小判式両に年季之約束ニ而本金受取申由ニ而、金子式両受取申候、扱女は爰元ニ預置可申候、改被成候、米之内三十日飯米・味噌・塩渡置申候、扱主計ニは五人与五人・ちやうり式人相付、主計刀大小迄もたせ、夜の物ふとん・小袖ハ黒葛四ツに入、主計飼置候馬式疋につけ、五月十一日渋川罷立、主計にハさるくつわかませ召列候、板橋迄参候处、江戸には人間舗と申に付、左候ハ、足くつにて召置可申旨申ニ付、左候ハ、足くつにて召置可申旨、亭主ちやうりに其通申付候ヘハ、ちやうり其俣引立、馬に打乗せ候而日本橋に参候ヘハ、恥ケ敷候間江戸江は参間敷と申ニ付、主計着候笠を面にかふせ、手拭にてひしとゆい、中御屋敷之小宿に参候得ハ、島津下野守殿・伊勢兵部少輔殿・川上因幡殿より御祝之御使被下候而、則志なわ取にて因幡殿御宿之様に召列可申由承候付召列申候、渋川より持参仕候黒葛四ツ、其外書物御目にかけ申候、主計ハ口之聞たるものにて種々申上候、渋川より引せ申候小荷駄一足足痛ニ而、同村にて小判式両に売申候、青毛駒一疋江戸迄引せ申候、追付薩州様江御目見仕候、左候而明後十五日芝御屋敷江罷出、此中方々行候支度少も不替

黄門様可被遊 御覽候由被 仰出、御湯殿山伏之袈裟掛ケ 御目見仕、左候而此中之刀・脇差迄も売払申候而方々仕候段被聞召上

候由ニ而、主計刀越前康繼、添差ニは仁王清繼持之候を、市来八左衛門殿御取次ニ而拝領仕候、同十六日ニは、

黄門様被遊 御下向候、夫より我等種々被召仕候故、御断申上、八月御使ニ罷下り候处、先為御心得飯米被下堪忍申候、然処に伊勢兵部少殿三年目に御下り被成、何分と御心付も不被下候哉、早々御褒美可被下候由御申被成候而、追付御上洛ニ而候、然は御知行被下筈ニ而、百石より三百石と御相談御座候由、新納加賀殿御咄承候、雖然下野守殿より先百石被下候而次第に御手付可被下旨、御相談有之由ニ而、寛永十五年七月御高百石被下候、扱又主計跡ニ有之候現銀六拾五両・老部金三切・鳥目拾貫三百文は、渋川ニ而改衆より受取候、外に小判金七両・老歩金拾五切・鳥目老貫六拾老文・馬老疋・米粃・大豆・小豆種々売物之代とシテ、右同前に取合取申候而、江戸にて致上納候、寛永十三年子五月七日七ツ時分に主計からめ取申候、左候而同十一日渋川罷立、同十三日江戸へ参着申候、都合小判金三十両ハ、吉原之大門脇之訴人休右衛門方江、御道具衆児玉左近を以下され候、

右、後年至子孫為御存知書記置候者也、
〔一六六〇〕
万治三年庚子八月日 坂元織部

*東大本【頭注】「以前ハ御屋敷狭く候故、御家中之面々町屋借宅被仰付被召置、御屋敷江掛勤被仰付」

〔興運・西長捕罪人〕

大島之興運・西長科人捕候一件

一私共事、去年十一月御代官所より〔急〕御用ニ付、早速西間切打

立、夜白共差越、同廿二日間切横目潤栄同道罷出申候処、御代官様御方より被仰付候は、流人[＊]肥後五右衛門・伝十依科牢込申付置候処、先比牢を破致欠落行多不相知候、間切々江尋方申渡置候得共捕得不申、右之者共重科之者ニ而急度搦得不申候而不叶者ニ而、吟味之上島中一間切より捕手五六人ツ、申付事候、西間切よりは其方共五人^{栄・運・西長・美熊・慶興}申付候、右之者共先比篠川村実喜実宅より脇差二柄盗取候段披露申出候、弥持合候半存候間、其心得を以怪我無之様、此涯致出精搦取候様可相肝煎段被仰渡、早速罷帰申候、

一同月廿五日西江帰着仕、早速御用之人數五人^{共に}一所に西間切之内篠川村東屋喜内境ニ而御座候故、彼方へ罷居候而、往来之通路用心且又双方江掛人數分ニ而尋方仕度、彼方江罷渡、昼は山廻り仕、夜は村内并河内々之小屋廻仕、折角尋方仕候得共見当不申候、然処東山ニ而彼方尋方之者共見当捕逃^シ候旨承候故、彼方江参候得共尋付不申罷帰候処、十二月十二日屋喜内間切之内湯灣村河内砂糖小屋^本へ為参居様子ニ而、先比実雄宅より逢盜候鉄炮二丁、同間切須古村之者共右木屋ニ而見当、田地方与人新塩^塩江申出候故、早速同村より多人數を以関狩仕候由、然とも見当不申、東間切・屋喜内村間切双方ニ而山さかし申候付而は、西方江志候半^志と相考え申候故、其晚篠川村河内木屋々相廻り見申候得共、見当不申空罷帰申候、

一翌十三日之晩、又々我々五人一所に夜入候而より篠川村河内木屋々相尋、夫より直に山之假^{脇方}古志村上江九ツ時分参候而、彼方ニ而人數分^テ仕、栄卓・実熊・慶興三人を屋喜内間切之内部連村河内へ作木屋有之候故、彼方^ハ尋方^ニ差遣、私共兩人は古志

村川内之上村より十四五町程有之候処、同村仁統と申者砂糖木屋有之候故、右木屋へ尋方ニ参見申候得は、先比之大風ニ右木屋吹倒、竈之上江倒掛り有之候、此内不審成所と見及申候故立寄見申候得は、枝^枝老本有之候故、氣を付承候得は、人之寢息有之候付、五右衛門・伝十^ニ別条無之と相考、私共木屋より遠く立去り、兩人申談候は、欠落者共に別条無之候、何れ兩人心を合不申候得は仕様^{仕様}申答候、難有も被召上御用為被仰付儀候得共、此涯一命を捨候而も不苦存候^{存候}ニ付、其考を以相働搦取不申候而不叶答候、相手も兩人、老人に老人宛之相手ニ候間、能々相働不申候得は、刀持合之者共故、老人ニ而も疵を蒙候者引申間敷、被切ても突れても切られた突れたと不申様に、疵を蒙候ハ、おんと計^計答可申と堅申合、夫より本之小屋へ参、此臥屋之内に欠落者共罷居候は別条無之候、任御上意捕手ニ参候、出よと声を掛、やね之上より棒ニ而急を突き、又は脇より石を以打込候得共、音も無御座候、只今寢息有之は逃は不致答と、臥屋殊に暗夜之事にて御座候得は、奥之方相見得不申故、西長臥屋之内へ入さくり見申候得共罷居不申候、奥之方を棒にてさくり申候得は、直に棒之先へ取付申候故、爰に居るそと申候、棒共に引出さんと引候候処をたぐり寄、股を一刀突れ申候故、はつと存、少シ寄直り候処を腰^腰ニ一刀突れ申候、爰にてハ働難成と存、臥屋之あかり江出待掛居候得共、直ニ突掛申候故、棒ニ而打払、又突掛候を、せばき所にて棒之振廻も難成、棒を投捨、直に刀を持候手を両手にて取付候而、興運取た、打^テとおらひ掛候候得は、伝十よりも、五右衛門出会へ、相手は二人、心安きそ、長物にて早く仕廻へ、とおらひ申候へ共、出会不申、興運ハ木屋之後へ待構居候処、右小

屋之近辺岩掛ニ而急に走続難成、頓而掛続候而続打に二棒打候得は、下之測へ被捕ながら飛申候故、私共ニも一所に五六間まくり候而、伝十・西長は式間程間近置立留り、伝十は寄は切らんと刀をひらめかし候を見申候得は、暗夜にて刀之光式尺計之様に相見得申候故、無手にて難寄付、木屋へ捨置候棒を取ニ上り候得は、伝十も上之方江逃あかり申候、其時も五右衛門出会／＼とおらひ候得共、出会不申、西長棒を拾取追掛り、興運も掛続候而、御上意ニ而候、返せと申候得共逃上り申候故、兩人より高声にておらひ候は、上ニ待居る鉄炮持共、欠落者共其方へ逃参候間、差合せ射取レとおらひ掛、興運は跡より追掛、西長ハ先をきらんと脇よりあかり候を、伝十興運を見掛参候を待掛居、一棒打、又一棒打候時、脇差にて突掛候を右之手にて受流し、又突掛候を左之手にて受流し、其節両手共に疵を蒙申候、左候内に西長掛続一棒打候て、直に刀持候手に取付組臥可申と仕候得共、大力者にて捕臥難成、兩人ニ捕られながら高岸より飛申候故、三人一所に手組にして三十間程まくり申候、其節漸脇差奪取、直に組臥せ縄掛申候、手強く縛り候へは其俣伏居申候、直に引卸申筈御座候得共、兩人共に数ヶ所之疵を蒙り、中にも西長深手二三ヶ所逢申候故、引卸難成、伝十事も臍強く当置候故逃走は不致筈候間、古志村へ参候而、本役人・功才共江申付御させ可申と、兩人は列立村江おれ申候、左候而古志村より本役人・功才共遣候処、小川のふち〔二〕縛置候得は、川中へまくり落居候由、如何様水を被下、殊更縄も濡強くしまり申候哉、相果居候由ニ而、使之者かたけおろし申候、私共ニは直に柴村へ罷渡り、西間切横目寄潤栄方江擲取候披露申出候得は、早速黍横目寄儀徴同道ニ而古志村江被差越、田地横目

喜美岡・唐船方主取都興真方へ被申遣、四人立合、死体見分之上御披露被仰上候、死体之儀ハ喜美岡宰領ニ而御飯屋本へ列越申候、

右は牢破欠落者伝十擲取候次第、委細書付を以可申上旨被仰付奉承知候、伝十擲取候儀、右之通別条無御座候、此段申上候、

以上、

安永二年巳四月

西間切与路島之 西長

右同間切西古見村之 興運

一御米拾五斛宛

大島西間切表村之掟 興運

右同与路島功功才 西長

右は、大始良之伝十於島牢を破行衛不相知候付、代官より尋方申付候処、一命を抛致出精相捕、奇特之至候、依之為御褒美右之通被下候条、難有頂戴仕、已後猶又万端心掛可相勤候、

右、御格之通申渡、首尾可申越旨、大島代官江申越、御米渡方之儀は、御勝手方江可相達候、

安永八年亥四月 島津仲久 健

*1 東大本【頭注】「肥後五右衛門、国分之者ニ而大島にて三四度致入牢候

へ共、入牢ことに牢を破逃去、後は行方相不知候」

*2 東大本【頭注】「二人伝十をつよくしはり、川はたの木にしはり、縄の先きをゆいつけ、伝十か足のつとを半分迄切り置ける、古志村之者共参候時ハ、木の根を引ぬきながら川中へはまり死したり」

(佐栄秀孝行)

大島之佐栄秀孝養

大島焼内間切大和浜村先与人亡佐栄甫

当年二十五歳

三男 佐栄秀

右、佐栄秀事、親佐栄甫存生之砌孝養為仕聞得之候付、聞合申付候処、佐栄甫病身罷成、依願退役仕、数年快氣不仕、長病故家内共不断付添之儀調兼、佐栄秀若輩に候得共、子共遊ひにも罷出、昼夜父之側に罷居、出入に付添、朝夕食物等も父之心ニ叶ひ候様心掛、不斷氣を付介抱仕候、佐栄甫事、上戸ニ而毎日程大酒仕候付、佐栄秀甚致世話折角不過様仕候処、間ニは氣に逆候儀も有之、無理成折檻打擲等に逢候儀も多々為有之由候得共、立去不申、申分等敷儀一向不仕、猶々丁寧仕候由、佐栄甫夫婦一往別屋敷隔り住居仕候処、佐栄甫身之廻り衣類洗濯迄も、佐栄秀一人ニ而為仕由御座候、佐栄甫病氣養生として琉球江差越候節、佐栄秀十二三歳ニ而付添参度旨頻ニ為申趣御座候得共、若輩者難海を越召列候儀、心遣ニ存不召列筋、佐栄甫より申聞置、大和浜より五里、宇検湊より乗船仕候、船送とシテ佐栄秀親類共同前罷越、諸人暇乞仕候間ニ窃に船底へ隠居、沖中へ走出候節罷出、何れニも相付参度存念ニ而如此仕候と申落涙仕候故、船中悉及落涙候由、其節同船之者より承申候、於琉球も諸人目ニ余候程丁寧仕たる由、左候而帰島之後も病氣全快不仕、後は氣病申候様罷成、此上倭江罷登養生仕度存念ニ而、右願ニ赤木名迄両度差越願出候得共、右様体故詰役共取奉不申、佐栄甫長病退屈之余無手形ニ而罷登ル企仕候付、親類共并佐栄秀より段々申聞候得共得心不仕候、

依之佐栄秀存寄候は、病親折角之念願御座候処、万一罷登養生之驗於有之は、無此上太幸ニ御座候間、跡達而之御咎目は何分ニも其身引受、親存念相達可申存究居候折柄、船頭山川之茂助船出帆仕候故相頼、父子乗船仕候を親類共承候付、走続差留為申由御座候、佐栄甫事、五年以前病死仕、墓所今以不忘様心掛、且老祖母并母へも随分深切に仕、兄弟交等も睦敷仕候、佐栄甫嫡子左栄郷病身有之、次男佐栄里罷居候得共、親跡職三男佐栄秀へ譲候趣、佐栄甫自筆之書付御座候、為御見合与相添差上申候、〔然共〕佐栄秀事、今以兄弟同所帯ニ而罷在由聞申候、此段申上候、以上、
安永八年

大島詰横目

亥七月廿四日

鎌田次郎左衛門

右同御徒目付

得能佐平次

右同案を以、御勝手方大御目付衆・御近習役衆ニ申出ル、

(伊勢貞昌与相良氏書)

伊勢貞昌送相良清兵衛書

清兵衛ハ肥後国求麻の家老なり、其子内蔵助頼章ハ中務豊久の妹婿也、後清兵衛一家中と不和になり、家中騒動す、公義御計にて清兵衛父子御預被仰付、此国に御抱式千石拝領、子孫相良源五左衛門也、

今度肥前有馬表へ貴利支丹宗相發候由候而、先日は細々御書中御対顔之様再誦三誦卷舒難止、然処又肥後之内天草江も彼宗旨之者共令蜂起由候而、爰元當時は夫耳之御沙汰候、有馬之儀相聞得候は、則松倉長門守早々被致帰城、一揆之者共退治被申候様ニと被

仰付、急ニ打立候、先月廿四日ニ在所へ御着之由候、追々相聞得候、殊之外一揆共誇候而、長州一力ニ而は罷成間敷候由御沙汰ニ候、其故候哉、只今迄ハ何程ニ為「被」申付との儀無之候、天草之儀は、去月十四日寺沢殿居城へ唐津之人数、天草之内富岡之城主三宅藤兵衛、以同心一揆共相働所へ被相掛候而被討負候、自唐津之物頭六人之内四人相果、三宅藤兵衛も戦死候、其様子肥後表より早此方へとく注進被申候、従大隅守所前方天草之一揆共之働様見せ、軽き衆五六人被遣候処、十四日之合戦場に行逢候而、其日之様子委細見候而參候、其者之申様を此方江注進被申上、是は正説ニ而候間、今更不入儀ながら申事ニ候、防戦之様子共方々相働致放火候付、本戸と申所より唐津三千程ニ而被出逢候処、一揆之衆も大勢ニ而掛合候而、唐津衆敗軍ニ而歴々被相果候、本戸之広サ五六町程之汐入之渡御座候前方、本戸渡口迄唐津衆推寄被罷居候而、十四日に渡を相越被出合候而、折節本渡之渡潮曳取候而陸地ニ成候故、一揆共弥勝に乗り本戸「之」渡を追越、本戸悉焼払、三宅藤兵衛居城富岡江追入由候、以之外之負軍ニ而笑止ニ候、是ニ付致推量候、一円不功ニ候若キ衆、不図懸出手合ニ被追立崩立候而より、惣崩に成候半と存候、古風之衆下知をも被仕候ハ、先ニ物見を遣、敵之働様をも見せられ候而、何とそ行可有之処ニ、若キ衆当世者之輕事をのミ本といたされ、弓箭方之儀をも其心に不被当候而、如斯被失外聞候と存候、一揆共は皆百姓之由、天下之沙汰ニ候処ニ、歴々衆彼等ニ被追崩、剩数軍被討捕候儀無念之次第ニ而、兎角古風之衆無之家は無心元存候、当家中なとも貴老御存知之ことくニ候、本之馴弓箭衆衆残すなく成行、若キ者共迄ニ而当世之風計見習候間、身にしめる弓箭杯ニは中々

役ニ立間敷候、食物杯も料理ケ間敷をたへつけ、不断足袋をはき、犬山杯ニ而も身をかくさず、公家之成果之体ニ身を持なし候間、昔之武士之様成儀成間敷候と、是のミ氣遣に存候、我々共生立申時分ハ、狩犬山杯をハ不致緩々とそたち候若キ者ハ後指を差様に候つるまゝ、其風ニならいがんぢうの心掛、食物杯も如何にも龜相成をたべつけ候まゝ冬之寒に寒候物をたへ候ても不苦候つる、今之人達は少し寒候物を「被」食候ハ、虫発可申候、乍去天下泰平之御時代ニ候間、左様之儀は入間敷候、目出度候、将又天草之一揆共を肥後・薩摩之衆ニ而可致退治由被仰出、肥後之衆は今月三日三角之瀬戸江為抑寄由、一昨日此方江注進御座候、然時は翌日天草江被抑詰候半と存候、薩摩之衆兼日獅子島江差寄御下知相待候様ニと為被申付由相聞得候俥、定而御下知さへ候ハ、則天草江可罷渡、乍去肥後衆より跡に可成と申事「候」、内蔵助殿御事も去月之時分人数召列、真幸表御通候つる由聞得候、定而肥州表之様子御聞合、佐敷・水俣之間ニ御入候半と令推察候、最早天草之儀は皆々被討果候坎、又賢（賢カ）所なとへ楯籠候を取巻候坎、何れ共急度其左右可有之と相待申候、有馬表、肥前・筑後之衆を上使を以御同道一揆共居候処へ被抑寄由候間、是も急度様子可相聞得候、珍敷儀到来候而、肥後・肥前・筑後・薩摩杯之衆、近年心懸も無之儀ニ被逢候、心は天草江行候得共、具足を肩に懸候而之働、迎も罷成間鋪と存、乍我見かきり置候、先年高麗江（高麗江）惟新被渡時分、拙斎船送候而之歌

あちきなや唐土までもおくれしと思ひし事も昔也けりと申侍りたるよし、貴老御事も今度はさ社御心ニハ候半と想像申事候、然共去年冬懸御目候、殊之外御顔色若々と達者相見得申候

間、具足御着候而も御働御自由たるへきと存候、我等は十程年おとゝニ而候得共中々罷成間鋪と存候、右ニ如申、扱々有馬之儀ニ付先日^(忠孝)は御状、深江・安德之儀細々被仰越候、新納刑部太輔・蓑田平馬戦死之儀、書面ニ向ひ候得は、其時分^(天正十一)之様に被存催涙候、其時分は弓箭之道をのミ心懸、人之心も情深く候、今日は人之上、明日は我身之上と、人々思入候つる由、古キ衆之物語共に承候、右兩人討死之日、今月廿三日かと覺候、刑部太輔磯涯ニ而若^きキ衆寄合蓋を廻し遊山之当座、

海青し底や夏山夕涼

と刑部太輔発句号候、此脇を深水宗方、

浦の見るめも風かほる比

と被続、百韻独吟候、右発句を案し盃を取はやし候時分ハ、何之思ひも有間敷候、不図懸出戦死候其戦場之様子を承候ニ、川上左京^(忠孝)杯合戦曳退候処行懸候而之事と聞得候、敵とあひしらひ候而殿になり、難なく遁候半すれとも、武士やたけ心之俣に戦死無比類候、左様氣遣も無之候而月日々送候、歌に、

誰か為の名なれは身より惜むらんはかなきものハ武士の道

とやらん承及候、右兩人此歌に能当り候、不入長文ニ而候得共、余り古風之事を申度候而如此、大笑々、恐惶不宣

十二月十五日

伊勢兵部少輔

貞昌

相良清兵衛様

人々御中

通昭録卷之六十八

- 一年頭祝物并しうたつく事
- 一正月七日鉄炮付はらミ打事
- 一若キ者共氣任付 仰出
- 一車落坂落之事
- 一笹踊停止
- 一甕島天童山之事
- 一鹿兒島・外城踊之事
- 一親咎ニ付子共御咎目之事
- 一宝永中衣服定
- 一重豪公御役輕重 仰出
- 一同公言語容貌 仰出
- 一初狩之事
- 一日本左衛門触流
- 一重豪公御筆 仰出
- 一樺山久智高山申渡
- 一平家余党大島落下事
- 一大島漂着朝鮮人具稟
- 一靈夢之記
- 一大島歌
- 一手遊草
- 一都璵柴書^(手)

(禁制、年頭祝物並しうたつく事、外)

禁制

- 一年頭互ニ祝物之事
- 一しうたつく事
- 一正月七日鉄砲放事、付はらミうつ事
- 右之旨、如毎年御与中へかたく可被 仰渡者也、^(六五)
- 慶安四年正月朔日

(若キ者共氣任付 仰出)

- 鹿兒島若キ衆氣任ニ候由被聞召付、左之通、
- 一御番不参之事、
- 一相撲之事、
- 一辻歌之事、
- 一門立之事、
- 一他人之垣壁破候事、
- 一喧嘩口論之事、
- 右之条々、堅御禁制候間、横目・夜廻衆被申付、稠敷相糺、氣任之衆見立聞立、罪之輕重次第科代可被申付由、上意候者也、
- 慶安四年^卯二月廿四日

(車落坂落之事)

- 一島津筑^(久懸)前殿より浦川左衛門を以新納又左衛門殿^(久丁)へ、端午之節供ニ御城大手之口并道場之坂ニ而毎年童共車落仕候、去年ハ大キ成ル衆直々馬に乗り坂落為被仰^(仕)由候、阿多内膳殿へ被申合、横目衆被遣、猥ニ無之様御座候而可然由被仰渡、

慶安四年五月

(笹踊停止)

一頭殿別火中篠踊・狂言停止、
同年

(甌島天童山之事)

一甌島は、異国船より目当之島ニ而、天堂山と称する由、別而彼島
寛永十一年
可入念旨、長崎御奉行より被仰渡、

(鹿兒島・外城踊之事)

一鹿兒島・外城曆々躍并在郷踊可為禁止候、

(親咎ニ付子共御咎目之事)

一鹿兒島士・外城衆中、士之格を相迦シ不届有之、或八付或斬罪被
(宝永二年九月廿五日)
仰付候者之子共、遠流・御預等御免之已後も士ニは此以後よりは
不被仰付候、且又士之格は不相迦咎ニ付而切腹被仰付候者之子共
は、遠流・御預等御免之以後願之上御取分も可有之候、右之段向
後不致混乱様ニ可申付之旨被仰出候、
(寶永二年九月廿五日)

(宝永中衣服定)

衣服

一諸士衣類之儀、先年被仰渡候趣可相守、御供先キ又は 御目
通ニ而も外様相勤候人ハ、木綿衣類をも無遠慮分限相応可致着用
候、曆々又は御側廻相勤候人、其外外様相勤候人ニ而も御近々ニ
罷出御用相弁候人は、御目通ニは木綿衣類は着仕間敷事、

一於江戸調候絹布之衣類、勝手之考付而は、御当地ニ而も可致着儀

は可為今次第、依右式之訳致着候を類し候而、絹布之衣類猥ニ致
着間敷事、

一諸士女房・娘共不依大小身、頃日は白小袖・紕縷子・紕縮緬・
緋紗綾等致着由付、向後は番頭列已上之女房・娘迄白小袖・緋縮
緬・ひさや之下着被差免候、其外之儀は堅可為停止勿論、縫金鹿
子入之儀ハ不依誰人堅可為停止事、

一右外之女中之内 御目見罷出来候者ハ、白小袖・ひちりめん・ひ
さや之下着ハ最前之通被差免候、

一不依大小身諸士召仕之女、惣而昵近あらざる女之分は、衣服之染
夏冬共ニ向後は無地、又〔は〕小紋付紋所を付着いたすへし、ち
らし模様杯之染出し又は絹布之帶堅令停止事、

一右之通、此節より相定候間慥可相守候、乍然小身之面々召仕候者
ニは、ちらし付模様物之外別ニ調替候儀急ニ難成者は、当年中ハ
持合之衣類着候儀ハ不苦候、尤調替候者も下着ニは此程持合候
木綿地模様有之衣類可致着儀不苦候、都而不依男女又者之儀、
帶・下着迄絹布用候儀堅令停止候、来年正月よりは右ケ条之通
屹可被相改候、衣服之儀付而ハ、従前々〔末々〕勝手ニも罷成候
様ニとの〔御〕事ニて、毎度被仰渡事候処、其旨を致忘却無益之
費をいたし候儀、沙汰限ニ候、此節相定候趣、来正月已後相背
者於有之は、横目中より無用捨可遂披露旨、急度申渡置候間可
存其旨候、

(二七〇八)
宝永五年子正月廿五日

一頃日末々之者、衣類御法度之品を致着用候者間々有之候由、其聞
得候、衣服之儀付而は、段々被定置趣有之候処致違背儀、貴賤無

差別猥成風俗不可然候、右付而大目付中へ申渡置旨も候間、兼而申渡置候趣相守候様、主人并其頭々より堅く申付候様可被申渡也、
宝永六年丑七月六日

(重豪公御役輕重 仰出)

一御当国之風俗、以前より致来と覺候哉、御役人輕重之差別薄様有之、余国之風儀ニ相替御氣之毒ニ候、御家老職などハ随分相敬、重役よりは權威にほこり候儀は不可然候得共、重き職分之立候程之会釈は可有之儀候、其以下右に可応候、縦は諸奉行之内一二段上之御役江転役被仰付候は、先同役共早速より其涯を立、諸事慇懃いたし、無役之諸士は勿論之儀、且御役替被仰付候人よりも則相当可致事候処、差而其廉無之様相見得候、公義御役人方御役柄輕重格別之被成向、畢竟上様へ被対左様ニ社可有之事候、公義御仕向之通ニは參間敷候得共、「御役格高下をわかし」御役之順を以互ニ僂礼無之様屹可相嗜候、右ニ準諸士以下末々迄も身之程を存、士農工商之品明白ニ有之、於途中末々之者士へ行逢候節も、笠・頭巾を抜き、鍵をも為持候程之人体ニは猶以相慎罷通候様、支配下諸家中・寺社家・町人末々迄も、頭人・主人より屹可申付候、凡下体は事之弁薄筈候間、右之意趣、頭立候者得と相心得、叮嚀可為致得心候、兼々礼義不正敷処より身のつふれとも成事到来、不便思召候、年来染込候風俗故、一通申渡候分ニ而は詮も無之筈候、尤急ニは不相直儀も可有之候得共、何分此節被仰出候趣、以来最通連々改候様遂吟味可申渡候、御国之風俗、他所〔之〕見聞迄も如何候条□^被仰出之候、

〔明和八年〕十一月

(同公言語容貌 仰出)

一御領国風俗之儀、段々被仰出候趣、御尤至極之儀、謹而可奉承知候、礼義を相守候は、人々肝要之事候処、畢竟以前より其分チ大形相心得候所より、自然と僂礼有之、高下之わ^わかり薄方ニ相見得候付、今度思召之御旨趣具被仰出之御事、誠以難有儀候間、随分其涯相立候様可有之候、其外諸士以下末々迄も承知可仕候処、被仰出候通年来染込候風俗故、急ニ不相直筈候条、一通申渡候分ニ而は詮も有之間鋪候間、諸士は与頭於宅仰出之趣拝聞為仕、夫より小与頭^重申合、小与中ニ而人柄見合を以猶又申合、就中年若成者共江為致得心候様可仕候、若不合点成者於有之は、幾度も致教訓、何分此節仰出最通風儀宜成立候儀、諸人可相励候、未事ニ難弁年少之者へおのつから「親兄弟又は親類共より可」申聞事ニし、支配下諸家中・寺社家・町人末々に至、別而端々之者は猶又事之弁薄候付、頭人・主人或頭取之者引受、右与中申渡候格準、末々迄も致流通候筋、向々ニ而遂吟味、都而得心いたし候様可取計候、寔厚^キ思召を以為被仰出御事、聊無忘却、難有被仰付候詮相立、連々風俗能改候様可相嗜之候、

明和八年十一月

島津左中

樺山左京

喜入主馬

小松常刀

川田伊織

山岡斎宮

〔七七三〕
明和九年正月御家老中連名仰渡

一 御領国辺鄙之儀候得は、言語甚不宜、容貌も見苦敷体之故、他所之見聞も如何敷、畢竟御国之面目ニも相掛儀候付、於 御上も御氣之毒被 思召上候、急ニ上方向程ニは可難改候得共、九州一統之風儀大概相并候程之言語行跡ニは可相成事候旨、兼々御沙汰之趣、御家老中奉承知、御尤至極奉存候、依之向後人々此旨を弁、容体・詞つかひ等相嗜之、他国人江応答付而も批判無之様、常々可心掛候、尤衣服之儀は被仰渡趣候条、自他国之差別之外、分限を過候儀は可為無用候、

右之通被致承知、家来末々江は、猶又書面之旨趣を以、口達ニ和らけ具可被申聞候、

〔初狩之事〕

一年首御規式付而、前々より肉鳥入用有之事候處、諸外城之儀も弥初狩仕行儀專ニ付、宍打取候儀は令停止之旨申渡候条、例年之通ニハ有之間鋪候、御規模帳面ハ旧記ニも候故、消除間鋪候間、可被得其意候、

〔二七〇五〕
宝永二年西十二月十五日

御勝手方

大御目付江

〔日本左衛門触流〕

一 十右衛門事

濱島庄兵衛

一 せい五尺八九寸程

小袖くしらしニ而三尺九寸

一年二十九歳

見掛三拾一二歳と相見得候、

一月代濃ク引疵一寸五部程

一 色白ク齒并常之通

一 鼻筋通り

一 目中細ク

一 貌おもなかなる方

一 ゑり右之方ニ常ニかたき罷在候、

一 ひん中びん

中少そり元結十ヲ程まき

一 逃去候節着用之品

こはくひんろうし綿入小袖

但紋所丸之内橘

下単物もゑき色紬紋所同断

同 白郡内ちばん

一 脇差長二尺五寸

鍔ふくりん金福へ模様さめしんちう筋金有、

小柄なゝこ生物色々、かうかい赤銅無地切羽

〔はゝき金さや黒小尻少銀はり〕

一 はななみ袋もへきらしや 但うら金入

一 印籠 但鳥のまき絵

右之者、悪党仲ヶ間ニ而は異名日本左衛門と申候、其身は

曾而左様不申由、延享三年寅十月公義御尋者、

(重豪公御筆 仰出)

(二七六)
明和五年子四月

太守重豪公於江戸御筆を以 仰出

一江戸詰之者共衣服之儀、定置候通相心得、不晴立場所は綿服相
用候様可致候、国元男女衣服之儀も定事候得共、公界も無之事候
間、一門・大身分は日野紬・木綿相用、一所持已下は木綿・紬類
之外一切令停止候、染色之儀も無地又は小もん付相用、模様など
染出候儀可為無用候、極老或幼稚・病身之者、寒氣難凌等候間、
持合之者下より絹類着用致候事は可為其通候、側廻江仕候者へは
着古等呉候も有之候間、公界ニ難用程古候衣類は、国許ニ而着用
いたし候儀、可為勝手次第候、

一江戸詰之者共、無益参会等不致様ニとの儀、
向後酒肴等取はやし候儀、一切令停止候、就中側用人・近習役共
此旨を存し、若違背之者及承候は、遂吟味候上直ニ可申聞候、万
一私ニ扣置候儀於有之は可為落度候、国許ニ而も右之通相心得候
様可申渡候、

一奥向之儀者、表方役人共委不存筈候間、納殿役人・年寄共申談、
少事迎も費無之様可取計候、

右は、所帯方手迫ニ相成候付、今度俟約筋之儀段々申渡事候
条、及吟味候事は無遅滞可申出候、
儀ニも存候者も可有之候得共、長キ事ニ而も無之、
事候へハ、何分其詮相見得候様随分出精可致旨、急度可申渡候、
四月

別紙之通被 仰出候条、謹而承知仕候様、与中・支配中・諸外城
江可被申渡候、地頭・領主・与頭・支配頭江可申渡候、

五月

島津左中

樺山左京

榎 織部

劉 藤馬

高橋此面

右、被仰渡候付、高山江以御添書可被仰渡哉之旨奉伺候処、
致草案可懸御目旨承知仕候故、左之通入御覽候処、思召寄
も無之弥可然由被仰聞候付、噯吉田藤兵衛へ申渡、御書付
□□□□、

(樺山久智高山申渡)

一御所帯方連々難被続御手迫ニ相成、
候、七ヶ年之間稠敷御俟約被相用、御召物・召上られ物にいた
り格別被遊御省略、別紙之通以 御筆被仰渡候段、不淺難有御
事候条、無忘却謹而其旨を相守、随分俟約相用、衣服は寒暑を凌
き、飲食は飢渴を凌き候分と相心得、万端右に準し令省略、若被
仰付御用之儀も於有之は、無難洩出精相勤候様可心懸候、若存違
之者も候は役々より丁寧に申聞かせ、其上違背之者是不届之至候
条、屹と可及沙汰候、此旨所中江不洩様可申渡候、

五月

左京

高山

噯中

条々

一兼日被仰渡御法度之趣、謹而可相守之、就中切支丹宗門 并向宗

御大禁之事候条、無緩疎改之、不審之者於有之は即可申出候事、

一異国船御手当之趣、兼而無油断可致手当置候、至其期遲滞又は相違之儀於有之は、所中之越度は不及申、御難題ニも可及之条、平日心懸可為肝要候、

一親子・兄弟・親類・朋友、兼々睦敷随分丁寧相交、末々に對し心之及可加憐憫事、

一役々之交相互に可為慰懃候、譬^{（意者之）}宿□□候とも、勤方付而は私を差捨令和熟、無依怙最良廉直相勤、末々迄も其風俗をうしなわす、争論ケ間鋪儀無之様、所中静謐可專要事、

一学文武藝は勿論、其外之藝能力之及出精修行いたすべく候、就中年若キ輩昼夜徒不罷在様專相嗜、親・兄弟・親類よりも申聞、朋輩中相互ニ可加異見事、

一武具・馬具、分限ニ応し不事欠様漸々可相調候、華麗を好ミ見聞を飾候儀、一切無用たるへき事、

一百姓・町人等夫々之家業無油断可勤之、凶年之節に臨ミ妻子を売り、産業をうしなひ令困窮事、不便之至候、畢竟平日之心懸大形故候条、時々役々より可申聞事、

一出家・沙門・社人之輩、夫々之勤行不可有怠慢候、利欲之心入・放埒之行跡曾而有之間鋪事、

一惣而家居・衣服之奢、無益之費無之、儉約第一可守之、末々ニ至而或は月待・日待又は神祭・物詣杯名付々、大勢を催し不謂物入いたし、時日を費し候事、不義無益之事候条、一切可為停止候、役々其旨を存し、兼而氣を付稠敷可申渡事、

一孝行之者・拔群心入行跡等よろしき者・家業并稽古事出精之者は可申出之、其□□^{（品）}応し屹と褒美可申付候、御法度を不守者・不孝

之者・家業油断之者・心入行跡不宜者、是又可申出候、吟味之上、其沙汰可申付事、

一此方より時々申渡候儀付、難致得心趣有之坎、又は存寄之儀於有之は、些少之事たりといふとも、誰人に寄らす存分之次第無用捨可申出候、道理於有之は即可取用之、譬僻言申出候とも、曾而及其沙汰間敷事、

右之条々堅固可相守之、其外先々之地頭申渡候趣、是又不可有違背者也、

明和二年^{（上六五）}西六月

左京

高山

暖中

右、此節被仰渡候条、各存其旨、所中堅固可相守之旨、不洩様時々可被申渡候、若違犯之輩於有之は屹と言上可有之候、以上、

西六月

得能佐平次^{（通稱）}

但馬市兵衛

高山

暖衆中

一御分国中百姓殊之外及困窮候段、左京殿被聞召、郡奉行面高善右衛門老功之由候故、一夜緩々被召呼、百姓困窮之子細且又御救之事共、逐一御尋之通被申上、随分御心得ニ相成候間、又々被聞召度儀も有之候、毎々参上可有之旨、御挨拶之上被罷歸候、其節高山・串良百姓、御領国第一之勞之由被聞召候付、暖共参越之砌、百姓いたわり之儀委細可申渡旨、佐平次江被仰付候付、左之通相

認書付を以被仰渡候而は如何可有御座哉奉伺候処、細密に相見得至極宜候間可申渡旨被仰付、暖山下筑左衛門江申渡、書付相渡候処、至而難有次第奉存候、罷帰同役共へ申渡候上、役々江は毎度拝聞仕らせ可申旨申出、其旨申上置候、

高山百姓共至而致困窮候由、就被聞召通候、左之通被仰渡候、一諸公役夫使并出錢・出米多、漸々為及困窮由候間、右体之儀随分致減少候様、心之及氣を付可申渡候、

一諸御奉公人差越候節、馳走ケ間鋪儀無之様、兼而郡奉行申渡置候通、弥其旨可相守候、焼酎類輕ク差出候とても、付役末々迄及多人數候得は、物入多出錢も相重む筈候間、右体之儀一切無之様屹と可申渡候、

一諸奉公人所中通路之砌、御定外之人馬又ハ法外之重荷等有之、助人馬差出候様承候とも曾而出⁽²⁾間鋪候、自分雇賃錢払ニ而罷通面々は可為格別候、且又滞在之御奉公人、水夫・野菜・薪等被下面々は、御法も有之事候処、左様之無差別差出スも有之由候、是又御定之外差出ス間敷候、右式之儀他外城ニ不相并旨申輩有之候ハ、地頭より堅く申付置候趣を以可相断候、万一理不尽之申分等於有之は無用捨可申出候、

一所役々御当地へ差越候節、荷物随分可致減少候、自分用事之品物等致持参、人馬相重メ候儀ハ無之筈候得共、猶又取違無之様可存其旨候、於御当地御用之儀は、心懸早ク相仕廻可罷帰候、若埒明兼候儀は、地頭所へ不相応儀ニ而も与力迄可申出候、依御用は催促いたし方も可有之候、尤御用相済、自分用事ニ而致滞在候節、人夫等留置候儀一切有之間鋪候、

一於所公役夫使之節、刻限格別前以人馬寄セ置間鋪候、御用不滞様ニと相考候処より、一時二時ニ相済候節も一日之隙を費す由候、向後右之趣百姓共江納得いたさせ、公役之刻限無滞罷出、無益之隙費無之様堅ク可申渡候、

一兼而申渡置候通、衣食之奢等無之様、此涯猶又屹と可申渡候、且又祭礼・仏事或は講・月〔待〕・日待類其外多人數参会、稠敷可令停止候、

一右通、百姓いたわり之儀申渡候付而は、百姓は安楽に罷在事之様存違候而は、如何之事候条、隙を得候ハ、随分無油断農業精を出し、夜白相稼候様時々可申渡候、

一右之外にも存寄候儀は、無用捨可申出候、末々輕キ役人共江も其旨可申聞置候、

右之通被仰渡候間、奉得其意随分心懸、思召之一筋相通り、所中村立、百姓共年貢無滞相納、御奉公方不怠相勤候様可被申渡候、就中郡見舞・庄屋之儀は、分ケ而稠敷可被申聞置候、此旨御差図ニ而候、以上、

与力

子十一月^(明和五年乙)

得能佐平次^(通昭)

徳田甚助

高山

暖衆中

右ニ付、左平次より筑左衛門江御達を以申聞候は、右通高山百姓共令困窮所中衰微に及候段、被聞召達候付、何とそ百姓共豊饒に罷成所中致繁榮候様ニと、厚き御仁心を以被仰渡事候得は、甚難有御賢慮候間、各無忘却其旨を得と致勘弁、所中之仕置緩かせな

き様、此涯随分出精被相勤度候、左候而其詮相立、樺山家御地頭之節、思召を以所中致繁榮往々豊かに罷在候と申伝候程、功驗有之候ハ、御地頭之御面目、各にも別而之勲功たるへき旨申渡候処、御請御礼相応申出候、

(平家与党大島落下事)

平家大島江御落人次第軍物語記

一元暦二年丙申三月廿三日夜、豊前より九国の南表へ船乗出し、津々浦々へ乗入候得共可頼人もなし、種子島といふ島に船乗渡けれど、彼地にも可頼人なく、夫より乗出し屋久島と云島に乗わたり、六ヶ月程致滞船事、九月彼島を乗出し、鬼界島と云島へ着、三ヶ年致滞留候処、近く大成島有之候故、滞留之内小船五艘遣し、人居有無又は一島之主の有無を、其案内見せん為遣置候て、方々五艘の人一手にして浦々入江々能々見届可申之通申遣候故、三ヶ月〔に〕案内見届致帰島候処、一島之主無之島にて、浦々入江々に人家有之候得共、山かけに人家有之候、何とて磯辺に人家不作候哉と申候得は、口は不通候得共手様二而、磯辺に人家あれば海より盗人来て財強盗仕候付、山かけに家を作居之由申候、先以武具無之所に相見得〔申〕候、其入江々浦々別々に分れたる主有之様子に相見得申候、鉄の刃物無御座候故、木を以よき様に柄を入れて、其木のさきに少之鉄入て仕様子に相見得候、其斧を人に不見様格護仕候事、

一小松三位中将資盛・同少将有盛・左馬頭行盛、右之島、主なく島にて候ハ、手入申儀安心之事候、当地にて手分乗渡り手付ケ可申と評定二而、資盛手の船七艘西表江乗渡り、有盛手の船五

艘彼島東より北表江乗渡り、左馬頭行盛手に五艘右南表江乗渡候ハ、三大将三手に分れて諸所浦々手に付候事、

一鬼界島へ相殘候人数之主取白尾大膳太夫、付従大将頭立人四人内北野作太夫、余は本書に虫入不相知候、

一左馬頭行盛付従侍大将二俣大膳太夫・友野十郎光成・坂根太夫・福利太郎頼秋・同姓別当盛秋、右人数上下百五十拾余人、大島之内瀬名之湊へ着いたし、案内知たる者式人遣候而、残人数浜に木屋の用意仕候、海上より近き所に木屋有けるか、右木屋に年六拾余女一人おりあひけるか、言葉ハ不通候故、手様を以、其方の男は何方江参候哉と相尋候得は、山に為参由候、何時に木屋へ帰る欵と相尋候へは、夜入候而戻来由申候、左候は夜入時に其方之夫戻方に又々可参と申入為帰の由申出候三付、多人数一度ニ参候は、驚て山へ逃かくれ候は取付かたく御座候、只今我等式人参り而、今宵宿借り申度と申候而賦候ハ、多分夫参筈に御座候、木屋近き山へ三十余人かくし置候て、夫参候は右式人より相図声を可掛候、其時かくれ居候人数抑寄取込可申と約束仕置候、其夜半計夷共三十人程来て木屋を取廻し候付、相図の声を掛候故、隠居候人数三十余人走來り切殺し候得は、右三十拾余人の人数式拾人打果し、三人生捕置候故、生取之者へ其方共おり所に此人数列行見せ候様に申候得は、山へ列登候故、山中へ木屋段々作居候、右山中へ居候者共、木をとさらかし竹をとさらしなけつ、さん／＼につきちらかし申候を、矢を以射殺せとて、さしつめ引詰さん／＼に射かけ候付、三十人程射殺されて逃ける故、四十人生取、手に付従ひ申候、彼夷とも罷居候所行盛居城になり、夫より瀬名方之人居候入江々谷々迄、右之夷共為案内列廻候付、彼者共より手向

ひ仕候得共打殺申候由聞かせ、余所は手むかい不仕手に付候、右夷共為案内召列候て、古見方へ侍大将四人・手下之人数百余人船四艘より召仕候故、古見方江名瀬勝村へ多ひす一日戦けれども、右夷共遣候得は手に入申候、大里村にも手むかひ有之候へとも、右之多ひすを遣候得は手入申候、其上の村々山へ逃かくれ、日数込め廿五日に相済申候、夫より為勝れ味方の人数十五人程古見へ残置候事、

一夷共山へかくれたる者共尋出し候て云様ハ、竹に金をすけて人の胴につき通し死す、早く手に付よ、つかすは殺さるゝ由と為申様子に付付従候事、

一住用・須垂二手に分け、一所に二大将宛遣候処に、山ふかく候故、山へ逃隠れ不来候付、夷ともを遣し、山より求め纔計列来候、残人数ハ方々之山へ隠れ、俄に尋付不申候〔付〕、大将分の人々も手分を以其入江々谷々迄不残相尋候故、日数を込事五十余日に手に付相済候、人の為人道を教させぬ、慥成味方の人数より拾五人ツ、召置候、残人数大将四人に相付瀬名の様に罷帰、行盛へ披露候事、

一瀬名方村々主頭無之候而成間敷候、奥間村江坂根太夫、中勝村へ福利太郎頼秋、大勝村・古里村同姓別当盛秋、戸口村へは二俣大膳太夫・友野十郎光成、何れも此内之依忠節如此宛行候事、

平行盛居城定之事

一瀬名方戸口村大城に城構相定、城を掘せ候よし、又は溜池こしらへ候て、永々の日照にも水不絶様に拵候事、

一此居城之見合、岡之高さ六拾余間有之、北より東南まで田袋也、

西方へハ堤築、溜池長六拾余間、西方尾筋より四五間之通場有之故、彼通場江登所に、城かまといふ所に思太郎と云島人、人数貳拾人ほとの手廻にて人家八軒作居候、玉城といふ所に真三郎と云島人、主取にて人数二十人ほとの手廻りにて人家十軒作居候、右両所外ハ田袋より寄来敵防事拵有之筈也、

一右居城地内、長さ二百余間・広さ百間余の所と有、間々二十間・十五間程の所も有、人家百余間の場有り、水ハ如何様成日照にも不絶、北に小川有り、西には六十間の溜池、山抱の内に有之候事、山の名池の山と号なり、

行盛居城己亥八月十五日成就之事

一行盛居城より東の方に、川を隔て岡の上に能居城有之、人数六拾余人の手廻にて山野大膳助居城と定、松当城と号なり、大勝村・古里村主頭と成福利別当盛秋兩人あて、行盛居城に敵寄来時は、大勝・古里の人数寄敵の後を取廻、中に取込為討捕也、山名大美田山と号なり、

一行盛居城へ敵寄来時は、西方に屋く勝と云所、二俣大膳太夫・友野十郎光成兩人手廻六十余人居住すゆへ、敵の後を取廻、中に取込為討捕也、

一奥間村主頭坂根太夫、中勝村主頭福利太郎頼秋兩人、右同断としてかね計て設置なり、

一東間切・屋喜内間切・西間切、右諸所資盛領所也、

一名瀬間切・笠利間切、右諸所有盛領所なり、

一古見間切・住用間切、右諸所行盛領所なり、

一今井権太夫遠見番としてあんきや場江被召置、屋仁崎江蒲生左衛

門右同断、

行盛卿御墓所之事

一行盛卿御墓所向南の方に海有之、日本造の船通候得は、俄に悪風吹き怪我のミ有之候故、行盛卿怨霊にて右通有之候段、七島頭立共より首里の王公かなしへ右之次第申上候付、嘉靖二十四年辰十二月首里の御ミことにて御送名新立^{〔テ〕}王殿と相唱、二・八月七日、年に両度ツ、瀬名・古見・住用三ヶ所之のろくめ差寄、御祭可仕旨被仰渡候事、

右条々之通、写二而伝来候文字之俣相写差出上申候、

二・八月七日行盛卿御祭の節、戸口のろくめ祭詞の次第、

行の盛、行の嶽。あおり屋上。さす笠。ミよこの明つ島か上。大城盛城。よいミ神。よい男。瀬名の新立王殿。やわれしのくら。二俣大膳。友野光成。金久ぬき丸。あまのきミ。大美田こは盛のミ神。松のきミ。そののきミのミ神あちよそか。わわそへか。このたるあ蔵しらや。よこせしちや。よいミ神。よい男。おくつひちやの。わいものいへし。主いへつき。あわ円の。ふたけわろよいミ神。よい男。戸へし。あかうれたち。ひりやらしや。なさししや。よいミ神。よいミ神。よい男。古見城。みうしわろ。おひけなめ。よせけなめ。よいミ神。よい男。宮守り宮かしらおひけなめ。よせけなめ。よいミ神よい男。

右は、昔日左馬頭平行盛卿落人ニ而当島江御渡海之次第被聞召上度旨被仰付候付、実不実之儀相知不申候得共、私家代々写二而伝来申候通差上申候、数百年之事之由ニ御座候得は、本書

ニ相見得不申候、且又戸口村のろくめ、私家先祖代より勤来候处、毎年二・八月七日両度古見・瀬名のろくめ差寄、行盛卿御祭の節、戸口村のろくめ祭言葉之次第をも承、右ニ書記差上申候、尤右次第書付差上候様被仰付候付、如斯御座候、以上、
宝曆八年寅十二月
通事方与人格
寿文

瀬名方黍横目

貞俊

和田平右衛門様

野添善内様

〔大島漂着朝鮮人具稟〕

具稟^{*1} 朝鮮国全羅道靈巖郡。進上鮑具船主李再晟。吾妻父母在古達道百里外。致彼地方問吾妻父母。欲回去郷里。十一月二十八日。在古達道開駕。不意於洋中風浪太大作。失舵。無奈何。漂来漂来。目二十八日。至今月初六日。受飢渴苦。将要就死。幸依天庇祐。初天日。漂到貴地大島屋喜内間切宇檢洋。大小職事。人心淳厚。憐遠人。即日又用小船。牽到伊陳港内。注泊全保生命。朝夕蒙給食米。思降^{*2}天地。感激不盡矣。船中竟無帶來南蛮入廟之書信班猫信右等。項若有此情耳受^{*3}国法。所報是実。

*1 【頭注】「□稟俗字俗□白事為一」。

*2 【頭注】「思当作恩」

*3 【頭注】「耳当作甘」

計開

一所祀仏神無帶來。

一所装米一斗三升。失水。

⁴ 一斛四石沈水濕壞不用。 4 【頭注】「一斛白米也」

一船主李再晟年五十二歲。

一杭工金五福年四十五歲。

一水稍朴己昌年三十八歲。

朴順太年四十五。金万中年四十五。金元望年三十一。朴順南年

二十四。韓順明年四十六。女人年四十六。女人三十六。乳兒四

歲。乳女二歲。共計十二人。

乾隆四十四己亥十二月初七日

船主李再晟

具稟

一己

（靈夢之記）

靈夢之記 * 【頭注】「重出」

大島の旧政新り、五穀豊穰に沙糖湯作せりとて、家々に歌舞の
声充滿る、初春の夕へ旅館の殿かなし、一盃の機嫌に目出度き初
夢を待見んと、邯鄲にあらぬ横座の枕に臥て漸々鼾催す比、枕
もとに女の声して、殿かなし／＼と呼に、驚き目を開て能々見
れば、五十には少し余ると見えし女と、廿にハ足らぬほどの女
と、白き兆衣に美冠被たるか枕上に立て、我等は天流国・
奈流国より年々渡り来る神かなし也、遠き昔のまた古より、年こ
とに此島に渡りて、二月の倒屣にはる／＼の苦勞を休め、四
月の優酌に旅のうさを忘れ、餞程に機嫌能く故郷へ帰る、瀬戸野

呂久目か饗応に、腹をふくらし心を慰けるに、今年の春渡来れ
ハ、先倒屣の治具もなく、神山は伐払て甘藷の住家となり、足
を留むへき宿もなし、是は如何にと興を醒し、たとり／＼経廻
るほと、漸々と空腹になやミ、勞れ歩行の力も尽果る比、焼内
西東の野呂ともか旧好の寸志に腹をふくらしけれども、食足ら
されハ、五勺湯の饑民か難儀を知られ、神酒なきか故に乳離子
の睡るに泣を悟る、是さへ沙汰の限と思ふに、焼内の強者ハ我
眷属を縛り、西東の惡慍共ハ訴状を官府に捧く、我道の困厄雪
の暮に宿借さぬ亭主にあへる旅人のことし、殿かなし国都に帰
らは官に告て是を救ひ、神事を繁榮せしめ、神山を茂らしめ、
神酒・焼酒ハ殷紂か池に等しく、豚・牛の肉ハ周文の台よりも高
く、野呂瀬戸ハ殷紂か腹ハ子を生比の女よりもふくれ、家々の財ハ底を
叩て尽さしめ、下民ハ農業を忘れ、衆官ハ八月踊の機嫌にな
し、老若男女手の舞、足の踏事を覚えす、夜となく昼となく有頂
天となさしむへし、猶迷を取て、我言を用ひすんは忽下痘の難
病を与へ、国に帰らは山不見渡に波浪を起すへしと、或ハ怒り或
ハ悲み、面色赤く成り白く変しけれハ、殿かなし泡盛酒に酔るか
ことく茫然として聞居けるに、乾の隅より柿の素袍にあらぬ衣
冠束帶せる官人忽然とあらわれ、けたかき御声にてしばらく／＼
呼び、徐々と歩ミ出、我ハ赤木名の隅に草の庵を結び幽に住める
天満天神也、二神の言説ハ下品下愚の水手郎が譫言に似たり、
夫神といふハ形もなく、影も無く、声もなく、臭も無く、虚々
靈々として有れとも無かことく、実れとも空がことく、前に在
るかとするれハ忽焉として後に在り、正直の頭にハ覺らす知らず、
是にやとり、善人と見れハ賞せんと思わすして福を授け、悪人と

見れハ罰せんと思わすして禍を与ふ、彼も知らず、我も覺へず、妙々不測なる事鏡の影を移かことし、我凡俗のむかし説置し倭歌あり、心たに誠の道にかなひなはいのらすとても神や守らん、此意今神となりても變ることなし、茂れる山を求すして大虚に住し、豚・焼酒の祭を受されとも腹の空しき覺もなし、不伎不求空々寂々たる、是を神の本体とす、居処飲食の嗜欲あるハ、凡俗の庸人さへ賤んする所なり、況や神に於をや、此島の愚夫愚婦二神の無分別に效ふて、樹木の茂れるを見てハ神の住所とし、枯たる枝をも伐る事なく、是を開て田畠となす事を知らず、神事に時を喪ひ□、農の時を奪事を寛らず、神に託け遊樂を尽くして己か財の費る事を忘る、心ある俗人ハ嘆息して哀しむへしとす、神として悲さらんや、朝廷賢くも有司に命し、神事を禁し野呂瀬戸を止む、於是万民初て無明の眠をさまし、迷の雲晴れ、神山を開て田畠とし、野呂瀬戸ハ良民となり、農の時を奪ハすして、力の有たけを尽し、無益の財を費さす、世渡りの易きを覺ふ、世俗歛樂して世替りの時とす、神として歛はさらんや、二神も神の道を知らは、是を歛ひ、是を樂んて、速に此島を去り、上朝廷の命を重んし、下万民の歛樂を得せしめ、復ひ此土に来て民を煩ハしむる事なかれ、二神女の面、忽に朱塗の赤甘藷のこことく、三拝して曰、天神の傍聞を知らず、窃に殿かなしに戯れたり、汗顔の至り、面目もありやおらん、去ながら好神道の奥旨を聞て迷を開き、又此島に渡りて我に益なき事を悟れり、速に此土を立帰り、倭神道を我本国に弘めて大善の神国となすへし、可尊哉可尊哉といふ坎と見れば、飄々然として空に上り、黒雲に打乗て、今より後ハ来るましとい

ふ声計ハ虚空に残り、姿ハ雲路に入にけり、天神莞爾として殿かなしを磨き、善哉、二神「の」前非を改め本土に帰る事、過テハ則勿憚改、今より後ハ此島の万民朝廷の命を重んし、神山を心の俣に伐開き、財を費す事なく農業を勉めん、田畠満作し、沙鯔ハ倭の船に積余し、米は島の高蔵に充ん事疑ひあるへか□□、信すへしといひ捨て立帰り給ふと、見し夢は覺にけり、殿かなし奇異の靈夢を蒙り、遙に天神の社を拝し、感涙肝に銘し、燈を挑け、筆を取て一字を違へず筆記して、相識れる人に贈る、

安永七年戊戌の春、公命を奉し大島に下り、弊政を按察し、民害を除き農を勸む、島の俗、鬼神を信し、覡巫左道を誘ひ、民人を誦惑す、往年大禁の命有り、数十年を経て猶息ます、大に勸農に害あり、昭朝廷に告て嚴禁を講ふ、許可す、年中米を費す事千三百余斛、牛豚を殺す事四百余匹、及び不嘗の靡費、一挙して頓に止む、民競て神山を伐り田畠数千頃を得たり、己亥春、昭復命を奉して島に下る、時に方命の徒有て、覡巫を止め神山を伐る事を非とするの説有り、昭愚頑の徒誑惑せられん事を恐れて、靈夢記を作り好事の者に与ふ、

(大島歌)

大島歌

安永中改政の時島人作て謡ふ、
かなけうらみたるむらくもやはれておづきてり
ミてるミよのおろへ
うれしさやそでにつゝミよたんきよからみに

あまるものこかほ

ことしはつはるやのこるかた「な」^{*1}いらすしまちゆみなよしのとくのおろへ

*1東大本「な。い」として頭書「か」。

うへさまのおためしたくのみだめせけんみな

よしのとくのおさま

とくのかなしミ「な」よしのおさまおほこらしや

わしまおかけふさい

おしむきのかわてよのなかもかわるとくさまの

おかけせ「じ」よのおろへ

こしやくゆのまゝにしちよれたわらべやかてとく

のよのありよらてもの

しまやかればてしおたるきミさまかけに

いのちすくて

いぬいとりすれハなミたゝすてむしのあかたそんな

ことにあらちよたふり

とくのある人やしまたからさらめまたにこの

しまにかけていむり

おじよけうちかハリしまぶきんなたむおかけ

さへしさまおこれきやしよか

おかけさへしさまおかミなてくだりおくだりや

にどにしまやぶぎん

おこぎまきかつらおこきまきからしむらハとり

からてやまとしてし

*2東大本、「ら」

おけのおひほどつよしめてあたんしたやよろ

はりよし上ハつよく

おしおきハかわりおふれまハいきやかきびし

*3東大本、「さ」

やささかなとまておすが

やささかないりよとりたまこいりよむらくの

とりよきびしあだが

なゝまきりひやくしよあぶなあぶうてゝ

しさまおかけおすちのほて

右八首笠利間切平村の実活母作る、

おやおとりやすくやすくしやのもつやさかり

さたやまんさくにこもつしよくのし

みなよしのおさまおくだりやねこてかまだとの

かなしかわりやおらむ

かまとくのおさまいむりないらすハおしおきや

やふれしまやたてらす、

かミやみちくにしもやものしらすことしよ

によろくよかやよしことしかほねやうへさまの

おかけたミのおろへ

とくのある人やよのなかのたからいくよいつまても

さたにのころ

とかごしのよあめきくさおろわしれしまちゆ

おろわしよるさへしおさま

おめかねやつよさかこしまのやかたおみちよろの

いむりしまのおろへ

名瀬間切

とくのミなよしおこひらのミつねしまちゆいき

まわてたミのおろへ

名瀬間切

*4東大本「ない」

むめだせばなまやきのとくにやてもゑのりかい
ゆたしやいもるとめば

ばばいだちあかめとべらくさもんがよかりよの
なさないらんみつじよ

くろさぎやりやがちなしろからすつちふす

がいきしよんかばゞた／＼ばいだ

(手遊草)

手遊草

大島住用間切老人撰

行年九十九歳(五)の翁、老衰の徒然のあまり、世のかわりゆくを心に
留て案するに、十五歳より只今まで公役の余暇に子孫の生さき・
世過の苦ミ一々と案し出し、今生の暇乞に子孫共に申聞ける、我
等事十五之比より島中諸仕向厳重に無之由、御上より被仰渡由
にて度々承候得共、差而相変儀も無御座、漸々 御上より之仰事
も薄く成行候半頃日に至り、御役人衆も諸百姓の浮沈御顧不被
成、勝手筋一篇に被成(罷成)、諸役人は年増に驕り、百姓は隙を不得、
諸作職可仕様も無之、春秋共に借米に縛られ、作職仕力量もなき
故、漸々と島中衰微に及び、今日／＼の飢凌迄仕来候故、近年凶
年打続き及飢候儀は、年の豊凶ニ而も無之、畢竟不得隙、諸出米
口過分有之故、先き様は島立不申哉と、其方共か不便さに、今日
明日も知らぬ老か身の、現在未来の難儀の処、去年(安永七年)の五月御趣法
筋ニ付御仕向替七十九ヶ条、御一冊を以被仰渡趣奉承知、長口(生)之
徳に九十余歳か其間の苦を安し、難有さに歓喜の涙衣にみつ、最
早子孫の不便さと思ひ忘れ、只今死すとも世に思ひ置事なし、か
やうの目出度御代に住し、其方共か難有さよ、先様ハ御一冊の通

無忘却物こと正道に不相勤候而ハ、天罰を蒙る故、往々其方共か
心入之為申達し、ヶ様に難有次第書残置度候得共、盲同前の我
等一文不通の者故、其方便なく故、いろは四十八字を句の上に置
て、世の笑種をも不顧、老のたわふれに書すさひけるものになん
かし、

い いかに役々聞たまへ

ろ 老若男女のよろこひハ

ハ 春夏秋(季節)と隙を得て

に 俄にかわる御趣法筋

ほ 豊年なるも今年より

へ 辺土の山野も伐開き

と 年々満作うたかひなし

ち 地面ハ広き島なれば

り 利徳は隙を得るまゝに

ぬ 主なく荒るゝ島もなし

る 瑠璃の玉なる御一冊

を おかめは老も若かへる

わ 若きも老も忘るなよ

か かく有かたき御仕置の

よ 世におふ島の民なれば

た たかきもしつも忘るなよ

れ 礼義も恥も今の代そ

そ 龜末に物を思ふなよ

つ つまる所ハ子孫の為

ね 佞奸ものもなくなりて

な 中々目出度島になる
ら 乱世を吠る成の年
む 無理の仕向もなく成て
う うへの御蔭の有かたさ
ゐ 命かきりにつとめせよ
の 野にも山にも黍つくれ
お おうへの為か身の為そ
く 苦にも思ふな働けよ
や 役人衆ハ役をして
ま 誠を本と心得よ
け 輕薄むきてはいかぬ物
ふ 富貴も貧もゑらふなよ
こ 事のわかるをよしとして
え 依怙や鬚眉に物するな
て 術をする「な」ものことに
あ 浅からさりし御一冊
さ さき／＼までも最通れと
き 祈願を立よもの人
ゆ 往末までの島だから
め 目にも見えさる神々も
み 見守り給へ御仕向を
し 島か島にてあるうちハ
ゑ 永代□□すな御趣法を
ひ ひしと居給へ得能様
「も もしもやもとにかへりなハ」

せ せましき事の起りたち
す すちなき事の多からは
一 一々百姓もつふれはて
二 人間里もあれはてゝ
三 山野とならはいかにせん
四 島立やうにして給へ
五 五ヶ年限にやめらるな
六 六七十其上も
七 七十九ヶ条の仰事
八 八百年も最通れと
九 九十にあまる賤の男か
十 十五よりの難苦勞
去年の五月御一冊
拝見しての其後ハ
子孫の不便も忘はて
氣も若かへる老の身の
たわふれなからかく計
俚諺巷説も試るに足る事あり、(安永七二七七)戊戌の年大島の旧政悉改まり、万
民其所を得たるか故に、六月島を出て国に帰る、己亥(安永六)春復命を
奉して島に下り、衆官を召て改政を問ふに、家々戸々徳政を称せ
ざるハなしといふ、民間歌謡數十首を書して昭に示す、住用横目
喜子父手遊草と題せる一小冊を出して、島人の謳歌是に違ふ事な
しといふ、悉筆記して夏日の昼寝に易ふ、

(都頭紫書)

一乍恐訴申上候、当間切諸百姓物沙汰并当島風俗之儀、荒増左条申上候間、乍御面動得と御披見被遊可被下儀奉頼候、

一当島之儀、此已前は徒物入過分之事ニ而、年中ニは人夫何拾万人・諸出米・諸出物、島中ニ而は何千石と申程之費成儀有之、諸百姓近年及大困窮必至と勞入居申候処、此節 貴公様被遊御下島候得は、則時より自然と都而之物数減少罷成、此内諸百姓痛居申事共不依何色被御差止、役々ニもおのつから諸事物毎儉約ニ相慎、礪と世代りに罷成、砂糖代米等道々^(常々)嚴重配当被仰付、諸百姓及飢既危所御救被下、以御蔭露命相繫き、先以目出度御世ニ罷成、万民饑寡孤独ニ至迄難有至極奉存候、此上は諸百姓皆以安穩仕、勇進て砂糖專一出精仕候、其外農業等思俣随分相働隙有之、豊饒不過之、漸々繁栄仕、一ニは御勝手筋、二ツニは身分之栄花ニ而相統案中之事と奉存〔候〕、右付、西間切之諸横目始諸百姓等末々ニ至□物沙汰仕候は、此已前御交代ニ当島御詰被遊候御八人様方ハ、却而島百姓を御悩し被成候処、御徒目付様は只御一人御差下り、当島中諸百姓之命を御救被下、民を御憐之事、左右之御手之ことく、古之周公も斯やと取沙汰仕、私共ニも尤と奉存候、御帰国之御跡は高山に一字之堂寺を建立仕、得能権現と奉崇度ものをも被申候、ケ様成御仁者は島に御下島不被遊、何卒島御代官様御職ニ而年五ヶ年御詰越被遊候は、当島之儀は則無垢世界之蓬萊山に可罷成と、老若男女之物語仕申候、先比御廻島之砌も段々被懸思召、難有事共計被仰渡候由、真綿之中ニ釘有之とハ貴公様御事と、島役人中物沙汰、難尽紙上候、又候哉此程島中御廻行之節も、百姓不痛様別而輕^キ御手廻ニ而御廻島之由、昔本朝北

条之時頼公御成敗不屈御探に、諸国御執行被遊様と感心し平伏仕申候、私事一筆も未申上馴者ニ而候得は、何ぞ窺御機嫌ニ虚書申上候儀ニ而ハ無御座候、日々ニ逐一承知仕候〔俣〕申上候、

一当島三四十年以来砂糖代米・引合米と号候もの造立、目にも見得不申形地も無御座もの、帳面之表ニ而計渡し方有之、諸百姓迷惑仕居申候、右引合算用下地別而六ヶ敷、諸百姓痛居申候処、此節より御停止被仰渡、諸百姓不淺難有奉存候事、

右数件之通、当間切諸役人始諸百姓ニ至□、貴公様遺光既逐一承知仕候付、乍憚奉入御覽度、惡筆を揮如此御座候、以上、

^(安永七年)
戊四月十四日

西間切

都頭紫^(マゴ)

能^(得) 佐平次様

通昭錄卷之六十九・七十

通昭録卷之六十九

越昭隨筆卷之

(44)

一舜水朱先生語録 百五条

一長門鶴台韓客筆語

一七子韓客筆語

一徂徠題問槎

(舜水朱先生語録 百五条)

一舜水朱之瑜曰、中原之百二十里日本之二十里也、

一黃河之水從西域入、中国往々伏於地中、故孟子曰、水繇地中行、

有尋蟻穴而得泉者、有馬跑而得泉者、拔刀刺山飛泉涌出、適當其

泉脈耳、非異事也、

一取妻不取同姓、即是周礼也、唐虞之時未曾聞焉、古人有言、上古之事存而不論、

一日本之所謂柚乃橙也、非柚也、柚有二種、白者長而瓢虛、紅者

皮稍薄而実大径七八寸、

一加藤明友問曰、四書六經用何人注乎、答曰、朱子之注不可廢、

礼以陳澠、易以鄭庠、尚書用蔡沈、此其大略也、然看書未必

單々靠得注脚、

【頭書】「按、一統志寧波府學校有鄭鼎學、鄭庠蓋謂之也」

一宋儒之學可為、宋儒之習氣不可師也、

一水火玄黃之戰、道學家与文章之士互相攻撃、亦如宋朝程氏・蘇氏

互相詆譏、朝廷之上舌戰不已、遂使国家被(国家被)其害耳、

* (一) は見せ消ち。

一明朝近來伝經、与古先大異、有習說而無專門名家者、特取一時新說為作文之資耳、至晦翁之註、自當遵依、詩序等但可參考、

一晦翁先生以陳同甫為異端、恐不逸過當、

* 東大本【頭書】「逸当作免」

一古人席地而坐、多是与日本相似、危坐即日本今日坐法也、

一揖者鞠躬、即今之立而揖也、揖則兩膝跪地而稽顙、已興則起而再

揖也、再揖者三揖兩揖、四揖者五揖四揖、危坐者以踵著尻以趾著地也、

一孝子・孝孫編次其父祖素行而請之鄉先生、謂之事実、鄉先生就其事実中増芟抑揚之、謂之行狀、然後進之礼部、宰相議其易名、撰為祭葬碑文、若例未得有祭葬者、即以行狀請之朝貴或海内名公、撰為碑文墓誌、或者存之史館、以為作伝賜諡之地、

一養子之子即序於諸孫之列、俗曰、討兒不討孫、蓋言養子為討兒子

也、毛孫者義男之子也、繼子有^{平声}心^{ツツネ}繼、有命繼長房次子、理当

承繼、故曰心繼、長房無可繼之子、則及次房、次房無可繼之子、

則及再次一房、親兄弟無繼之子、則及從兄弟・再從・三從、族属

已尽而無子可繼、則及疎族、不分賢不肖、皆曰心繼、天子・諸侯

雖大略相同而微有不然者、以宗器至重、不論二弟・三弟・長子・

次子、按牒而取之、無有不応者、惟大臣無識見、無担当愛身畏

禍、不顧宗廟至重、但得一人為主器而已、是故繇親及疎亦如士庶

之家、命繼則死者平日以某子為賢、臨終有命、某人与某人、一同

承嗣故曰命繼、不論親疎、除長子外亦不論長幼、躡等而繼之也、

亦有平日愛之教之、撫養成入、在生時即命、与心繼其人一同奉祀

者亦是命繼、但不得越族而及疎遠越宗而及異姓、繼者続也、其緒

將絶而復続也、故曰繼也、

*底本は一つ書きと誤つて改行されているが、本来の形に改める。

一明朝自太子・親王・郡王・將軍・中尉一概俱称殿下、別其為宗室也、前代同姓・異姓諸侯王皆無之、

一柳下惠之称、乃其妻諡之、文中子乃門生諡之、但要公而当耳、於礼無戾也、易名之典在於人心、人心思慕哀傷之、諡為忠武、適得其宜、

一安東守約字省庵柳河人問、飲酒・饋食、主人先飲先嘗、未知合於礼否、朱

之瑜曰、飲酒而致爵於賓、賓致主人、主人先飲酒卒爵者示酒無毒也、主人復獻客、客飲而飲主人、主人復獻客、客受而奠爵、今日本全是古礼、饋食則主人不先嘗、先嘗者宰夫之職也、臣有為君嘗食者以膳夫之礼自居、君祭先飯是也、亦不敢當賓之意、

一舜水答小宅生順曰、貴国山川人物之秀美、幅員之広遠、物産之豐盛、自敝邑而外、誠未有与之匹休、惟是文教不足、実為万代之可惜、

一生順問媽祖・関帝、答曰、媽祖者天妃也、專管海道之神、舟船東西洋往來、是其職司、関帝者蜀漢大將、雲長諱羽、封漢寿亭侯、以正直公忠為神、尤顯於明朝、故薄海内外無不尸祝、二神非如異教之荒唐也、

一関羽著靈於明室、明神宗万曆皇帝繇武安王晉爵、崇隆到協天大帝、一生順問、本朝文粹入高覽、其文章如何、文粹有三善清行者、我邦儒者也、意見封事十篇載在此書、舜水答曰、大概一見耳、至三善清行者亦失記其名、僕以台臺真懇、故亦抒誠言之、(德)債務為虛美之詞、不如此唐突矣、僕素以西蜀秦宓・晋朝桓温刁彝事為非、豈肯身自為之乎、直視貴国為一体、故披瀝心胆無少忌諱、非以氣概為事也、

一或問令義解、答、前人文字自佳、序表皆妙、釐然一国之制、貴国文字但中衰耳、後之有志者自当振興之也、

一生順曰、古来中国称我邦曰倭奴、是非我邦之通号、近世入寇貴国、皆筑紫九州之人、乘乱逃逸鈔掠沿澗、遂視之為盜賊、此不可不弁、答曰、中国与貴国不通之故、皆辺吏之罪、天子遠在万里、竟不能知其情、僕久有此志、又平心夷氣絶無客气為梗於中、儻有中興之日、僕得仗節歸朝、特当奏陳其顛末、若先朝露填溝壑、則貴国之汚名永々不白、而中国之辺疆未得無事也、入寇之時淫乱慘毒備至、加之惡名不亦宜乎、

一看從古大方之文、佳与不佳則時有之、其氣脈則無有不清者、又貴国之文字多自造以填入之行之遠方能通解否、

一問、鄭玄曰、格来也、物事也、司馬温公云、格扞也、物外物也、王陽明云、格正也、物事物也、答曰、格兼至正二義、扞字全非、扞格之格非格物之格、

一至正有相兼之義、非以正物也、

一問、父之姉妹何称、答、姉曰姑媽、妹曰姑娘、総曰姑、兄曰伯父、弟曰叔父、又曰季父、

一問、父之兄妻曰伯母、弟妻曰叔母、母之姉妹曰母姨、妻之姉妹曰姨、又曰季母、又曰嬭、又曰嬭娘、父之姉妹曰姑、婦謂舅之妻亦曰姑、母之兄弟曰舅、母舅也、婦謂夫之父曰舅、壻謂婦之父曰舅、別於母舅故外舅、

一父母俱存者曰具慶下、父母存而上有祖父・祖母者曰重慶下、父存母没者曰嚴侍下、父没母没存者曰慈侍下、父母俱没者曰永感下、有三代俱存者曰重重慶下、然不可得也有則詔為希世之奇矣、

*東大本「没」見せ消ち。

一生順問、雷災大行十余年、必殺人、答曰、雷災甚至殺人、則陰陽變易極矣、此必時政有所闕、是在上之人嚴加修省以回天變耳、若一人為非、而必雷以激之、是天代人君為政矣、古今必無小人矣、小人失道、自然殃及百姓、無疑也、

一藤井德昭問曰、刀劍弓馬鎗戟等技藝、士子所當學為、而於心術之學恐有害乎、答曰、學者志不可雜、頃言專心致志者此也、若今日欲學何事、明日又欲學何事、其人到老不能精一藝、何也、以其志泛而心浮且欲速也、孔子曰、欲速則不達、足下稟賦薄弱、恐非用武之器、且今既食厚祿、又復汲々於他事、何為也哉、

一或問猩々、答曰、前在交趾、聞其國海邊有此種、採掇山菓以為食、好酒好著紅屐、土人以此愚而擒之、聞之唐人者亦然、然未之見也、僅見一焙乾者、長可四尺、口鼻整、在唐山時、於嘉興崇德地方有二、一牡一牝、以檻車籠之、觀者如堵牆、然未之見也、亦未知自何國來、但聞夜則放出洩溺、畢則復入籠中、其後牝者物故、祇存牡者解京耳、其時不留意於此、故未之詳問也、

一安東守約問作詩文、答曰、所貴乎儒者（修身之謂也）、身既修矣、必博學以美之、學既博矣、必作文以明之、不讀書則必不能作文、不能作文、雖學富五車、忠如比干、孝如伯奇、曾參、亦冥々没々而已、故作文第二義、至於做詩、今詩不比古詩、無根之華藻、無益于民風世教、而學者汲々為之、不過取名□□而已、即此一念已不可入於聖賢大學之道、故程子曰、為之大足喪志、

一守約問、陽明之學近異端、近世多為宗主如何、答曰、王文成亦有病處、然好處極多、講良知、創書院、天下翕然有道學之名、高視濶步優孟衣冠、是其病也、出撫江西早知寧王必反、彼時宸濠勢燄薰天、滿朝皆其黨羽、文成独能与兵部尚書王瓊、先事綢繆、一發

即擒之、其勦橫水桶岡涖頭之方略、与安寧之（書）、折衝樽俎、亦英雄也、其徒王菴溪有語錄、与今和尚一般、其書時雜仏書語、所以當時斥為異端、

一蘇子瞻聰明絕世、讀書每百過、或數百過、今人聰明不及子瞻十分之一、乃欲以涉獵遊戲說書、如何得工夫純熟、工夫純熟、則古人精意皆在心口中、筆頭上揮灑立就、

一明道先生甚渾厚寬恕、伊川先生及晦庵先生但欲自明己志、未免有吹毛求疵之病、

一中村玄貞問曰、伊川先生治喪、不用浮屠法、今中国能遵行否、答曰、中国治喪、非如貴國、棺斂之際、浮屠不与、惟後七日謂之頭七、已後每七必要作仏事、四十九日而七終、又有百日・週年、及三年喪滿、俱有道場、謂之超度、不然父母亡者便入地獄、剉燒春磨受諸痛苦、仏教既盛、謂超度便可昇天堂、不超度地獄沈淪、以故愚迷子弟多信而為之、即有稍知其非者、又世俗之人共相非笑、指斥之為不孝、故僞焉特拔者無有幾人、近日亦如之、惟不肖家治喪、毫不為此、

一野節問、懲忿塞欲者人之所難也、先生二十年來塞欲、感仰々々、程夫子七十而氣力勝於前時、所謂以忘生恂欲為深恥、先生能居此、故血痰嘔咳者無妨耳、答曰、水至柔、人多踏而死焉、色欲至為末事、然君子於此自振為難、僕事々不如人、独於此中鮮能惑之、近者自解云、所謂入水不濡、入火不熱者、糓子但能言之而不能行之、僕能行而未嘗言之、至於嘔血者、蓋以陰陽不接、又多家國之憂、宜乎其有此疾耳、其不致性命之傷者、則又在廿一年保齋之功、

一大明之党有二、一為道學諸先生、而文章之士之黠者付之、其躊躇

兩船占望風色、而為進身之地耳、一為科目諸公、「本無実学」一旦登第、厭忌群公高談性命、一居当路遂々多方排斥道学、而文章之士亦附之、僕平日曰、明朝之失、非韃虜能取之也、諸進士驅之也、進士之能舉天下而傾之者八股害之也、

*『舜水先生文集』により補う。

一加藤明友問、太極生兩儀、按太極者心之謂也、陰陽乃何者哉、答曰、貴国專言太極、既以心為太極、則舒慘者乃陰陽也、夫子・至聖不言大道、子貢名賢、言天道不可得聞、今貴国諸儒賢於古人、而宋儒過於夫子・子貢也、

一小宅生順問曰、蜀漢自古有英傑出焉、揚雄・司馬氏鳴漢家、眉山三蘇及陸游等鳴宋家、不知今亦有如此人哉、答曰、有宰相之子楊升庵諱慎者、探花陳秋濤諱子壯者、或負奇才如子雲、或顯忠節於勝国亦自有人、

一生順曰、聞先輩、如薛文清・蔡虛齋者所謂君子儒、如王守仁・王竜溪・林子中・袁了凡者淫老仏不免三脚猫、如王世貞・李夢陽・季子鱗者文章与五誥三盤相類而大不及、如徐中行・茅鹿門・鍾伯敬者不過醉古人糟粕、今依先生欲質問之、果如何、答曰、国朝人物如薛文清・李夢陽、氣骨錚々足為国家砥柱、所謂烈風勁草、板蕩忠臣也、無媿儒者、若王陽明先事之謀、使国家危而復安、至其先時擊劉瑾堪為直臣、惜其後多坐講学一節、使天下多無限饒舌、王竜溪雖其高弟門人、何足復道、袁了凡恬靜清和、復其好處全然是一老僧、何足稱為人物、其他或以理学名家、或以詩辭擅聲、未足可以著稱貴国者、其中如王弇州猶少長於數子耳、愚見如此、有当高明否、

一生順問、我国当今志学者、易用朱義、春秋用胡伝、書用蔡伝、詩

用朱伝、間亦有好異者、捨宋儒之說而用近世快活之說、故其所弁論如長流之不可障、雖然歩々不由夷地、如順者因此弊久矣、如之何而可乎、答、為学当有実功有実用、不独詩歌辭曲無益於学也、即於字句之間標新領異者、未知果足為大儒否、果有關於国家政治否、果能變化於民風土俗否、台臺深知其弊、必不復蹈於此、果能以為学修身、合而為一、則蔡伝・朱註・胡伝俱足追踪古聖・前賢、若必欲求新、則禹稷契臯陶伯益所說何書也、

一生順問、右北平去沙漠幾千里、金陵去北京幾千里、答曰、右北平之外即為薊州昌平、去虜地六七十里、故有黃裏太逼胡沙之語、其去大同亦止二百余里、其出喜峯口・牆子嶺・古北口・永平府、俱不遠、金陵至北京有二千六七百里、

一生順問、中国去日本水道一千六七百里、交趾去日本八九千里、来則向東北方行、交趾故宜在西南也、

一生順問、韓祭十二郎云々、此十二字何數量、或謂杜甫曰杜二、此二字亦同、如此數量之字、不知其義為何、答曰、中国有從兄弟・再從・三從・族兄弟・宗族衆盛者、恐上下無別、故用一字以排之、謂之排行、故曰行幾、自一至百、或有百外者、杜二十二郎即行也、一明朝文集極多、好者亦寥々、一家之言不必勞神、如楊升庵李空峒集極佳、

一生順問、銘旌以絳帛為之、広竟一幅、六品以下七尺、無更短者、上用板作題、下用板作墜、俱采画、題頭処緑絹作兩層簷、以粉筆大書曰日本故某官某之柩、或士或死或前以竹為杠、如旌而稍長、倚於灵座之右、銘旌題以板為之、厚約五分、下墜同、采色絵画緑帛作簷、亦名走水、亦曰滴水、若以板作三尖題頭、恐移動及在道時損壞、一棺不用木槨厚約四寸以上、太厚恐重而難運、不必高大、量体而作之、大

約內淨一尺八寸^{同、廣高}、後約一尺六寸^{同、廣高}、須比身軀稍長^{長六寸}、人死則長於在生時也、不然則短而不可殮矣、

一神主陷中於額下本身上、刻深四分、闊一寸、長六寸、書曰、日本故某官某諱某字某第幾神主、合而植之於跌^{「跌」算行也、言一次曰、}

一文義如流水如積雪、因方則為珪、遇圓則成璧、隨地制形不可方

物、有不可顛倒不可改易者、如適間聊適所問鞠躬如也、如・也二

字易焉字・乎字何如、就舉入公問一節、全是兩如字摹擬形容聖人

敬謹之心、非真笑鞠躬也、乃与鞠躬相似非真笑不容也、恰像不能

容的一般、兩如字如画工、何等生動、若作如鞠躬趣味便減了、然

猶不肯戾、若作不容如便說不去了、顛倒之不可者若作鞠躬焉、則

訓誨之辭、告誡之體、若作鞠躬乎、則心口自商之語、證意俱在入

公門之前、下句湊上、便不合沓、此改易之不可者、教者均非記事

之體也、如明問兮字・些字同是綴添之語、易之未為不可、即如巧

笑倩兮、美目盼兮、素以為絢兮、易為巧笑倩些、美目盼些、素

以為絢些、亦說得通、就如唐棣之華偏其反而、豈不爾思、室是

遠而、易為偏其反些、室是遠些、無有不可、至於于字・於字・乎

字、在句中者大概相同、易之俱可、然亦有易不得者、如巍々乎其

有成功也、煥乎其有文章、乎字易不得于字・於字、吾無隱乎爾、

雖可易、然少曉諭唱歎之致、王立於沼上、易于字則可、易乎字不

妥、無惑王之不智也、易于於字則無味、然而無有乎爾、則亦無有

乎爾易不得于於字、在頭上者亦易不得、偶舉數端、皆如此類、

一守約問、由布惟長奉書老師稱頌高義、其人質美而好學、但今年五

十、有杆格難成之憂、為可惜耳、答曰、老而好學、如秉燭之光、

不佞年六十二、一日不肯歇手、故詩詞絕不拈著、因質性愚下無暇

及此耳、五十歲比不佞少十二年、謂之一紀、何謂老而難成、真好

則無有不可成也、蔡元定之年長於朱夫子、初時為友、後來遂執弟

子之礼、何以至今稱為晦庵高弟、又曰不佞見典籍、窃自傷心每々

淚下、不幸幼齡喪父、不知為學之道、遂昧々至此、劉元海異國

人、猶曰一物之不知、君子之羞也、不佞窃自恥其言、若老者一日

不放鬆、少者更力加精進自然足以揚名天下後世、必不若不佞之老

大無成也、

一瑜之視日本同為一體、未嘗有少異於中国也、日本惑於邪教深入骨

髓、豈能一旦豁然、

一立一小石碑於墳前、高四尺、濶尺以上、厚七八寸、圭首而刻其面

曰、某人之墓、略述其世系・名字・行實而刻於其左、軫及後与右

而周焉、

一聖廟即學校也、中為聖廟、西為明倫堂、北為尊經閣、東北為啓聖

宮、或西或東為射圃、以較射為義、故曰校也、每府每県必建学立

師衛城、建学者少、故通計止千余所、

一對或問神主書法、凡有官爵者皆書之、婦人一品曰一品夫人、二品

曰夫人、三品曰淑人、四品曰恭人、五品曰宜人、六品曰安人、七

品曰孺人、八品・九品・散官共用孺人、庶人妻曰媼或嫗、女曰姑

或姐、粉面属称、有官爵者曰顯考・顯妣、士庶人曰先考・先妣、

男在官者曰府君、不仕者曰处士、無官無学者曰郎、

一對或問殷奠、殷奠者君祭大臣之盛礼也、故祭文称其号、君自称名

如我相公祭中山信正、曰、水戸侯源光圀敢昭告故朝散大夫東市正

丹治風軒諡恭子之靈、

一送林道榮之東武序云、吾素聞、日本国如古燕趙之風、燕趙古多悲

歌慷慨之士、略、其亦間有慷慨士乎、有則子為我告之、無則為我

博訪之也、略、恨吾匏繫於此、不能一觀其盛、儻能身接之、亦足

以慰十七年之饑渴而自信其耳目、

一明室之制、卿相之子不學則為庶人、雖任子乎、大者司丞、次者部屬郡倅、次者京府幕僚而已、亦如太祝奉礼、礼葬以大夫祭以士、未有立廟以報本萃渙者也、非若有土之君、五等雖有尊卑、举世々承襲、得建太祖之廟為祧為祔、亦非如唐宋之制三品以上得建三廟四廟、

一為加賀綱利作宗廟図序云、略、日本屋宇飲食二事、猶存質樸、饒有古風、愚雅不欲彫琢之、大明之制、房舍之壯麗者、用灰布・油漆・五彩金裝、恐与国法相違、且清朝茅屋、惟取嚴整不在華美、尚祈高明裁酌、

一大明国俗五月五日、裹角黍投之大江巨川、以餉屈原、且飾舟為竜、櫂人別飾巾衣、擊鑼伐鼓鼓棹如飛、俗謂之划竜船、亦謂之競渡、檐際懸菖蒲及艾、所以祛邪也、聯云艾葉如旗招百福、菖蒲似劍斬千妖、日本風俗大略同是此意、又云、五月五日天中節、赤口白舌尽銷滅、弟於世俗兒女子態、每事不信、故今不理於口、至於此極、可見猥較亦宜從俗也、敝鄉明日午間、俱飲雄黃菖蒲酒、競渡之所、士女縱觀、繁華喧阗、不可尽述、諸容晤言、外奉唐茶壹瓶、希炤入、大明角黍、頗略相似、而種類甚多、大約競耳、与小宅生順尺牘

一官家乃天子之称、他無敢称之者、至於朝廷則非天子之專称、孔子朝与上下大夫言、又其在宗廟朝廷、孔子雖入周未嘗一登周天子之朝、且書中明係魯国之朝廷也、今將軍之尊何遽不及魯侯哉、殿下・公方・御前、此在国俗則可、若伝久行遠恐有碍、

一急性子乃鳳仙花子、不弁是非、
一妻之姪曰外姪、

一鰻魚、俗名鰻鱗・膾殘魚、惟堪作生、不堪作脯、

一凡作書助語、如之乎者也等字、非甚不得已、不可用、句要勁、詞要古、而無用古之跡為佳、所以一心文字、出之先秦兩漢者為妙、若要近便適用、或取尺牘爭奇、蘇黃小品選其可者、熟翫可亦、亦可
一伊藤誠修兄策問甚佳、較之旧年諸作、遂若天淵、儼繇此而進之、竟成名筆、豈遜中国人才也、敬服々々、

一以百歲為上寿、八十為中寿、六十為下寿、
一阿房宮賦、晦庵先生・西山先生泥定其人二字、謂是六國之美人、殊不知唐太宗諱世民、當時世字則或諱、或不諱、而民字則十諱其九、此人字即代民字者、言取掠於其民者、非取掠美人也、二公大儒也、真儒也、此文之膾炙人口、行及千年、猶尚有此誤、況其下焉者哉、

一成湯自責致雨、古今美談、言未已而大雨、天亦応之速矣、然六年之前、幾無了遺矣、*乃至此方自責耶、

*『舜水先生文集』「子」

一作文以氣骨格局為主、当以先秦兩漢為宗、不然則氣格不高、不貴、不古、不雅、參以陸宣公・韓・柳・歐・蘇、則文章自然有骨氣、有見解、有波瀾、有跌宕、有神采、取其精華、去其糟粕、文之最上者也、

一大明講書講及註否、安東守約問對曰、大明講書後來競出新奇、以苟功名、即伝註久已高閣、举業家久已不知集註為何物、雖先輩宗主、伝註亦不以入講、但讀本文可也、惟取集註為依傍耳、旧時主意惟蒙引及江陵直解、王觀濤翼註、為不背伝註、惟詳之、

一昔者鄭子產小国之卿耳、猶能以礼治其国制其俗、生為君子没称神明、愚嘗遊於鄭矣、鄭人家至戸到莫不尸而祝之、至今頌其遺愛不

衰、

一省庵問、老師徵辟不就其義如何、對曰、不佞事與吳徵君極相類、薦吳徵君者忠國公石亨權將也、薦不佞者荊國公方国安、方擁重兵有寵於上也、吳至授六品官而辭之、不佞兩次不開詔而即授四品官、不拜其間稍異耳、吳徵君時、當國者李相公賢諡文、賢相也、英宗復辟之後賢主也、尚有可就之理、徵不佞時當國者為馬士英、姦相也、彼時馬士英遣其私人用某同不佞之親家何不波進士名東平河南解元即小女之舅到寓、再三勸勉深致懇懇、若不佞一受其官、必膺異數、既膺異數自當感恩圖報、若與相首尾是姦臣同黨也、若直行無私是背義忘恩也、是舉君自伐也、均不免於君子之議、天下万世之罪、故不顧身家性命而力辭之、不然不佞亦功名之士、枳褐即為四品道官兼京職、監軍四十八万与国公大将軍送為賓主、豈不煊赫、而乃力辭之乎、要知不佞見得天下事不可為而後辭之、非洗耳飲牛羊裘釣魚者比也、亦非漢季諸儒閉門養高以邀朝簪也、

一竜門在陝西西安府韓城景中、通黄河之水、兩山對出如門、故謂之門、亦謂之臺、以其化竜也、故謂之竜門、其山即謂之竜門山、非有二也、然李膺故宅亦有竜門山、則又非一矣、化竜者每年二月下旬・三月上旬中旬、雷震地中、桃花盛開之時遇吉日則選竜、遠近士女車馬喧闐、競於沿河供張以觀此、從古相傳、無有異辭、凡屬水族有鬣者、皆於此聽選、一跳而過、即為蛟為竜、不能者点額而退、以需後選、族姪某恢齊字、為晋寧州同知、官於其地、目擊其事、或非亡誣也、

一取妻不取同姓、即是周礼也、唐虞之時未曾聞焉、古人有言、上古之事存而不論、

一生順問、今早上公見先生謝札曰、拜登二字不能解、拜即伏拜之拜

登亦登級之登坎、謝是先生之謝而高書者何謂也、答、拜者是既拜而登其物也、謝是謝上公、礼宜高擡、中国廟堂之礼、聞字・請字特字俱一擡頭、又謂之双擡、

一問、解額何謂也、答曰、解試有額、或多或少、如南京每科一百四十八名、而雲南貴州止四十余名、

一伊藤誠修學識・文品為貴國之白眉、然所學与不佞有異、不佞之學木豆・瓦登・布帛・菽粟而已、伊藤之學則雕文・刻縷・錦繡・纂組也、未必相合、与守約書

一伊藤誠修誠貴國之翹楚、頗有見解、賢契欲然不是、大為推重、虛心好賢此更賢契美德、然賢契豈遂出其下、同上

一与安東守約書曰、世間淳誠謙厚、更有如賢契者一人否、不独貴國、即中国亦在所必無也、

一答守約書云、來札云、不佞非能言不能行者、此賢契極有眼力处、不佞生平無有言而不能行者、無有行而不如其言者、至若文章合道行誼合天、此是子思・孟子一流人、伊川先生以下或多媿焉、不佞豈敢当之、今賢契懇々求不佞之為人、不佞敢自評騭、不佞之為人、心為上、德次之、行又次之、文学又次之、而書法為下、全上

一前聞久留米磯部勘平目下行三年之喪、今日有書至者云、土佐大夫野中伝右衛門葬父、依聖法甚惡仏氏居喪三年不弛、往々使国中行喪葬礼、如此則貴国非尽以邪教陷其親、特人自没溺而不能振耳、此後有行之者、亦不為驚世駭俗、居今反古、不足慮也、全上

一日本風俗大夫以四十二歲為厄、因及婦女以三十三歲為厄、此竊陽九百六之說、而又錯繆陰陽以惑世誣民者也、誰者信則懺悔之左道行、惑而迷則度厄ノ姦謀售、是可以欺凡庸而不可以欺豪傑也、況人主基命、閱乎昊天、元日賀歲 光國書

一生順曰、大明有火器否、前言不佩刀劍、何以忘敵、答曰、刀劍特不帶耳、別有軍器局收貯、有事取用、鳥銃大明頗有絕高手、銃砲亦甚多、

一文公家礼皆士礼、間有及於大夫者、若諸候^(侯)之礼、未可尽以此為憑也、

一上公臨蓬華、僕亦感亦愧、然不敢侈為一身之榮也、貴國習為驕貴、未知下賢之礼、答野節書

一朱子道問學、格物致知、於聖人未有所戾、王文成即有高才、何得輕詆之、不過沿陸象山^(之)習氣耳、王文成固染於^(之)氏、其欲排朱子而無可排也、故拏格物窮理以為贅議爾已、略、王文成為僕里人、然灯相炤、鳴鷄相聞、其擒宸濠、平峒蠻、功烈誠有可嘉、官大司馬封新建伯、後厄於張璉桂萼方獻夫、牢騷不平之氣、故託之於講學、若不立異、不足以表見於世、故專主良知、不得不與朱子相水火、孰知其反以偽學為累耶、

一王義之居会稽、有山陰老姥、持六角扇市之而弗售、右軍取扇各書數字而姥慍、余今年寓日本、衣極垢敝、欲求一和灰紬鍼之人、雖倍其值以倩、居停及隣母、無有応者、最後得是姥、為余勤々浣洗、酬之以錢而辭、詰其故但欲得余書二幅、亦大異山陰老姥矣、故欣然為書之、

一蘇文忠公像贊云、天才不及介甫、然而有用、理學不及正叔、然而適時、

一王弼州・李夢陽・李于鱗・徐中行皆大名公、李崆峒立朝骨鯁、

一雖古礼不修墓、然補偏救敝、猶愈於不為者、非交冬則墳辺士必不^(之)宜動、

一明朝承百王之後、修明礼制建興膠庠、比之三代兩漢之隆則不足、

較諸因循苟簡之朝、則又大相徑庭已、學校之設約略計之、凡有六等、闕里為孔子發祥之鄉、且孔林在焉、衍聖奉祀、欽差鎮守、歷代增崇有加無損、堂殿翬飛、碑坊鱗次、大都皆為勅建、固不可及矣、是為第一、兩京乃天子辟雍、規模宏敞、品節精詳、其制尚矣、然南京自大學之外僅一^(之)天府學、北京自大學之外僅一^(之)順天府學、上庠下庠之制不備、四郊四門之學無聞、所存者惟社學而已、是為第二、至於^(之)省會之區、賢豪迭興、名卿接踵、且撫按司道蒞官謁聖、及每月朔望必須詣學行香、府臬官不敢不竭力經營以希課最、其為第三無疑也、余外府州、視其科第盛衰、地方肥瘠、州府官賢不肖以為差等、不得不置之第四、^(之)童童看案曾一至紹興府學、得門而入、一望無際、結構精嚴、位置咸當、自不必言、蓋礼部貢舉、每科登第、不下數十人、而七年之中三^(之)擢狀元、宣乎其及此也、然松江府學亦人文之藪、而領宮徧淺、蓋以基址狹隘、無可恢廓、又不移之於郊閑之間、所以至此、是又不可以一例論也、亦有簡陋州縣、本非非衝繁孔道、守令闡茸昏庸、鄉紳隱情惜己、徒為具文而已、列之第五、若夫荒僻下邑、蠻貊新開、戶口無多、錢穀單少、實與累科乏人、忠信十室鮮有、則崇祀之所頽垣折棟、育賢之地、鞠為茂艸、抑亦姑置第六、

*東大本見せ消ち「節」

一與陳遵之書略云、弟飄流無已時、近亦留住日本、日本國之禁三十余年、不留唐人、留弟乃異教也、去年六月、^(之)宰相源上公之招來至江戶、極蒙優礼、在日本國共託以為未嘗經見之事、上公乃為當今之至親尊屬、封建大國、列為三家、盛德仁武聰明博雅、從諫弗拂、古今罕有、弟處賓旅之位、不能有所裨益、而尸素廩餼、深用為媿、上公讓國一事、為之而泯然無迹、真大手段旧称泰伯夷齊為

至德、然為之而有其迹、尚未是敵乎、世人必曰、古人高於今人、中國勝於外國、此是眼界逼窄、作此三家村語、若如此人君、而生於中國、而佐之以名賢碩輔、何難立致雍熙之理、世子亦能仰体尊意、近更婉曲綢繆、弟於如許大功名大權勢、棄之如敝屣、逃之如沒溺、豈今墓木已拱、乃思立功異域、但遭遇如此、雖分在遠人、亦樂觀其德化之成也、此書与兄作永訣、故縷々至此、閑暇之時每飯心未嘗不在兄所、然今生豈能有再見之期、徒虛想耳、

一与孫男毓仁書^完、

日本禁留唐人已四十年、先年南京七船同住長崎

十九、富商連名具呈、懇留累次、俱不準、我故無意於此、乃安東省庵苦々懇留、軫展央人、故留駐在此、是特為我一人開此厲禁也、既留之後、乃分半俸供給我、省庵薄俸二百石實米八十石、去其半止四十石矣、每年兩次到崎省我、一次費銀五十兩、二次共一百兩、昔菴先生之俸尽於此矣、又土儀時物絡繹差人送来、其自奉敝衣・糲飯・菜羹而已、或時豐腴則魚鰯數枚耳、家止一唐鍋、經時無物烹調、塵封鉄鑪、其宗親朋友咸共非笑之、諫沮之、省庵恬然不顧惟日夜誦書樂道已爾、我今來此十五年、稍々寄物表意、前後皆不受過於嬌激、我甚不樂、然不能改也、此等人中原亦自少有、汝不知名義、亦当銘心刻骨世々不忘也、奈此間法度嚴不能出境、奉候無可如何、若能作書懇々相謝甚好、又恐汝不能也、

一答王師吉書、略云、近者上公礼待日益隆重、今年正月以來、賜肩

輿直入朝中、二月間弟下体患一腫毒、上公親臨視疾、事々周摯、使命餽命遺絡繹於道、諸卿大夫無不親來視問、半月之間上卿有視聞八次者、方之於古、惟魏文侯之於卜子夏・田子方・段干木、或者庶幾今上公聰明仁武、遠通文侯、而弟樸樸推魯、大愧此三賢矣、時恐黔驢技尽、為諸鄉親羞耳、上公諭令接取小孫來此、若得

一可意者、晚景少為愉悅、稍解離憂耳、一到長崎便須蓄髮、如大明童子旧式、另做明朝衣服不須華美、其頭帽衣装一件不許携入江戶、弟不喜見此、其随來之人不妨〔以〕日本衣易之、亦不可以彼衣被体、祈親翁与文伯兄商之教之、

〔長門鶴台韓客筆語〕

一長門癸甲問槎姓名

鶴台 姓滝、名長愷、字弥八

大麓 姓草場、名安世、字仁甫、一字周臧^藏

南溟 姓山根、名泰德、字有隣、一字六郎

士儀 姓滝、名鴻、字士儀、称鴻之允

嵩山 姓秦、名兼虎、字子熊、称熊介

東郊 姓和智、名棣卿、字子萼、称九郎左衛門

大原 姓奈古屋、名以忠、字大夏、称九郎右工門

俊屋 姓竹中、名俊屋、字仲良、称弥次右工門

太華 姓香取、名文圭、字子璋

韓客姓名

秋月 姓南、名玉、字時韞、製述官

竜淵 姓成、名大中、字士執、正使書記

玄川 姓元、名仲拳、字子才、副使書記

退石 姓金、名仁謙、字士安、從事書記

玄川

此処亦宜有性理之学、果宗主程朱否、

鶴台

此方亦有性理之学、膝惺窩・林羅山唱首、示來伝其統者不少、近歲東都有徂徠先生者、大唱復古之学風靡海内、所著有弁道・弁名・論語徵等、其詳非一席話所能尽也、

玄川

此皆宗主程朱否、

鶴台

排程朱而為禪儒不取、其学宗古經、而不拋註解以古言証古經、似可信拋、

玄川

捨註解而読經、猶無相之贅、程朱之学如日中天、不欲篤信程朱者皆異端也、高明意見、未知如何、

鶴台

筑前有貝原先生者、尊信程朱、如信孔孟、而晚年著大疑錄、標舉程朱之言背馳經旨者、僕亦不免有疑耳、

玄川

程朱之訓、豈有可疑者耶、大凡読書之法最難精詳、既未能精思力踐、而遽致疑難、正猶病者真元不健、客邪闖入、明儒祖陸者正坐在此習、今見貴邦人材輩出、大有転移之機、而源頭之不正実有漫々之憂、如高明之有德邃学正、須洞見「大源」引進後学、区々之意自不敢置而不論、未知高明以為如何、

*『長門癸甲問槎』により補う。

鶴台

謹領明諭、

竜淵

貝原姓名願聞之、筑州有竹春庵、著四書疏林六十余冊、專尚朱子

云、果爾是正脈、足下何不稱之而稱貝原邪、

鶴台

貝原其姓、名篤信、号損軒、竹春庵亦其門人耳、

秋月

敝邦成均館掌聖廟俎豆多士絃誦、春秋上丁行釈菜之礼、国子先生以毎月朔望与諸生焚香謁聖後、退坐明〔倫〕堂、講六經四書有宋性理之書、主上三歳一拝文廟、試諸生於泮宮之下、国子先生亦月試於杏樹下、

秋月

出一盤白餅・一椀菜菹、

此敝邦白餅、歳時家々作此、為湯餅歳食、貴邦草々供客、可愧、無此餅否、

鶴台

感謝盛念、此邦菜糕以糯米蒸擣所造、与此製法差殊、臘月家々製此、三朝食之、及祭祀燕享用此、

右来朝赤関筆語

鶴台

諸君東行浪華・江都及其它処々、藻客髦士抱藝求見者定多矣、才学风流、

秋月

江戸諸彦中井太室・木蓬萊・僕輩、尤所倦々者、知足下未久東赴望為僕致意、浪華木弘恭之風流、合離之才華、平安那波師曾之博学、釈竺常之雅義、尾張州源正卿之偉才、岡田宜生之詞律、二子之師源雲之豐望、皆僕輩所与傾倒、而那波与之同往江都、情好尤密、足下若与從容、当知僕輩此言非阿好之比、幸為致意、

鶴台

太室・蓬萊交誼尤厚、其余諸士未得一面、東行若与相会、宜伝盛意、

玄川

在江戸時、見井四明書、略聞鶴台消息、烟雲數千里、更覺依然、玉澈珍重而嵩山諸人俱平安耶、何携与同来、

*『長門癸甲問槎』により補う。

鶴台

井四明、僕未審其人、

玄川

四明名潜、備前州文学也、本家江戸、遊官于備前、去時酬唱最多、行到江戸後有書、有言鶴台声聞矣、備前文学四明外又有近藤篤号西崖者、足下俱無面雅邪、

鶴台

松子可服餌否、

退石

此乃華人所謂五鬣松子也、餌之、可以補腎養年、

退石

貴邦賦税、一遵什一之例乎、

鶴台

租税、以什之四為率、

退石

比三代一何多也、

鶴台

土壤豐腴、民猶以為輕也、

退石

大率十手斗所種、田收幾手斗、

鶴台

沃土下種一斗、收成一斛五六斗、雖瘠地亦不下一斛一二斗、

竜淵

江都劉竜門維翰宏儒也、足下曾与之唱和乎、

鶴台

未識其人、

又

此冠、臥竜冠乎、

竜淵

東坡冠也、秋月所戴鬚綴方冠、別無名稱、

鶴台

貴国亦有不患痘瘡者乎、

竜淵

無人不經、而南地或有不經者、

秋月

見和子尊宰相怨二女詞、深得漢魏余響、足下亦為之嘉翊、雖和子之詩、不知其為大儒、今乃知足為足下之友、恨不一見此人也、

鶴台

是子、海内無双之才也、唯恨少長仕途、不能讀破万卷、未由展驥足耳、

秋月

足下亦及見徂徠而学之否、

鶴台

僕生也晚矣、不得親受業於門下、從事其高弟周南也已、

竜淵

和子蓐・文中、所謂梶子者誰也、

鶴台

梶孝孺号周南、本藩明倫館祭酒、略、有周南文集行於世、

玄川

往還四五百里、所接文人韻士千余人、大抵聰明秀俊、詞藻蔚然林立、僕輩每相語以為、日東文運日闢、古人所稱、天氣自北而南者斯有驗矣、但恨目今波奔而水趣者、大抵是明儒王李之余弊、而唱而起之者物徂徠實執其咎、前日足下之語先有及徂徠者、嵩山書亦有提說者、未知足下与嵩山常以徂徠子為醇儒正學乎、座間雖忿、撓敢一問之、

鶴台

此方學者不遵奉徂徠之教者鮮矣、雖僕亦然、至正不正之說固非草々之可尽矣、不說徂徠所著書以究其說、則安知其道之所在乎、會見渠央、不得与諸君論究其說、深以為憾耳、

玄川

頃在江戸、有以徂徠集示之者、一番披閱、大抵以豪傑之才、騁掉闔之弁、所引用者皆王李、徐論之、其受病則又有甚焉者、若使此人屈首於操存實踐之地、則不独自我之幸、其所以嘉惠後學者、豈至於文章之末而已哉、朱子之道如日中天、是孔子後一人、反是者皆魍魎之遠影、想達識如鶴台者、只欲學徂徠之明處、其暗處則蓋已痛棄之、不有余、但恐後生新學將以為鶴台老成者、猶尊奉之如此、吾輩所依歸独不在是邪、其為世道之害、有不可勝言者、幸望深引在門揮之義、無陷胥及溺之弊、如何々々、

鶴台

* 徂徠之學以古言解古經、明如觀火、如朱子明德解、与詩左伝不合、仁為心德、有專言偏言之目、其說至管仲而窘矣、古者詩書礼樂謂之四經四術、士君子之學是已、豈有本然氣質・存養省察・主一無適等種々之目乎、聖人之道敬天為本、徂徠之教亦然、敬天守礼之外、豈別有操存實踐之法乎、諸如此類、更僕何尽、是僕之所以有疑於程朱也、

* 【頭書】「家語儒行云、公曰、敢問儒行、孔子曰略言之則不能語其物、悉數之則留更僕未可以對、」

玄川

徂徠明處、足下亦与明焉、其暗處則足下亦宜取舍、但此不可隻紙片言而決矣、幸於静居幽独之時、却取古今儒籍、掃去心中之物子、只從頭順理擘將下、要文從意順、後更取物子說觀之、則以足下之公平、豈無所痛看得破綻處邪、且名教中自有樂地、何必捨得礦辺之零砂以較百鍊之精金乎、区々之誠不欲以異邦人之一論即置耳、足下幸諒之、後學新進正如赤子之初學言語、長者尤当十分慎重而教之、使習之、足下學半之工、尤不可輕也、

鶴台

深感見教、僕當從容尋繹耳、

玄川

君子虚己之盛、深用歆難^{〔歆〕}、誠如此也、後生之幸也、來世之幸也、

竜淵

茂卿之誤入、正坐才太高、弁太快、識太奇、學太博、而其文華力量、实有不可遽斥絕者、後學若能師其可師者而捨其可捨者、則可謂善學茂卿、而茂卿亦将有補於後人也、

秋月

僕熟閑徂徠集及弁道・弁名、其學術終不可与入堯舜之道、而其文焰甚煒燁、有不可磨滅之氣、惜其以過人之才負誤人之罪、恨不起九原如鷺湖一会也、

鶴台

文焰煒燁者、其豈鄉愿之類也乎、孔子曰、君子無所爭也、鷺湖之爭、所以不免為朱陸也、

秋月

足下可謂伝法沙門・護法沙弥、僕雖心切老婆、無如之何、

鶴台

所謂無性孱提、仏不能度者、呵々、諸君一片婆心、僕敢不感佩、而唯懸空詆呵徂徠已、而未蒙明拳似其教与先王・孔子之道相齟齬處、是僕之所以「不」得默契也、且此方無經義策士用朱子新注等之制、是以士君子之學各從所好、且此方封建之治与三代同風、非漢唐之所得与比也、君臣上下之間恩義相結、猶家人父子也、是以納汙含垢不用讞々之察、而海宇大治矣、夫紫陽綱目之嚴刻、其或可用諸郡県之世、而不宜施諸封建之國也、僕輩世祿仕諸侯國、苟不能共治國之用、其謂之何、是所以棄宋後之學而從事古學也、

秋月

三代以封建治國、而以人道精微孝弟忠信為教、其學問何嘗与後世異乎、物子初出華訓誦經之法、至今學士多賴之、其功不可誣、而只是自孟子以下妄加詆斥、此度外之人也、足下不可以愛其人而忘其惡者、為學術之病、非小慮也、僕亦謂物子可与富嶽齊高為日東之一巨手、非欲工訶此人也、足下其思之、

鶴台

高意謹領、物子亦不外孝弟忠信而為道、且僕前所謂苟國治民安、則復何求、何必爭學術之異同乎、

秋月

但叙參辰之別好矣、

竜淵

曾見貴國三才図会有云、安德廟中藏「平氏故物、」今尚留在否、

*『長門癸甲問槎』により補う。

鶴台

相伝、古有衣袍・樂器・甲冑之類、火災烏有、今唯存 幼帝御劍・平教經佩刀耳、

竜淵

西京木順庵之派、今有幾人邪、

鶴台

荒井白石・室鳩巢・柳川三省・梁蛻岩・祇園瑜等、皆出其門鬱為名家、俱已為故人、未知今有子孫否、

竜淵

此外更有名家邪、

鶴台

西京有伊東仁斉、著論孟古義、其所見大要与明吳廷翰之說暗符、其子東崖共為儒林巨擘、筑前州有損軒・春庵、諸君已悉之、肥後州有藪震庵・秋玉山玉山兄為時、習氣酒、徂徠門有滕東壁・太宰春台・服南郭・吾県周南、長崎有盧草拙、皆近世大家、其所著刊布海内矣、

竜淵

仁斉者（意）維楨邪、東崖者茂卿所謂西京有伊原藏、関以西有雨伯陽者

邪、

鶴台

然、伯陽亦順庵門人、任對州、

*『長門癸甲問槎』「仕」

竜淵

太宰純有子孫繼聲者乎、

鶴台

有義子、不知其學業如何、

竜淵

周南亦然否、

鶴台

有男泰恒嗣業、戊辰接來賓、相唱和、

竜淵

草大麓、非草場中章之後乎、中章學於華人、以其生長長崎之故邪、

鶴台

中章長崎人、來仕本藩、學書法於林道榮、兼通象胥、大麓其孫也、

竜淵

貴邦閱武一年幾次邪、家々人々皆屬兵藉邪、

鶴台

士人并歩卒皆有隊伍、農工商賈不得与齒也、閱武諸國有之、但其法稍有異同耳、略、本藩制、以四時農隙蒐獵、為民除害、或寡君親出、或卿佐撰事、以寓操練之法、且閱隊伍・器械、又有武藝教師教陽、每馳馬擊劍習射使捧、不限幾次、

竜淵

貴邦帶劍之俗、自源賴朝時始云、果然否、

鶴台

古郡県之世、唯武官并兵士得帶劍已、士庶皆佩刀、則自賴朝時漸矣、

問、鴨綠江長広可得詳乎、

答、鴨綠江表則有三江、十里而近、長則自發源至入海、可千里而

近、

問、承貴國至北京道、經沙漠、自長城外入中國、果爾乎、行程幾

許、

答、弊邦至燕京、經遼瀋長城、行程三千余里、

問、貴國世宗以來不崇仏教、僧与編戸民無異乎、無有官寺・官

僧如統正者乎、

答、弊邦貴四民、而賤僧道不得与編戸比、國有左道之禁、那得有

官寺・官僧、

(七子韓客筆語)

一正徳元年辛卯朝鮮國通信使趙泰億等來聘、於是 文照廟命七家儒臣抵候館通刺唱和、若干繕写備 上覽、

木寅亮 字汝弼、号菊潭、又号竹軒

附 兒島景范 号天渤、順庵先生門人

高玄岱 字子新、号天漪

附 高但賢 字松年、天漪長子、号雪溪、高倫庸、字龜齡、

天漪次子、号白鳳

宅緝明 字用晦、号觀瀾

室直清 字師礼、号鳩巢

源保庸 字紹卿、号寬齋、又号竜溪、

*1 平元成 字允仲、号霞洲、又号松巖

*2 祇正卿 字伯玉、一字斌、号南海、紀伊州儒臣、

*1 東大本【頭書】「土肥氏」

*2 東大本【頭書】「祇園余一源正卿」

十月廿八日客館初会、席上請李学士木都寅亮、隣聘不渝、海路無浪、使台賓從安穩、可謂

兩朝之慶也、雖然躋涉險阻、触冒風霜、賢勞万状言靡罄、爾不佞、氏木、名寅亮、字汝弼、別号菊潭、敢問貴姓・字・登科之年、

復

李磧

不穀、姓李、名磧、字重叔、号東郭、生甲午、乙卯登進士科、癸酉為文科状元、丁丑又登文科重試及第、歷太常通判僉正及地部員外郎、出為安陵太守、製述官承命來到耳、

初会謁李学士

天漪

蚤聞盛名纔接手儀正慰御李之懷矣、時際冬寒江山幾千里程触冒風霜難為跋涉勤勞極矣、然三使台車馬從容星聯水擁、坦然抵此、凡百從者無一所蹶寔惟兩國慶幸千載一時也、叩此恭賀、并候文履、

復同前不變一字

呈東郭李学士

天漪

東都高玄岱、字子新、自号天漪、本中華族祖渤海高寿覺、福建彰郡人、航海薩摩川〔州〕寓焉、後帰明、父大誦年十六跡祖入明、吊祖氏之墟、遊魯軫齊蹴燕跨趙、北經匈奴之域、南及東寧之隈、行嘆天下文物之盛、歷覽名山・大川之勝、殆十有余年矣、一日慕母之念不歇、輒登商舶直到長崎、時寛永六年父年二十有七、僕即長崎之產也、從幼師事曼公戴先生者、先生浙之杭州西湖人、明之遺士也、明亡航

海寓長崎二十有余年、僕之親炙也久、而其語言・音韻則不期而頗解焉、至今皓首猶操南音、但愧執性迂魯、質體脆薄動輒嬰疾、雖少有夙志不能肆意勤業、徒增犬馬之年耳、先生没、僕不自度、妄欲破浪長風一詣華域者數、而 國禁不許越界、乃退闕中原輿地圖等書、效作臥遊、聊復慰懷、凡其名山・大川・古今沿革俯仰一室中歷々在目、至其境与神会悅焉自悞、上則攀躋聖賢出處之區、下即追訪父師之遐躅、清霄白昼掩卷長嘆、適憶往者在京曾嘗見陽村權先生親手所

画皇明一統輿地圖暨歷代沿革、幅員可六尺、圖下有小記、係建文四年秋八月四日、顧其記中寓意者深矣、今不識其圖無恙否也、茲有使華之來、寔為千秋一会礼儀之巨標也、僕等幸側下風獲接盛容、目其所未覩、耳其所未聞、一為上慶、一為私喜、曷勝踴躍、頃者會得東國輿地勝覽遐瞻國光、竦然起敬、窃仰道德文章之富衣冠礼樂之盛、炳焉煥焉、直溯中原、而中原之於大東源遠而流長矣、今所閱本殘缺不全、若江原・忠清二道未得經見、又若京畿〔畿〕道則雖有而還少漢城府、此一大憾焉、私窃不揣下陋、採摭其名山・大川・人物之美、隱括大略綴成五言若干句、蓋亦不自知其言之是与非、思慕之切耿耿不寐、寐而不寢、必且寢焉則凡其所言無計寐語而已矣、寐語之所干君子者原焉可矣、遂敢手揮藁奉東郭李先生、願先生察其欲慕之意、試一電覽不棄、則幸荷無涯矣、雖即謂僭越之罪莫逃、又且江頭壳水般門弄斧之哂、安可以免之乎哉、

長編詩略、

天漪

同日遇唐判事趙鄭二氏稍々曉得北京話問之、北京城聞有九門、進貢時從那一門進步、鄭曰東化門吾謂是乃東直門耶、你們遇遼東始入万里城、聞有門榜李斯篆書天下第一関五字果是否、曰是、又問、山海関開說大局面果是否、曰是、又問、鴨綠江多少濶、曰十里濶、

又問、漢城府到北京多少路、曰三千里程每歲進貢、問万里長城多少高、曰高不知幾丈、上可五馬聯鑣、車可二兩、趙氏字君瑞、鄭氏字昌周、

十一月初五日再會謁東郭

天漪

十月廿八日始得面晤、未及浹旬、渴想風彩殆入夢寐、若將驪駒一嘶枯柳難綰、遙隔積水重淵徒作雲懷霞想而已、看君容貞壯實才思鼓沸自非今人之可以企及、獨於古人中求之或可得矣、敢問貴庚暨令胤幾位貴弟所在地名、

答

東郭

立嗣家世、本在京洛都城之內、問、此則漢陽城否、答、自是簪纓世臣、問、前朝有牧隱先生李君者、莫非令先祖耶、答、牧隱先生即僕外家先世、即壬辰年間首相驚溪先生即僕外高祖、而驚溪文章貴國亦聞之矣、然則先生即文章閣閱家也、敬羨、僕之先祖驚溪當壬辰之亂為領議政矣、諱即山海也、問、前有長篇、稿奉之、未知電覽否、答、謹已奉覽矣、壯哉奇哉、問、都下往北京城多少路程、答、四十日程、問、鴨綠江多少濶、答、距都下十四日程而不遇一衣帶也、問、雖謂之衣帶、必有長濶之量、答、其源則出於白頭山、長不可測、而元非險惡之水、且狹不足為南北之限矣、問、貴國前代有道說千八元、精於天文地理、至今尚風水之說則必有精其術者、幸教示之、答、道說自是神僧而尤精於地術、至今枳氏家多有傳其衣鉢者、我國本不崇仙、故皆枯死於山林而已、僧輩中多有能通地理者、蓋道說之緒余耳、

岱本中華族、世系渤海高氏、弟恐以渤海・鞞鞞混作一家、適緣芳洲雨氏之言略書家譜之一端、呈諸三使台、幸垂電矚、自欲明非鞞

鞞也、

先考諱大誦、号一覽、姓高氏、本中華族唐南平郡王崇文裔也、其先出齊太公之胄、自敬仲得姓、望於渤海、其族聯綿不絕、經漢名魏、至唐大興、因排攘冠賊安鎮寶鼎、啓封渤海以旌其功焉、故其族世号渤海高氏、厥後弘規・武光等皆一世名臣、忠義炳輝威武振華、世變業微盛衰交遷、一千余載之流渺々一氣萌生、昭靡合程祚、軫朱明嘉靖、或出說若隱耕於魯於齊、伊賢渠愚、遂使其孫其子延緒葦原、有知夫祖・曾祖・高祖受未封域有一源文獻、而今日之我先考渤海高氏之子者乃創祖父東渡爾、

室鳩巢

諸君奉使万里外国、梯山航海乃抵此、王事靡盬、覽勞何如、然方今兩國修好兵戈不興、海東生靈沐於泰平之化百年于今矣、僕意諸君忠國之心、宜其樂而忘憂、而僕之徒亦得預勝會、奉余觀從容翰墨之間、何其幸哉至祝、

呈東郭 詩略

鳩巢

僕始以為公必壯年之人今謁見齒德之高出意外、而乃受任闕外往来万里、其氣豪壯殆如盛年、他日伏波瞿鑠公優為之、豈所謂丈夫老而益壯者耶、使人生敬、

鳩巢問、大明一統志朝鮮下有北嶽山、其下注云、本朝初朝鮮國王李某依此山為都、莫是為漢城府之鎮台否、豈其山在京城北耶、不然其所以名北嶽者如何、鏡湖答、北嶽即我國々都之鎮山、勝國之世築城于此、以為保障之地、逮我神祖定鼎于此以建万世無窮之基、明志所記亦不謬悠矣、問、北嶽之義如何、答、其義無他、在北故也、問、貴國所謂三京是漢京并西南二京稱之、^{〔附〕} 湖龍答、我國漢京是即今王都、平壤是西京即箕子及高句麗所都、松原即開城勝國所都、慶州

即新羅所都、

今按此答徒言問都之地不言三京，是指何等言之所答非所問也。若其所言則史所載已昭然矣，何待於問而後知之。

問、貴國平安道有狄

諭嶺、意是昔時狄來犯時或踰此嶺故以為名耶、不然其所以名者如何、願示之、
竜湖答、我國平安道江界地〔有〕此嶺、当初命名不以北狄來犯故也、厥後或被北虜之兵其名偶驗、問、此間近有士人覆姓武林者、其人先世產于貴國、其所居之地名武林、壬辰之亂為我師所獲、遂為日東人、因以鄉里名為姓、蓋所傳聞如此、不知貴國真有地名武林者否、想是小鄉聚之名、雖足下亦有不識者、泛叟答、我國州郡無武林之名、或別号、或鄉名、僕亦未詳、

送南書記還朝鮮

鳩巢

迢遞關山万里余、音塵從此自稀疎、別君不用臨岐泣、但使功名照竹書、

嗚呼、言有限而〔情無限〕、欲以有限之言盡無限之情、豈可得乎、區々所祝在此結句中耳、万々自愛、

送巖書記序

觀瀾

孔孟之後、程朱之前、距千歲天下之學士固多矣、程朱之後以迄于今距幾百歲、天下之學士又增多矣、上以是教誘、下以是求仕、父兄督子弟趨、自朝而野戶誦家說日極其盛、使孔孟程朱復生亦將顧其言之流行至此自為駭愕、而及索心知其意而躬體其全者、則何其鮮也、殆寥寥響絕而跡熄、趙宋之季承其警咳也、親去其典刑也、近及門私淑之徒如蔡黃李真諸公猶其傑焉、元有許魯齋、劉靜修、所趣既不能同、而至明有薛文清、丘文莊、雖其精神輝光、不能以鼓振一時潤化百世、而識之卓・守之約・信之厚・由之正一皆有所淵源、不与夫事估俚訓詁之末而淪簡捷虛誕之域者、侔蓋万而得一焉、其後遼之東有退溪李氏專尚朱子、嘗窺所著一二〔或〕弁四端七情者、擴充制抑

之方、因之益判、或指己為仁者、體認克治之功、因之弥切、自凡性命微言章句緒論、潛深須密莫銜莫速循々然以窮其所至、終乃就卑反內札動而義行、又其後我邦有山崎敬義者出、亦專尚朱氏、易則原太古之精義、範則明九峯之全數、自凡濂洛關閩、揚摧表揭分折經緯所述以垂世幾乎數十百卷、而其所為婦不出灑掃・應對・忠信・篤敬之間、終身持論諄々言、漢之薰・隋之王・唐之韓非思不覃也、非言不詳也、唯其不斯之察所以不臻乎極、嗚呼世距幾歲、壤阻幾千里、而其言之合若執契干左也、若按音于譜而計數千籌也、則所謂万而得一者將見之貴境与我邦、豈不偉哉、明人嘗有論貴境之文者、其意倨然以中夏文明自處、及隨訂其所為學、則尚糝雜老刻章琢句沾々喜以才子相為標榜、不復知古聖賢之大法要道屬而在外矣、此謂華而變夷可也、而拳世偃々唯名之狗景仰慕効不置、父兄子弟亦皆以是督而趨之、今而孔孟程朱再起、復將悔且怨其言之流弊至此之不遑、宜乎能知其意體其全者絕無而僅有也、方今我邦之踵山崎氏而起者世不乏人、而如貴境設科造材俊乂如林自王京至里閭挾詩書談仁義欲以砥行于家而建業于國、其能繼退溪氏以伝其宗者比々而然歟、僅々而存歟、有能增基瑩光不已以出其上者邪無也、蓋行中諸公皆其人焉、而特与足下從容奉誨亦辱一言之知、及送其旋以財也、則竄以言也、則陋卒率我邦所有能以道學自任与貴境先賢同其指趣之人、以贈焉、請其齋扁、

与巖書記副帖

觀瀾

僕於我邦多士之中、每推山崎氏為稱首、意願託足下齋致此言、使學晦齊退溪風者知異代殊域、亦未嘗無同調共趣之人、匪敢託也、垂諒是祈、今日海外亦復兄弟、分袂之際將難為情、海陸邈矣、為道保慎、

復觀瀾書

嚴漢重

敬奉惠牘，辭意勤摯，圭復再三若對芝宇，僕与足下各在海陸數千里外，風壤自別，影響不及，倘非兩國修聘之會，則安得与足下同在一席廣和詩篇吐論衷曲邪？良覲無幾，遠別在即，私悵惘々，若有所失，贈人以言，古人攸行而降及季世，此道幾廢，足下不以不佞為無似，辱賜盛論，評隲古今講確道學，僕雖庸鹵，其敢容嘿，蓋吾道之盛衰不以世代之下壤地之偏有間，而其晦其明，美係斯文之幸，不幸耳，尚矣孔孟不敢容議，而程朱繼開之功，亦何可量也，若延平·元定·勉齋·西山，可謂需時之碩才，衛道之宏儒也，彼魯齋·靜修雖其天姿既美，學術頗精，生平左袒之世，未贊右文之治，吁可惜矣，明興雖有程篁墩·陳白沙·王陽明諸人，間有駁雜之病，亦多偏係之失，而至如文清之學純實無偽，博洽多聞，肯以此為巨擘可乎？所謂丘濬者，為學詭異，立論謬整，以岳飛為未必恢復，稱秦檜為宋忠臣，意見如此，其他可知，此不得不弁也，粵若我國之退溪李先生，華人号称東方朱子，其造詣之超邁，學問之純正，足下已悉之，今不必置床而前，乎退溪有靜庵趙先生光祖·寒暄金先生宏弼·一蠹鄭先生汝昌·晦齋李先生彥迪俱以命世之才，倡明為己之學，著龜於國表準於世，其卓々可称者，惡可殫記於尺牘，後乎退溪有寒岡鄭先生，述栗谷李先生珥牛溪成先生渾率皆養德山林，羽儀清朝，國家待以賓師，士林仰若山斗，踵是而繼出者代不乏人，方今方櫺相明齊尹先生拯即其人也，聖朝禮遇，復出千古，旌招屢煩，終不幡然，位至台鼎，迹在丘園，年高德邵，拳國尊慕，其他說書求旨砥礪名行者，指不勝屈，古人所謂道在東者，信不誣也，仰惟貴邦俗尚，不變文教，蔚興宜其名儒輩出，扶植斯道，而至若山崎氏以足下所云論之，則蓋亦淹貫墳典，探賾義理，真可謂好學君子，而疆域既分，聲聞不逮，獨使異邦之人，不聞盛名，甚可恨也，明人云云之說，誠不滿一

哂也，我國自殷太師說教之後，國俗一變，士趨歸正，自我聖朝開創之後，尤有大焉，文物彬彬，賁飾洪猷，雖三尺童子，皆知貴王賤霸，崇儒而斥佞，尚稷雜老，不知大道云者，豈非乖戾之甚者乎？僕之東來也，与諸君子相和詞章者多矣，未嘗聞窮格之說矣，今者獲承來書，聞所不聞之語，良幸々々，但臨行卒々，未盡所蘊，略將草々數語，僅々塞責，知罪々々，惟異恕諒而寬貸焉，別日此迫更晤無路，臨楮冲帳，不知所喻，不備。

復嚴書記書

觀瀾

僕所奉寄則送文耳，不料臨行匆匆之際，再得見教，論討反復，良為感佩，適有事故，通書松浦生，因裁片楮，敢此報謝，大抵學者通病，動涉矜勝，固非李退溪家風所貴耶？足下莫以僕所報為爭是非而鬬意氣者，幸甚，來簡云文清為巨擘可乎？此段前後語脈，難得領會，其以薛氏為可尚邪？則正与鄙意合，以為不足尚邪？則所趣大異，宜措勿論也，丘文莊以岳飛為未必恢復，是於時勢各有所見，始不以為道義心術之累，況金兵之強比宋十倍，勝敗之跡未猝易以書生紙上語而斷也，其以秦檜為宋忠臣，則此老好高奇矯，衆論之弊然耳，然弁夷復正內外，其終身精力所用正在乎斯，一部世史正網絜然可見，豈以裂冠毀冕，称臣金虜為是者邪？特其造詣深淺，識趣高卑，固不及文清，而由之正与信之厚，蓋亦朱明一代非所易得矣。（僕序文以由之正信之厚，論文莊諸更被審）且夫訂學脈以論先輩，自當有体，雖乃高德偉績如王守仁，苟於門路有所乖馳，則義當棄之不顧，而〔若〕文莊之學之正，豈可卒然摘其小疵，遺其大醇，而衍義之補學的之編亦豈可以為詭異謬整而論邪？僕讀退溪啓蒙懷疑，常疑所說煩雜失古，潔靜精微，氣象著策一罔尤涉索強紛錯，而至其講學之醇養心之蜜，未嘗援彼誤以蔽此美，僕之議退溪則僭矣，而其略小而取大，亦

曰尚論之体当然也耳、貴国之学原于殷太師、則敬聞命矣、蓋範之無
伝退溪既以為憂、中間二千余載一得一失至金大猷、實始知尊程朱、
其之所得未知與鄭達可孰為淺深、達可文章經濟氣節忠慨前後無比、
但其所講說與胡雲峯四書通脗合而已、則識見所造略可窺測、而自李
復古出大加精明以至退溪、然後集其成而得其要矣、是僕之所以於貴
國特誦退溪不遑它及也、而於我 邦專學山崎敬義亦此意耳、得承退
溪之後有栗谷牛溪諸公多矣、好學君子風化之盛足可欽仰、前文所
云、明人論貴國文者指王世貞、語見其集而所云尚稷雜老、亦以批世
貞之學、來簡似未悉鄙意、請更被審、來簡又云、我 邦俗尚丕變文
教蔚興、然其美我 邦上世尚文、中葉事武、乃至今日組章繪句之巧
未能及古、而韜鈴橐籥之業則日益精、以今之武併古之文、是又僕所
拭目而望觀也、嗚呼一別真是流水不可再回、恨天慳良緣不使僕与足
下復獲對床把筆以傾倒所懷也、臨紙茫茫何所成思、不備、

問

觀瀾

李晦齋・李退溪之於朱學、平正醇粹可謂得其宗者、固攸欽服、晦齋
則有退溪所述行狀、可考、至退溪事跡亦必有門人子弟所錄、未得伝
而見之、爵里世系為何、仕自何朝至何朝、足下如有所記、請被錄示、

答

李磧

退溪李先生學問之醇粹、貴國諸公既已稔聞、不須更容贅說、先生本
以慶尚道醴川之人、官至二相、字景浩、其平生事跡已有名賢之撰
次、國家特設書院為多士藏修之所矣、宣廟末年際遇特隆、我東李栗
谷先生亦門人也、

問、得承、退溪氏後有能振其宗風者李栗谷可欣也、栗谷名字為何、
有論述可得而見者乎、我 國有山崎敬義者、實唱朱學之嚆矢、嘗就
貴國所印小学集成中抽取本註以登于梓、世賴知有考亭原本、貴國之

惠多矣、但外篇本係秦漢以後文字、一書之体合無註釈而嘉言善行內
三条有下訓処、題為本註、字亦欠脫、蓋為鑄字所誤而然、宋元明板
伝我境者並無考亭原本、不知貴國除集成所收外別有本註以行乎、
齊、唱酬交起不暇、見答而日已曠黑矣、客重

再問、前所問小学本註一事、請見教示、

答、日已曠黑、眼暗不能書、當待明仰復、明間取去如何、此子平生
略有豪氣、未嘗以不平之氣留於方寸間矣、今日相對不能吐一言相
酬、方言之不相通、最是不平処也、呵々、
復此數日、後贈、學士手指予品詩、稱善一字以言、

李磧

教意備悉、我國栗谷李先生者宣廟朝名臣、嫡伝李退溪先生統緒、其
學以明義利正王霸為本、以天道策問登魁科、所謂天道策問題者、天
朝能文章者所出而中朝之人不能對、我國使臣得其題而來出於科場、
栗谷先生之作以高等上之中為第一、其所對之策流入於中朝、其後天
使之來先生以兵曹判書為遠接使、天使聞其名曰、是製天道策者邪、
仍与抗執執手論交、其敬待如此矣、名珥、字叔獻、官至兵吏部尚書
兼大提學、年四十九早卒、有文集數十卷行世、曾已配享於夫子聖廟
矣、先生道義之友同時有牛溪成先生、成先生名渾、字浩源、号牛
溪、其道學之高明与栗谷同、亦登崇于朝官至吏曹參判、亦躋享聖廟
矣、古今學者非不多矣、經綸之才推栗谷為第一、豈不臆哉、我國小
學有二本、一則朱文公旧註也、一則李栗谷先生刪繁就簡且補闕遺以
便考閱進講於經筵、即今士大夫家皆以新本教子弟、蓋其註解詳悉無
遺簡約不繁、而猶不悖於晦庵本旨、旧本亦曾經大賢之手、豈有疑晦
之處而不可誦乎、小学一編實學聖路頭工夫而貴國亦刊布於國中、右
文之治即此可知矣、幸甚々々、眼昏清草悚々、

(徂徠題問槎)

題問槎篇首

物徂徠

正德辛壬之交、高句驪修聘東都、其使人趙秦億^秦任守幹、從事李邦彥、而製述官李瓚、掌書記洪舜衍・嚴漢重・南聖重從焉、皆彼中詞華選也、此方操觚士海西達東閩、蟻慕羶聚、所在雲鶩、染嚮相詫、蓋習俗所使要亦昇平一觀也、吾党好事迺稍々有起而試之者、事罷後皆寓稿吾社中以相^通眎也、後先陸續、委積巾箱底、頃因吉生秋生來為整理、頗成卷帙、暇便展翫、則予嚮所謂芙蓉白雪之色、自堪遠人起敬已、每值絕倒、輒呼毛穎、片語以賞、賞已因舉白自浮、段使謫仙來此、將謂晁卿尚在而猶且勉強、作菅裴以後人舉動、病懶^{謂又從旁旁之}老子又從旁為之點籌喝采、豈不愈益增吾党技癢之誚邪、中秋習日徂徠子題、

通昭錄卷之(マ)

越昭隨筆卷之(マ)

一太守 郡尉 令 長 司隸校尉 大尉 刺史 飛禍 五穀不升
屠 旌旗 輜重 豪傑 節 檄 旅生 京師 涉獵 鏌鋌
舐犢之愛 王莽時奇士 光武時長人 立嫡 三韓 倭奴 賦錢
口錢 雇山 墓祭 祝哽 祝嘏 群飲罰金 周僥國 閭閻
鬼薪白粲 寺 獅子 大爵 安息國 倭國 乘輿 命夫 命婦
虎賁 羽林 婚姻 甲乙科 子奇化阿 封牛 日月食 舅姑
食人 雌鷄化為雄 兩頭兒 四臂兒 死復活 男化為女 白波

皇后夫人 漢拭女 飛書 雛 君 暴室 白衣會 活千人者
漢桓多內幸 開闢 天運動 一元 奉行 三老 五行 更 陵
泰山 社稷 五祀 星數 彗星 余騎 上巳 明堂 冬不可作
土功 發地藏 明王四禁 服妖 雌鷄將化雄 樹暴長 樹倒豎
廉雨肉 池水變色 地陷 馬生人 女為黿 死復活 男為女
禹九州墾口 湯國數^歷地方口數 菊水 石漆 火井 毀仲尼廟
孔子墓 均輸 郡國 太子洗馬 刀劍 漢百官奉 取士四科 吏
解構 鉄中錚々 傭中傲々 竜蚓 王莽暴 骨鯁 悅民心 嘘背
生齒 大樹 赦 出 老騏見伯樂鳴 馬援欲死野 三人曰有虎
上所好下從之 物故 卓茂長者 知囊 徹膳 不忘糟糲之妻
八歲善計 閭閻 投壺 黃越 惡惡善善 遺失 雄飛雌伏
賈人不衣糸 革囊盛皿 水排鑄 飛書 大丈夫居世 便坐 論決
項背相望 惚倥 五諫 平帝郡國 阜囊 長休百日 六尺之孤
殺青 銅 折骨 竜飛 生石 異端 吾我 夷齊扣馬妄 与也
閭人 寺人 紙 寿冢 篆隸 物故 僂言 鬼薪 吳越春秋
許慎作書 積名 貫魚 僧 軍行里程米食 女作男 生四子
大倭 五禽導引 漆葉青黏散 青黏 葦 稻禾粟米糲梁
烏桓俗 泰山 倭人國 息女 元服 行在所 磔 弃市 須髯髭
券 使酒

越昭隨筆卷之七十

一太守 郡守秦官、秩二千石、景帝更名大守、後漢書光武紀註

一都尉 本郡尉、秦官也、掌佐守典・武職、秩比二千石、景帝更名都尉、

一令 長 皆秦官也、上萬戶以下為令、秩千石至六百石、不滿萬戶為長、秩五百石至三百石、

一司隸校尉 本周官、武帝初置、持節從中都官徒千二百人、督大姦猾、後罷其兵察三輔三河弘農、〔秩比二千石、〕音義云、以掌徒隸而巡察、故曰司隸、

一大尉 秦官也、武帝更名大司馬、漢官儀

一刺史 牧 漢初遣丞相史分刺州、武帝改置刺史察州、秩六百石、成帝更名牧、秩二千石後漢書註、哀帝改刺史曰州牧、光武建武十八年罷州牧置刺史、

一飛禍 倉卒而死也、後漢書周榮傳曰、常勅妻子若卒遇飛禍無殯斂、
一穀不升曰歉、二穀不升曰饑、三穀不升曰饉、四穀不升曰荒、五穀不升曰大侵、韓詩外傳

一屠 多所誅殺曰屠、漢書註

一旌旗 析羽為旌、熊虎為旗、
一輜重 輜車名、積名曰輜則也、謂軍糧・什物雜廁載之、以其累重故稱輜重、

一豪傑 淮南子曰、智過百人謂之、豪白虎通曰、賢万人曰傑、
一節 節所以為信也、以竹為之、柄長八尺、旄牛尾為、其毳三重、
光武紀曰、時節度河、

一檄 以木簡為書、長尺二寸謂之檄、以徵召也、文說、若有急、即揮

以鷄羽、謂之羽檄、魏武奏事

一旅生 旅寄也、不因幡種而生、故曰旅、光武紀曰、野穀旅生、後漢書註

一京師 京者何大也、師者何衆也、天子之居必有衆大之辭言之、公羊傳

一涉獵 如涉水、如獵獸、言不能周悉粗窺覽之也、

一鎮鄒 干將吳人也、造二劍、一曰干將、二曰莫邪、莫邪者莫干將之妻名也、吳越春秋

一懷老牛舐犢之愛、後漢書彭諡

一王莽連率韓博上言有奇士、長一丈大十圍、自謂巨無霸、出於蓬萊東南五城西北昭如海濱、軺車不能載、三馬不能勝、臥則枕鼓以鉄箸食、前漢書 光武時長人巨無霸、驅諸猛獸虎豹犀象之屬以助威武、

自秦漢出師之盛、未嘗有亡、後漢書

一立嫡以長不以賢、立子以貴不以長、桓公何以貴母貴也、母貴則子何以貴、子以母貴母以子貴、公羊傳

一後漢光武建文二十年秋、東夷韓国人率衆請樂浪內付、後漢書、註、東夷有展韓・下韓・馬韓、謂之三韓國也、(張力)

一光武帝中元二年、東夷倭奴国王遣使奉獻、後漢書、註、倭在帶方東南大海中、依山島為國、按本朝人王十一代倭仁帝八十六年丁巳年也

一人年十五至五十六出賦錢人百二十為一算、又七歲至十四歲出口錢人二十以供天子、至武帝時又口加三錢以補車騎馬、漢書註

一令甲女子犯徒遣婦家、每月出錢雇人於山伐木、名曰雇山、前漢書音義

一古不墓祭、秦始皇起寢於墓側、漢因而不改諸陵寢皆以晦望・二十四氣・三伏・社臘及四時、上飯其親陵所、宮人隨鼓漏理被枕具盥水束莊具、天子以正月上原陵、公卿・百官及諸侯王・郡國計吏皆當軒下、占其郡國穀餼・四方改易、欲先帝魂魄聞之也、漢官儀

一祝哽祝噎 後漢書明帝紀、祝哽在前祝噎在後、註、老人食多哽

咽、故置人於前後祝之、令其不哽噎也、

一漢律、三人以上無故群飲、罰金四兩、前漢音義

一周饒國在三首國東、為人短小冠帶、一名焦饒、山海經通俗、國語曰、焦饒

氏三尺短之至也、

一閼閼 明其等曰閼、積其功曰閼、史記

一鬼薪・白粲 男子為鬼取薪以給宗廟、女子為白粲使扱米白粲々然、

一寺 寺官舍也、後漢和帝紀註、寺嗣也、理事之吏嗣統於其中、風俗

一獅子条枝大爵 後漢明帝永元十三年冬十一月、安息國遣使獻師子

及条枝大爵、和帝紀安息國去洛陽二万五千里、条枝國臨西海出師子・

大雀、西域傳大爵頸及身膺蹄、都似橐駝、拳頭高八九尺、張翅丈

余、食大麥、其卵如甕、即今之駝鳥也、

*東大本「条枝」を見せ消ち。

一後漢永初元年十月、倭國遣使奉獻、註、倭國去樂浪万二千里、男

子黥面文身、以其文左右大小、別尊卑之差、

一乘輿 和帝紀云、厖馬非乘輿常所御者、註、乘輿天子所乘車馬、輿

也、不敢斥言尊者、故稱乘輿、見蔡邕獨斷、

一命夫・命婦 命夫者其男子之為大夫也、命婦者其大夫之妻、喪服傳

一虎貴 其猛怒、如虎之奔赴、漢官儀

一羽林 漢武帝置建章宮騎、後更名羽林、以天有羽林之星故取名、

一婚姻 妻父曰婚、壻父曰姻、順帝紀註

一甲乙科 甲科謂作簡策難問、列置案上、在試者意投射取而答之、

謂之射策、上者為甲、次者為乙、若錄政化得失、顯而問之、謂之

對策也、前漢書音義【頭書】「射策／對策」

一子奇年十八、齊君使之化阿、至阿鑄其庫兵以為耕器、出倉廩以賑

貧窮、阿果大化、新序

一師子封牛 師子似虎正黃、有顚髻・尾端茸毛、大如牛、封牛其領

上肉隆起若封、然今之峯牛、順帝紀云、陽嘉二年疏勒國獻師子・

封牛、

一日食修德、月食修刑、公羊傳

一舅姑 婦人謂夫之父曰舅、夫之母曰姑、在則曰君舅・君姑、沒則

曰先舅・先姑也、

一後漢靈帝建寧三年正月、河內人婦食夫、河南人夫食婦、

一靈帝光和元年四月、侍中寺雌鷄化為雄、

一靈帝中平元年、洛陽女子生兒兩頭共身、

一中平二年、洛陽民生兒、兩頭四臂、

一中平四年、洛陽民生男、兩頭共身、

一後漢獻帝建安四年、武陵女子死十四日復活、獻帝紀女子李娥年六十余

死瘞於域中、有行人聞家中有聲、告家人出之、統漢志

一建安七年、越嶲男子化為女子、獻帝紀

一白波 後漢靈帝中平五年、黃巾余賊郭大等起於西河白波谷、

一皇后・夫人 漢興因秦之稱號、正嫡稱皇后、妾皆稱夫人、又有美

人・良人・八子・七子・長使・少使之号、前漢書、婕妤一、姪娥二、

容華三、充衣四、已上武帝置、昭儀五、元帝置、美人六、良人

七、七子八、八子九、長使十、少使十一、五官十二、順常十三、

舞涓共和・娛靈・保林・良娣・使夜者十四、此六宮品秩同為一等

也、後漢書皇后紀註【頭書】「女官」

一漢法常因八月算人、遣中大夫与掖庭丞及相工於洛陽鄉中閱視良家

童女年十三以上二十以下姿色端麗合法相者、載還後宮、扱視可

否、乃用登御、所以明慎聘納詳求淑哲、後漢書皇后紀

一飛書 作飛書、以陷梁竦、上同註飛書若今匿名書、

一 儼 礼記月令有大儼、旁磔土牛以送寒氣、鄭玄注云、儼陰氣也、此月之中日歷虛危、有墳墓四星之氣、為厲鬼隨彊陰、出以害人故儼却之也、

一 君 夫人封君儀、比公主、統漢志

一 暴室 在掖庭內、丞一人主宮中婦人疾病者、其皇后・貴人有罪亦就此室也、漢官儀

一 白衣会 有凶事素服而朝、謂之白衣会、

一 後漢鄧陟曰、常聞、活千人者子孫有封、兄訓為謁者使修石臼河、歲活數千人、天道可信、家必蒙福、按君女後為和帝后

一 後漢桓帝多內幸、博採宮女至五六千人、及驅役・從使復兼倍於此、皇后記

一 光晃以為開關至獲麟二百七十五萬九千八百八十六歲、獲麟至漢百六十二歲、元命苞乾鑿度皆以為開關至獲麟二百七十六萬歲、後漢書律歷志

一天之動也、一昼一夜而運過周、星從天而西、日違天而東、

一 四千五百六十歲為一元、韓子

一 奉行 每月朔旦太史上其月曆、有司侍郎尚書見誦其令、奉行其政、後漢書禮儀志

一 三老五更 選三公老者為三老、卿大夫中之老者為五更、漢禮志後漢礼儀志云養三老五更之儀、先吉日司徒上太佖若講師、故三公人名、用其德行年耆高者一人為老、次一人為更也、

一 帝陵丈尺頃步 後漢光武原陵、山方三百二十三步、高六丈六尺、垣四出司馬門、寢殿・鐘虛皆在周垣內、提封田十二頃五十七畝八十五步、明帝顯節陵、山方三百步、高八丈、無周垣、為行馬四出・司馬門・石殿、鐘虛在行馬內、寢殿・園省在東、園寺吏舍在殿北、提封田七十四頃五畝、章帝敬陵、山方三百步、高六丈二

尺、余同上故略提封田二十五頃五十五步、和帝慎陵、山方三百八

十步、高十丈、提封田三十一頃二十畝二百步、殤帝康陵、山周二百八十步高五丈五尺、提封田十三頃十九畝二百五十步、安帝

恭陵、山周二百六十步高十五丈、提封田一千四頃五十六畝、順

帝憲陵、山方三百步、高八丈四尺、提封田十八頃十九畝二十步、

冲帝懷陵、山方百八十三步、高四丈六尺、提封田五頃八十畝、

質帝靜陵、山方百三十六步、高五丈五尺、提封田十二頃五十四畝

古今、桓帝宣陵、山方三百步、高十二丈、靈帝文陵、山方三百

步、高十二丈、獻帝禪陵、不起墳、深五丈、前堂方一丈八尺、

後堂方一丈五尺角六尺、帝王世紀

一 秦山從山下至頭、四十八里二百步、山海經註

一 社稷 社者土地之主也、稷者五穀之長也、孝經援神契稷秋夏熟、歷四

時備陰陽、穀之貴者、月令天子太社封諸侯者取其土、苞以白茅授

之、以立社其國、故謂之受茅土斷

一 五祀 門・戶・井・竈・中雷也、後漢書韋昭曰、古者穴居、故名室

中為中雷、

一 星常明者百二十四、可名者三百二十、為星二千五百而海人之占未

存焉、微星之數蓋萬一千五百二十、後漢書衡憲

一 彗星 彗五彗也、蒼則王侯破天子苦兵、赤則賊起強國恣、黃則女

色害權奪於后妣、白則將軍逆一年兵大作、黑則水精賦江河決賊

処々起也、宋鈞鈞命決註

一 余騎 後漢書天文志、永元十二年、遼東鮮卑二千余騎寇右北平、

一 上巳水宴 三月上巳、官民皆絜於東流水上、曰洗濯祓除、去宿垢

疾為大絜、絜者言陽氣布暢万物訖出始絜之矣、後漢礼儀志

一 明堂 周人明堂度九尺之筵、東西九筵、南北七筵、堂崇一筵、五

室、凡室二筵、周礼考、工記鄭玄曰、周堂高九尺、殷三尺、則夏一尺、

晏子春秋曰、明王之制下之溫濕不能及、上之寒暑不能入也、木工不鏤、示民知節也、呂氏春秋曰、周明堂茅茨、蒿柱土階三等、以見儉節也、

一冬作土功發地藏、則夏多暴雨、秋雨霖不止、管子

一明王有四禁、春無殺伐、無割大陵伐大木斬大山行大火誅大臣收穀賦錢、夏無遏達名川塞大谷動土功射鳥獸、秋無赦過積在緩刑、冬無爵賞祿傷伐五藏、故春政不禁則五穀不成、夏政不禁則草木不榮、秋政不禁則姦邪不勝、冬政不禁則地氣不藏、四者俱犯則陰陽不知、和風雨不時、上同

一服妖 延熹中京都長者皆著木屐、婦女始嫁至作漆画五采為系、此服妖也、至九年党事始發、後漢五行志

一靈帝光和元年、南宮侍中寺雌鷄欲化雄、一身毛皆似雄、但頭冠尚未變、同上

一宣帝黃龍元年、未央宮雌鷄化為雄、不鳴無距、同上

一靈帝熹平三年、右校別作中有兩樗樹、皆高四尺所、其一株宿夕暴長、長丈余大一围、作胡人狀、頭目鬚鬚備具、京房易伝曰、王德衰下人將起、則有木生人狀、同上

一熹平五年十月壬午、御所居殿後槐樹、皆六七围、自拔倒豎根在上、同上

一桓帝建和三年秋九月、北地廉羊肉、似羊肋、同上

一安帝永初六年、河東池水變色、皆赤如血、

一永初元年六月丁巳、河東楊地陷、東西百四十步、南北百二十步、深三丈五尺、

一靈帝光和元年、司徒長史馮巡馬生人、

一靈帝建寧三年春、河內婦食夫、河南夫食婦、

一靈帝時、江夏黃氏之母浴而化為黿入于深淵、其後時出見初浴簪一、銀釵及兒猶在其首、

一初平中、長沙有人姓桓氏、死棺斂、月余其聞棺中聲、發之遂生、

一建安四年二月、武陵充縣女子李娥六十余物故、以其家杉木榱斂瘞城外數里上、已十四日有行、聞其塚中有聲、便語其家、家往視聞聲、便發出遂活、

一七年、越甯有男化為女子、備力、以上其後漢五行志

一禹時、九州之地凡二千四百三十万八千二十四頃、定墾者九百二十万八千二十四頃、不墾者千五百万二千頃、民口千三百三十三万三千九百二十五人、帝王世紀下同

【頭書】禹至于塗山之會諸侯、承唐虞之成執玉帛、亦有万国

一孔甲之至桀行暴諸侯相兼、逮湯受命其能存者三千余国、

一至周剋商、制五等之封、凡千七百七十三国、民口千三百七十一万四千九百二十三人、周莊王十三年、千八百八十四万七千人、春秋時尚有千二百国、

一漢平帝時元始二年郡国百三、県邑千四百八十七、地東西九千三百二里、南北万三千三百六十八里、戸千三百二十三万三千六百一十二、口五千九百一十九万四千九百七十八人、漢極盛也、

【頭書】漢成帝戸一千二百一十三万三千六十、口五千九百五十九万四千九百七十八

一光武時民戸四百二十七万六千六百三十四、口二千一百万七千八百二十人、

一桓帝永寿二年、戸千六百七万九百六、口五千六万六千八百五十六人、

一魏文帝景元四年、与蜀通計民戸九十四万三千四百二十三、口五

百三十七万二千八百九十一人、正始五年吳之所領兵戸九十三万二千、推其民數、不能多蜀矣、

一河南尹 二十一城、戸二十万八千四百八十六、口百一万八百二十七、以下司隸校尉ノ部、【頭書】「右ノ成周雒陽、建武十五年改曰效之^{河南}」

一河内郡 十八城、戸十五万九千七百七十、口八十万一千五百五十八、【頭書】「雒陽北百二十里、以下言里數自雒陽也、效之」

一河東郡 二十城、戸九万三千五百四十三、口五十七万八百三十三、【頭書】「西北五百里」

一弘農郡 九城、戸四万六千八百一十五、口十九万九千一百一十三、【頭書】「西南四百五十里」

一京兆尹 十城、戸五万三千二百九十九、口二十八万五千五百七十五、【頭書】「西九百五十里長安也、高帝所都」

一左馮翊 十三城、戸三万七千九十、口十四万五千一百九十五、【頭書】「西六百口^{八上}八里」

一右扶風 十五城、戸万七千三百五十二、口九万三千九十一、

一潁川郡 十七城、戸二十六万三千四百四十、口百四十三万六千五百一十三、以下予州刺史ノ部、【頭書】「東南五百里」

一汝南郡 三十七城、戸四十万四千四百四十八、口二百一十万七百八十八、

一梁国 九城、戸八万三千三百、口四十三万一千二百八十三、【頭書】「東南八百五十里」

一沛国 二十一城、戸二十万四千九十五、口二十五万一千三百九十三、【頭書】「東南千二百里」

一陳国 九城、戸十一万二千六百五十三、口百五十四万七千五百七

十二【頭書】「東南七百里」

一魯国 六城、戸七万八千四百四十七、口四十一万一千五百九十、

一魏郡 十五城、戸十二万九千三百一十、口六十九万五千六百六十六、以下冀州、刺史部、【頭書】「東北七百里」

一鉅鹿郡 十五城、戸十万九千五百一十七、口六十万二千九十六、【頭書】「北千百里」

一常山国 十三城、戸九万七千五百、口六十三万一千一百八十四、

一中山国 十三城、戸九万七千四百一十二、口六十五万八千一百九十五、【頭書】「北千四百里」

一安平国 十三城、戸九万一千四百四十、口六十五万五千一百一十八、【頭書】「北二千里」

一河間国 十一城、戸九万三千七百五十四、口六十三万四千四百二十一、【頭書】「北二千五百里」

一清河国 七城、戸十二万三千九百六十四、口七十六万四千一百一十八、【頭書】「全千二百八十里」

一趙国 五城、戸三万二千七百一十九、口一十八万八千三百八十一、【頭書】「全千百里」

一渤海郡 八城、戸十三万二千三百八十九、口百一十^(△△)万六千五百、【頭書】「全千六百里」

一陳留郡 十七城、戸十七万七千五百二十九、口八十六万九千四百三十三、以下交州刺史部、【頭書】「東五百三十里」

一東郡 十五城、戸十三万六千八十八、口六十万三千三百九十三、【頭書】「八百余里」

一東平国 七城、戸七万九千一十二、口四十四万八千二百七十、【頭書】「東六百七十里」

一任城国 三城、戸三万六千四百四十二、口十九万四千一百一百五〔五〕

十六、【頭書】「全千百里」

一泰山郡 十二城、戸八千九百二十九、口四十三万七千三百一十

一、【頭書】「全千四百里」

一济北国 五城、戸四万五千六百八十九、口二十三万五千八百九十

七、【頭書】「東千五百〇十里」〔五〕

一山陽郡 十城、戸十万九千八百九十八、口六十万六千九十一、

【頭書】「事」東八百十里

一济陰郡 十一城、戸十三万三千七百一十五、口六十五万七千五百

五十五、【頭書】「全八百里」

一東海郡 十三城、戸十四万八千七百八十四、口七十万六千四百一

十六以下徐州刺史部、【頭書】「東千五百里」

一琅邪国 十三城、戸二万八千四百、口五十七万九百六十七、【頭書】

「東千五百里」

一彭城国 八城、戸八万六千一百七十、口四十九万三千二十七、

【頭書】「東千二百廿里」

一広陵国 十一城、戸八万三千九百七、口四十一万九百九十、【頭書】

「東千六百四十里」

一下邳国 十七城、戸十三万六千三百八十九、口六十一万一千八十

三、【頭書】「東千四百里」

一濟南国 十城、戸七万八千五百四十四、口四十五万三千三百八以下青州刺史部

【頭書】「東千八百里」

一平原郡 九城、戸十五万五千五百八十八、口百万二千六百五十

八、【頭書】「北千三百廿里」

一樂安国 九城、戸七万四千四百、口四十二万四千七十五、【頭書】

「東千五百里」

一北海国 十八城、戸十五万八千六百四十一、口八十五万三千六百

四

一東萊郡 十三城、戸十万四千二百九十七、口四十八万三百九十

三、【頭書】「東千二百廿八里」

一齊国 六城、戸六万四千四百一十五、口四十九万一千七百六十

五、【頭書】「東千八百里」

一南陽郡 三十七城、戸五十二万八千五百五十一、口二百四十三万

九千六百一十八以下荊州刺史部、【頭書】「南七百里」

一南郡 十七城、戸十六万二千五百七十、口七十四万七千六百四、

【頭書】「南千〇〇里」〔五百〕

一江夏郡 十四城、戸五万八千四百三十四、口二十六万五千四百六

十四、【頭書】「南千五百里」

一零陽郡 十三城、戸二万二千二百八十四、口百万一千五百七

十八、【頭書】「南三千三百里」

一桂陽郡 十一城、戸十三万五千二十九、口五十万一千四百三、

【頭書】「南三千九百里」

一武陵郡 十二城、戸四万六千六百七十二、口二十五万九百一十

二、【頭書】「南二千百里」

一長沙郡 十三城、戸二十五万五千八百五十四、口百五万九千三百

七十二、【頭書】「南三千八百里」

一九江郡 十四城、戸八万九千四百三十六、口四十三万二千四百二

十六、以下揚州刺史部、【頭書】「東千五百里」

一丹陽郡 十六城、戸十三万六千五百一十八、口六十三万五百四十

五万、【頭書】「東二千六十里」

一廬江郡 十四城、戸十万一千三百九十二、口四十二万四千六百八十三、【頭書】「東千七百里」

一会稽郡 十四城、戸十二万三千九十、口四十八万一千一百九十六、【頭書】「東三千八百里」

一吳郡 十三城、戸十六万四千一百六十四、口七十万七百八十二、【頭書】「全三千二百里」

一予章郡 二十一城、戸四十万六千四百九十六、口百六十六万八千九百六、【頭書】「南二千七百里」

一漢中郡 九城、戸五万七千三百四十四、口二十六万七千四百二、以下益州刺史部、【頭書】「西千九百九十里」

一巴郡 十四城、戸三十一万六千九百九十一、口百八万六千四十九、【頭書】「全三千七百里」

一広漢郡 十一城、戸十三万九千八百六十五、口五十万九千四百三十八、【頭書】「西三千里」

一蜀郡 十一城、戸三十万四百五十二、口百三十五万四百七十六、【頭書】「西三千百里」

一犍為郡 九城、戸十三万七千七百一十三、口四十一万一千三百七十八、【頭書】「西三千二百七十里」

一牂牁郡 十六城、戸三万一千五百二十三、口二十六万七千二百五十三、【頭書】「西五千〇〇里」

一越嶲郡 十四城、戸十三万一百二十、口六十二万三千四百一十八、【頭書】「西四千八百里」

一益州郡 十七城、戸二万九千三十六、口十一万八百二、【頭書】「西五千六百里」

一永昌郡 八城、戸二十三万一千八百九十七、口百八十九万七千三

百四十四、【頭書】「西七千二百六十里」

一広漢属国都尉 戸三万七千一百一十、口二十万五千六百五十二、一蜀郡属国 戸十一万一千五百六十八、口四十七万五千六百二十九、

一犍為属国 戸七千九百三十八、口三万七千一百八十七、一隴西郡 十一城、戸五千六百二十八、口二万九千六百三十七、以下凉州刺史部、【頭書】「西二千二百二十里」

一漢陽郡 十三城、戸二万七千四百二十三、口十三万一百三十八、【頭書】「西二千里」

一武都郡 七城、戸二万一百二、口八万一千七百二十八、【頭書】「西千九百六十里」

一金城郡 十城、戸三千八百五十八、口万八千九百四十七、【頭書】「西千八百里」

一安定郡 八城、戸六千九百十四、口二万九千六十、【頭書】「西千七百里」

一北地郡 六城、戸三千一百二十二、口万八千六百三十七、【頭書】「西千〇里」

一武威郡 十四城、戸万四十三、口三万四千二百二十六、故匈奴地、【頭書】「西三千五百里」

一張掖郡 八城、戸六千五百五十二、口二万六千四十、故匈奴地、【頭書】「西四千二百里」

一酒泉郡 九城、戸万二千七百六、【頭書】「西四千七百里」

一敦煌郡 六城、戸七百四十八、口二万九千一百七十、【頭書】「西五千里」

一張掖属国 戸四千六百五十六、口万六千九百五十二、一張掖居延属国 戸一千五百六十、口四千七百三十三、

一上党郡 十三城、戸二万六千二百二十二、口十二万七千四百三、

以下并州刺史部【頭書】「北千五百里」

一太原郡 十六城、戸三万九百二、口二十万一百二十四、

一上郡 十城、戸五千一百六十九、口二万八千五百九十九、

一西河郡 十三城、戸五〇六百九十八、口二万八千三百三十八、

【頭書】「北千二百里」

一五原郡 十城、戸四千六百六十七、口二万二千九百五十七、

一雲中郡 十一城、戸五千三百五十一、口二万六千四百三十、

一定襄郡 五城、戸三千一百五十三、口万三千五百七十一、

一鴈門郡 十四城、戸三万一千八百六十二、口二十四万九千、

【頭書】「北千五百里」

一朔方郡 六城、戸千九百八十七、口七千八百四十三、

一涿郡 七城、戸十万二千二百一十八、口六十三万三千七百五十

四、以下幽州刺史部【頭書】「北千八百里」

一広陽郡 五城、戸四万四千五百五十、口二十八万六千、

一代郡 十一城、戸二万一百二十三、口十二万六千一百八十八、

【頭書】「東北二千五百里」

一上谷郡 八城、戸万三百五十二、口五万一千二百四、

【頭書】「全三千二百里」

一漁陽郡 九城、戸六万八千四百五十六、口四十三万五千七百四

十、【頭書】「全二千里」

一右北平郡 四城、戸九千一百七十、口五万三千四百七十五、

【頭書】「全三千三百里」

一遼西郡 五城、戸万四千一百五十、口八万一千七百一十四、

【頭書】「東北三千三百里」

一遼東郡 十一城、戸六万四千一百五十八、口八万一千七百一十

四、【頭書】「全二千六百里」

一玄菟郡 六城、戸一千五百九十四、口四万三千一百六十三、

【頭書】「全四千里」

一樂浪郡 十八城、戸六万一千四百九十二、口二十五万七千五十、

【頭書】「全五千里」

一遼東属国

一南海郡 七城、戸七万一千四百七十七、口二十五万二千八十二、

以下交州刺史部【頭書】「南七千百里」

一蒼梧郡 十一城、戸十一万一千三百九十五、口四十六万六千九百

七十五、【頭書】「南六千四百十里」

一鬱林郡 十一城、【頭書】「南六千五百里」

一合浦郡 五城、戸二万三千一百二十一、口八万六千六百一十七、

【頭書】「南九千二百九十一里」

一交趾郡 十二城、【頭書】「南万千里」

一九真郡 五城、戸四万六千五百一十三、口二十万九千八百九十

四、【頭書】「南万五千五百八十里」

一日南郡 五城、戸万八千二百六十三、口十万万六千七百七十六、

【頭書】「南万三千四百里」

右後漢書郡国志通計、郡国百五、城千六百六十七、戸九百六万四

百三十四、口四千六百、

東大本【別紙挿入記事】「四十六万九千四百七十三人

四千六百八十八万二千二百八十七人」

一後漢孝順帝時、郡国百五、県邑道候国千八百八十、民戸九百六十九

万八千六百三十、口四十九万九千五百二十、郡国志

一南陽郡酈侯国菊水 荊州記曰、県北八里有菊水、其源旁悉芳、

菊水極甘馨、又中有三十家、不復穿井即飲此水、上寿百二十・三十、中寿百余、七十猶以為夭、此菊莖短葩大、食之甘美、

一酒泉郡延寿、景南有山、石出泉水、大如筍簾、注地為溝、其水有肥如煮肉泊、^(註)承々永々不凝膏、然之極明、不可食、景人謂之石漆、^{博物記}

一蜀郡臨邛、有火井、深二三丈、在景南百里、以竹木投取火、後人以火燭投井中、火即滅絕^{博物記}、蜀郡賦註曰、火井欲出其火、先以家火投之、須與許隆々如雷聲、爛然通天光耀十里、以竹筒盛之、接其光而無炭也、取井火還煮井水、一斛水得四五斗塩、家火煮之不過二三斗塩耳、

一鐘離意相魯、見仲尼廟頽毀、會諸生於廟中慨然歎曰、蔽芾甘棠勿剪、勿伐、況見聖人廟乎、遂躬留治之、周觀輿服之在焉、自仲尼以來莫之開也、意發視之、得古文策書曰、乱吾書、董仲舒治吾堂、鐘離意壁有七、張伯盜一、尋案未了而卒張伯者治中庭治地、得六壁上之、意曰、此有七何以不遂、伯懼探壁懷中、魯咸以為神、^{漢晉春秋}【頭書】(一乱)意別伝作修

一孔子墓在魯城門北便之外泗水上、去城一里、葬地、蓋一頃墓墳南北十步、東西十二步、高一丈二尺、墓前有甔甔、為祠壇、方四尺、与地平、塋中異木以百数、魯人莫能識也^{後漢郡国志註}、皇覽曰、孔子本無祠堂、塋中不生荆棘及刺人艸、

一均輸 郡国諸侯各以其物貢輸、往来煩雜物多苦惡、或不償其費、故部置輸官以相給運而便遠方之貢、故曰均輸、^{塩鉄論}

一郡国 皇子封王、其郡為国、^{後漢百官志}

一太子洗馬 十六人、職如謁者、太子出、則当直者在前導威儀、^{同上}

一刀劍 自天子至庶人咸帶劍、劍之与刀形制不同、名称各異、故蕭

何劍履上殿、不称为刀、^{後漢輿服志註 劉昭語}

一劍之在左青童之象也、刀之在右白虎之象也、^{春秋繁露}

一百官受奉例^{建武二十六年四月改}、大將軍三公奉月三百五十斛 中二千石奉月百八十斛 二千石奉月百二十斛 比二千石奉月百斛 千石奉月八十斛 六百石奉月七十斛 比六百石奉月五十斛 四百石奉月四十五斛 比四百石奉月四十斛 ^{*}「三百石奉月四十斛」 比三百石奉月三十七斛 二百石奉月二十七斛 一百石奉月十六斛 斗食奉月十一斛 佐史奉月八斛、^{後漢百官志} *『後漢書』により補う。

一漢延平中 中二千石奉錢九千・米七十二斛 真二千石月錢六千五百・米三十六斛 比二千石月錢々々五千・米三十四斛 一千石月錢四千・米三十斛 六百石月錢三千五百・米二十一斛 四百石月錢二千五百・米十五斛 三百石月錢二千・米十二斛 二百石月錢一千・米九斛 百石錢八百・米四斛八斗、^{荀綽晉百官表註}

一四科取士 一曰德行高妙志節清白、二曰學通行修經中博士、三曰明達法令足以決疑、能案章覆問文中御史、四曰剛毅多略遭事不惑、^(惑)明足以決、才任三輔令、皆有孝悌廉公之行、^{漢官儀}

一武王問太公、願聞治乱之要、太公曰、其本在吏、吏重罪有十、武王問吏之重罪、太公曰、一吏苛刻、二吏不平、三吏貪汚、四吏以威力迫脅於民、五吏与史合姦、六吏与人亡情、七吏作盜賊使人為耳目、八吏賤買貴賣於民、九吏增易於民、十吏振懼於民、^{陰符經}

一光武謂徐宣等曰、得無悔降乎、徐宣等叩頭曰、今日得降猶去虎口歸慈母、帝曰、卿所謂鉄中錚々、傭中佼佼者也、^{後漢劉盆子伝} 錚々言微有剛利也、言佼佼者凡傭之人稍為勝也、

*東大本【頭註】「佼ハ好兒也」

一傍人解構之言^{後漢陳寵伝}、註、解構猶間構也、

一神童失勢与蚯蚓同、同上

一騰蛇游霧、飛龍乘雲、雲罷霧除与蚯蚓同、失其所乘故也、慎子

一王莽地皇元年下書曰、方出軍行師有趨謹犯者斬無須時、於是春夏斬人都市、百姓震懼也、鄧晨謂光武曰、王莽悖暴盛夏斬人、此天亡之時也、後漢書

一骨鯁 後漢來歙傳註云、骨鯁喻正直也、說文曰、鯁魚骨也、食骨留咽中為鯁也、

一光武起時、鄧禹說曰、於今之計莫如延攬英雄務悅民心高祖之業救萬民之命、以而慮天下不足定也、光武大悅、後漢鄧禹傳

一大医皮巡從獵上林、還暮宿殿門下、寒疝病發時、鄧訓直事聞巡声、起往問之、巡曰、冀得火以熨背、訓求火不得乃以口噓其背、

東觀記

一男子八月生齒、女子七月生齒、大戴禮

一每所止舍諸將並坐論功、馮異常独屏樹下、軍中号曰、大樹將軍、後漢馮異傳

一吳漢病篤、車駕親臨問所欲言、对曰、臣愚無所知識、唯願陛下慎無赦而已、吳漢傳

一出 男子謂姊妹之子為出也、後漢耿純傳註

一驥驥負塩車垂頭於太行之坂、見伯樂則噴而長鳴、桓寬塩鉄論

〔一〕馬援曰、男兒要当死於辺野、以馬革裹屍還葬耳、何能臥床上在兒女子手中邪、

一龐共与魏太子質於邯鄲、共謂魏王曰、今一人言市有虎、王信乎、王曰、否、二人言信乎、王曰、否、三人言王信乎、曰寡人信、共曰、夫市無虎明矣、然三人言誠市有虎、今邯鄲去魏遠於市、謗臣者過三人、願王熟察之、韓子

一伝云、吳王好劍客、百姓多創瘢、楚王好細腰、宮中多餓死、長安語曰、城中好高髻、四方高一尺、城中好広眉、四方且半額、城中好大袖、四方全匹帛、後漢書樓宏

一物故 物無也、故事也、全前註、謂死也、

一後漢卓茂、字子康、南陽宛人也、孔光稱為長者、時嘗出行、有人認其馬、茂問曰、亡馬何時、对曰、月余日矣、茂有馬數年心知其謬嘿解与之、挽車去、顧曰、若非公馬幸至丞相府帰我、他日馬主別得亡者、乃詣府送馬叩頭謝之、茂性不好爭如此、後以儒術举為侍郎給事黃門、光武時為大傳、

一智囊 漢魯匡有權数、号曰知囊、後漢魯恭傳

一九章算術曰、粟五十糲率三十、一斛粟得六斗米為糲也、伏堪伝云、湛謂妻子曰、夫一穀不登、国君徹膳、今民皆飢奈何、独飽乃共食糲糲、

一後漢張步上書獻鰻魚、郭璞曰鰻似蛤、偏著石広志曰鰻、無鱗有殼、一面附石、細孔雜々、或七或九、本草云石決明、一名鰻魚、

一光武謂宋弘曰、諺曰貴易交富易妻、人情乎、弘曰、臣聞貧賤之交不可忘、糟糠之妻不下堂、宋弘伝

一馮勤八歳善計、註、計算術也、馮勤伝

一閎閎 史記曰、明其等曰閎、積功曰閎、

一投壺 礼記投壺経曰、壺頸修七寸、腹修五寸、口径二寸半、容斗五升、壺中実小豆焉、為其矢之躍而出也、矢以柘若棘、長二尺八寸、無去其皮、取其堅而重投之、勝者飲不勝者以為優劣也、

一黃鉞 鉞斧也、以黄金飾之、所以戮人、後漢馮勤伝

一善善及子孫、惡惡止其身、公羊伝

一張湛至朝堂遺失洩便 註、洩小便也、後漢張湛伝

一後漢趙溫、初為京兆郡丞、歎曰、大丈夫當雄飛、安能雌伏、遂棄官去、

一高祖時、令賈人不得衣糸乘車市井、子孫不得不得官為吏、(一)後漢補譚傳註

一天神獻玉女於仙、(二)曰、此是革囊盛血穢耳、四十二章經

一水排 後漢杜詩、造作水排、鑄為農器、用力少見功多、註、冶鑄者為排以吹炭、今激水以鼓之、

【頭書】「排囊古字通用」

一飛書 無根而至、若飛來也、即今匿名書也、後漢梁松傳註

一後漢梁竦曰、大丈夫居世、生當封侯、死當廟食、如其不然門居、

可以養志、詩書足以自娛、州郡職徒勞人耳、

一便坐 於便側之處、非正室也、後漢魯恭傳註

一下獄司寇謂(三)決罪曰論、言奏而論決、同上

一項背相望 謂前後相顧也、左雄傳

一倥傯 窮困也、張衡傳

一五諫 諷諫・順諫・闕諫・指諫・陷諫也、諷諫者知患禍之萌而諷告也、順諫出辭遜順不逆君心也、闕諫者視人君顏色而諫也、指諫者質指其事而諫也、陷諫者言國之害忘生為君也、大戴禮

一孝平時時、凡郡國一百三縣、邑一千三百一十四、道三十四、侯國二百四十一、地東西九千三百二里、南北一万三千三百六十八里、戶一千二百二十三萬三千六十二、口五千九百五十九萬四千九百七十八、此漢家極盛之時、

一皐囊 凡章表皆啓封、其言密事得皐囊(四)也、漢官儀

一長休百日 吏病滿百日當免也、漢書音義

一六尺之孤 六尺、謂十五以下、後漢李固傳註

一殺青 以火炙簡、令汗、取其青、易書、復不蠹、謂之殺青、亦謂

行簡、劉向別錄

一銅為物至精、不為燥濕寒暑變其節、不為風雨暴露改其形、介然有常、似於士君子之行、律歷志

一折骨 李固與梁冀書曰、昔昌邑之立昏亂日滋、霍光憂愧發憤悔之折骨、

一童飛 杜喬上書曰、陛下從藩臣童飛即位、

一後漢中平年中、遼東襄平鼎生大石丈余、下有二三小石為足、後漢襄平傳

一異端 仁齋曰、異端之稱、自古有之、後人專指仙老之教為異端者誤矣、徂徠曰、異端稽諸漢晉諸史、多謂人懷異心者、多岐之謂也、異端字不它見、獨見論語家語而家語註、猶多端也、

一吾我 楊升庵曰、吾我一也、古人互用之文、取其便誦說耳、無二義也、左傳云、我張吾三軍、莊子云、吾喪我、論語曰、我不欲人之加諸我也、吾亦欲無加諸人、徂徠曰、人我相對而下吾字不對人而言其所以變文可以見已、左傳、我張吾三軍而被吾甲兵、彼則懼我謀以協我及我為吾家我食吾言、莊子吾喪我及吾無糧我無食、皆有差別也、

一徂徠曰、夷齊扣馬諫武王事明、王氏弁其妄矣、

王直著夷齊十弁載皇明文衡

一六尺之孤 徂徠曰、周禮卿大夫職云、國中自七尺以及六十、野自六尺以及六十有五、皆征之、以其國中七尺為二十對六十野、云六尺對六十五、晚校五年明知六尺與七尺、早校五年故六尺為十五也、茂卿按、以七尺為中人之度、周一尺當今曲尺七寸二分、則七尺當五尺四分、六尺當四尺三寸二分也、

一與也 論語曰、君子子與君子人也、仲尼燕居曰、古之人與古之人也、朱註曰、與疑辭也、決辭設為問答所以深著其必然也、徂來

曰、是韓柳已後文法反復言之所以贊之、

一閹人 掌守王宮中門之禁、周札

一寺人 掌王宮之內及女宮之戒命、周札

一蔡倫、字敬中、後漢和帝時永元九年監作秘劍及諸器械、莫不精工堅密、

為後世法、自古書契多編以竹簡、其用縑帛者謂之為紙、縑貴而簡

重、並不便於人、倫乃造意、用樹膚麻頭及敝布魚網以為紙、元興

元年奏上之、帝善其能、自是莫不從用焉、故天下咸稱蔡侯紙、倫

初受竇后諷旨、誣陷安帝祖母宋貴人、及太后崩安帝始親萬機、勅

使自致廷尉、倫恥受辱、乃沐浴整衣冠飲藥而死、後漢書本傳

一寿冢 生而自為冢為寿冢、後漢侯覽傳註

一後漢靈帝詔諸儒正定五經刊於石碑、為古文篆隸三体書法、古文

謂孔子壁中書、篆書秦始皇使程邈所作也、隸書亦程邈所獻也、主

於徒隸從簡易也、

一物故 在路死也、魏臺訪問物故之義高堂陰、答曰、聞之先師、物

無也、故事也、言死者無復所能於事故也、後漢牟長傳註

一僂言 謂不与之言而傍對也、孔僂傳註

一鬼薪 取薪以給宗廟、二歲刑也、* 楊倫傳註

*『後漢書』〔三〕

一後漢趙曄著吳越春秋・詩細歷深淵、蔡邕誦詩細而嘆息、以為長於

論衡、趙曄傳

一許慎、字叔仲、少博學經籍、馬融常推敬之、時人為之語曰、五經

無双、初慎以五經傳說藏否不同、於是撰為五經異義、又作說文解

字十四篇、本傳

一劉珍、字秋孫、撰積名三十篇、以弁万物之称号、本傳

一貫魚 易曰、貫魚以宮人寵、謂王者之御宮人、如貫魚之有次叙不

偏愛也、礼后夫人已下進御之法云、凡天子進御之義、從后而下十

五日偏、自下始、以象月之初生漸進至盛、法陰道之義也、其法九

嬪已下皆九々而御則女御八十一人、為九夕也、世婦二十七人為三

夕、九嬪為一夕、夫人為一夕、凡十四夕、后当一夕、故曰十五日

一偏也、

一僧 後漢逢萌與徐房・李氏雲、王君公相友善、壞德穢行、房與子

雲養徒各千人、君公遭乱、独不去、僧牛自隱、萌傳註云、僧謂平

会兩家壳買之偏、

一後漢李固曰、軍行三十里為程、而去日南九千余里、三百日乃到計

人粟五升古升小斛、用米六十万斛、不計將吏駟馬之食、後漢書靈帝傳

一徐登、閩中人也、本女子、北為丈夫、本傳

一永寧元年南昌有夫人生四子、唐權傳

一後漢書東夷傳云、倭在韓東南大海中、依山島為居、凡百余国、自

武帝滅朝鮮、使馱當作馱通於漢者三十許、国々皆稱王、世々伝統、其

大倭王居邪馬台国今名邪馬台、樂浪郡徼去其国万二千里、去其西北界

抱邪韓國七千余里、其地大較在会稽東冶之東、与朱崖儋耳相近、

故其法俗多同、土宜禾稻・麻紵・蚕桑、知織績為縑布、出白珠・

青玉、其山有丹、土氣温腴、唐冬夏生菜茹、無牛馬虎豹羊鵲、其兵

有矛・楯・木弓・竹矢、或以骨為鏃、男子皆黥面文身、以其文左

右大小別尊卑之差、其男衣皆橫幅結束相連、女人被髮屈紒、衣如

单被貫頭而著之、並丹朱朱粉身、如中国之用粉也、有城柵・屋室、

父母異处、唯会同男女無別、飲食以手而用籩豆、俗皆徒跣、以蹲

踞為恭敬、人性嗜酒多寿考、至百余歲者甚衆、国多女子、大人皆

有四五妻、其余或兩或三、女人不淫不妒、又俗不盜竊、少爭訟、

犯法者没其妻子、重者滅其門族、其死停喪十余日、家人哭泣不進

酒食、而等類就歌舞為樂、灼骨以卜用決吉凶、行來度海令一人不
櫛沐不食肉不近婦人、名曰持衰、若在塗吉利則雇以財物、如病疾
遭害以為持衰不謹便共殺之、建武中元二年倭奴國奉貢朝賀、使人
自称大夫、倭國之極南界也、光武賜以印綬、安帝永初元年倭國王
師升等獻生口百六十人、願請見、桓靈間倭國大亂、更相攻伐、歷
年無主、有一女子、名曰卑弥呼、年長不嫁、事鬼神道、能以妖惑
衆、於是共立為王、侍婢千人、少有見者、唯有男子一人、給飲食
伝辭語、居処・宮室・樓觀、城柵皆持兵守衛、法俗嚴峻、自女王
國東度海千余里、至拘奴國、雖皆倭種而不屬女王、自女王國南四
千余里、至朱儒國、人長三四尺、自朱儒東南行船一年、至裸國・
黑齒國、使駟所伝極於此矣、

一 広陵吳普、從華佗学、普依準他療多所全濟、佗語普曰、人体欲得
勞動、但不當使極耳、動揺則穀氣得銷、血脈流通病不得生、譬如
戸枢終不朽也、是以古之仙者為導引之事、熊經鴟顧、引挽腰体、
動諸關節以求難老、吾有一術、名五禽之戲、一曰虎、二曰鹿、三
曰熊、四曰猿、五曰鳥、亦以除疾、兼利蹏足、以當導引、体有不
快、起作一禽之戲、怡而汗出、因以著粉、身体輕便而欲食普施行
之、年九十余、耳目聰明、齒牙完堅、後漢書華佗伝

一 彭城樊阿、從華佗求方可服食益於人者、佗授以漆葉青黏散、漆葉
屑一斗、青黏十四兩、以是為率、言久服去三虫、利五藏輕体、使
人頭不白、阿從其言、寿百余歲、漆葉処所而有、青黏生於豐沛彭
城及朝歌間、同前

一 別伝云、青黏者、一名地節、一名黄芝、主理五臟益精氣、本出於
迷入山者、見仙人服之以告佗、佗以為佳語阿、阿又秘之、近者人
見阿之寿而氣力強盛恠之、遂責所服食、因醉乱誤道之、法一施人

多服者、皆有大驗、

一 葷 徂徠曰、世多以五辛當之、非矣、五辛之名出于浮屠、爾後医
家・道家亦有之、亦倣浮屠者已、玉藻曰、膳於君有葷桃、茹於大
夫去茹於士去葷、鄭註曰、膳美食也、葷桃茹凶邪也、大夫用葷桃
士桃而已、葷薑及辛菜也、茹莢蒂也、論語微

一 在田曰稻、刈穫曰禾、去藁曰粟、去穀曰米、米而未舂曰糲、已舂
曰粱、皆一物也、而稻為糯、粟為秠、粱為粟中一種、皆後世医家
之說、上同

一 烏桓俗、斂屍以棺、有哭泣之哀、至葬則歌舞相送、肥養一犬、以
彩繩纓牽、並取死者所乘馬衣物、皆燒而送之、言以属累犬使護死
者、神靈歸赤山、赤山在遼東西北數十里、如中国人死者魂神歸岱
山也、

一 泰山天帝孫也、主召人魂、博物志

一 光和元年冬、鮮卑寇酒泉、種衆日多、丑畜射獵、不足給食、檀石
槐鮮卑王名乃自徇行、見烏集秦水、広從數百里、水停不流、其中有魚、
不能得之聞倭善網捕、於是東擊倭人國得千余家、徙置秦水上、令
捕魚以助糧食、後漢鮮卑伝

一 息女 前漢高帝紀云、呂公曰、臣有息女、願為箕帚妾、註師古
曰、息生也、言己所生之女、

一 元服 前漢昭帝紀曰、帝加元服、註如淳曰、謂初冠加上服也、師
古曰、非也、元首也、冠者首之所著故曰元服、

【頭書】「平帝紀云、帝崩有司議曰、帝年十有四歲、宜以礼斂加元服」

一 行在所 武帝紀曰、拳獨行之君子徵詣行在所、師古曰、天子或在
京師、或出巡狩、不可予定、故言行在所耳、

一 磔 弃市 景帝紀曰、改磔曰弃市、勿復磔、応劭曰、先此諸死刑

皆磔於市、今改曰弃市、自非妖逆不復磔也、師古曰、磔謂張其尸也、弃市殺之於市也、取刑人於市、与衆棄之也、

一須髯髭 師古曰、在頤曰須、在頰曰髭、說文曰、髭口上鬚也、

一券 高祖紀曰、高祖從王嫚・武負貰〔酒〕、時飲醉臥、武負・王

嫚見其上常有怪、高祖每酤、留飲酒、讎数倍、及見怪此、兩家常

折券棄負、師古曰、以簡牘為契券、既不徵索故折毀之棄其所負、

一使酒 季布伝云、使酒難近、註師古曰、因酒霑洽而使氣也、

通昭錄卷之七十一・七十二

一後漢李忠、字仲都、東萊黃人也、更始立^寸与任光同奉二世祖、以為右大將軍、進圍鉅鹿、未^レ下、王即遣^レ將攻信都、信都大姓馬寵等開^レ城內^レ之、收^二太守宗広及忠母妻^一而令^三親屬招^二呼忠^一、時寵弟從^レ忠為^二校尉^一、忠即時召見責數以^三背恩反^二城、因格^二殺之^一、諸皆驚曰、家屬在^二人^一手中^レ殺^二其弟^一何^レ猛也、忠曰、若縱^レ賊不^レ誅、則^二心也^一、世祖聞而美之、会^四更始遣^二將攻破^二信都^一、忠家屬得^レ全、本伝

一馬援曰、牧^ス、至^レ有^二牛馬羊數千頭^一、穀類万斛、既而嘆曰、凡殖^二貨財產^一遣^二其能施賑^一也、否則守^レ錢虜耳、乃尽散以班^二昆弟^一、故旧^一、身衣^二羊裘^一・皮綺^一、

一馬援曰、男兒要^ス当^二死^一於^二辺野^一以^二馬革^一□^二屍^一□^二葬^一耳、何能臥^二床上^一在^二兒女子^一手中^一耶、

一後漢魏霸、字喬卿、為鉅鹿太守以^二簡朴寬恕^一為政、掾史有過要先誨其失、不改者乃罷之、吏或相毀、訴^レ霸稱^二它^一吏之長^一、終不及人短、言者懷^レ慙譖訟遂息、

一劉寬、字文饒、行^二有^二人失^一牛者^一、乃就寬^二車中認^レ之、寬無^レ所^レ言^レ下^レ駕步^レ歸、有^レ頃認者得牛而送^レ還^ス、叩^レ頭謝曰、慙負^二長者^一隨^二所^一刑罪^一、寬曰、物有^二相類^一、事容^二脱誤^一、幸^二勞^二見^レ歸、何為謝^レ之、州里服^レ其不^レ校、

一卓茂、字子康、出行有人認^二其馬^一、茂問曰、子亡馬幾時、對曰、月余日矣、茂有^レ馬類年心知^二其謬^一、嘿^レ解^レ与^レ之、挽^レ車去^レ、顧曰若非^二公馬^一幸至^二丞相府^一歸^レ我^一、他日馬主別得^二亡者^一、乃詣府送^レ馬叩頭謝^レ之、茂性不^レ好^レ爭如^レ此、

一趙憲、字伯陽、從^レ兄為^レ人所殺、無^レ子、憲年十五、常思^レ報^レ之、乃挾^レ兵結^レ客後遂往復^レ仇、而仇家皆疾病無^二相距者^一、憲以

ク因^レ疾報^レ殺非^二仁者心^一、且積^レ之而去^レ、顧^レ謂^レ仇曰、爾曹若健^レ、遠相避^レ也、仇皆臥^テ自搏^{頭也}、後病愈悉自縛詣^レ憲、憲不^二与^レ相見^一、後意^二殺^レ之^一、本以上伝

一杜林、字伯山、与^二馬援^一同^二鄉里^一素相親厚、援從^二南方^一還^レ、時^二林馬適死^一、援令^二下^レ子持^二馬壹匹^一遣^レ林曰、朋友有^二車馬之饋^一、可^レ且^ク以備^レ乏、林受^レ之居數月、林遣^二子奉^レ書曰、將軍內施^二九族^一外有賓客望^レ恩者多、林父子兩人□□^二鄉祿^一常有^レ盈、今送^二錢五万^一、援受^レ之、謂^レ子曰、人当^二以此為^レ法、是杜伯山所以勝^レ我也、東觀記

一馮衍曰、記^二有^一之、人有^二桃其鄰人之妻^一〔者〕、桃其長者^一置^レ之、挑^二其少者^一、少者報^レ之、後其夫死而取其長者^一、或謂^レ之曰、夫非^二罵爾者^一邪、曰在人欲^二其報^一我、在^レ我欲^二其罵人^一也、後漢書本伝

一後漢長沙孝子古初遭父喪^一未葬、隣人失^レ火、初匍匐柩上以身扞^レ火、火為^レ之滅、郭傳

一趙憲、字伯陽、少有節操、從^レ兄為^レ人所殺、無^レ子、憲年十五、常思報^レ之、乃挾^レ兵結^レ客、後遂往復^レ仇、而仇家皆疾病無^二相路者^一、喜^レ以^レ因^レ疾報^レ殺非^二仁者心^一、且積^レ之而去^レ、顧^レ謂^レ仇曰、爾曹若健^レ、遠相避^レ也、仇皆臥^テ自搏^{頭也}、後病愈悉自縛詣^レ憲、憲不^二与^レ相見^一、後竟殺^レ之○更始敗憲為^二赤眉兵^一所圍、迫急乃踰^レ屋亡走、与^二下所^一友善^二韓仲伯等數十人^一攜^二小弱^一、越山阻^レ徑出武關^一、仲伯以婦色美^レ慮^二有^二疆暴者^一而己受^二其害^一上、欲^レ棄^二之於道^一、憲責^レ恕不^レ聽、因以^レ泥塗^二仲伯婦面^一、載以鹿車^一、身自推、每道逢^レ賊或欲逼略^一、憲輒言^二其病狀^一以^レ此得免、後拜太尉、賜爵關内侯、薨年八拾四、諡曰正侯、後漢書本伝

一堯舜堂高三尺、土階二等、弟茨不剪、宋掾不斲、飲^二土簋^一・土

銅^一、糲梁之飯、藜藿之羹、夏日葛衣、冬日鹿裘、是約^レ己也、墨子

一漢班固曰、京師諸儒多能說^レ礼、宜^二招集共議得失^一、帝曰、

諺言作^二舍^一道^レ辺^一三年、不成会^二礼之家^一名為^二聚訟^一、相爭不互生^二

疑異^一筆不得下、後漢書

一鄭玄、字康成、事馬融^一、門徒四百余人、升^レ堂進者五十余生、

融素驕^レ貴也、玄在門下三年不得見、乃使高業弟子^中授^レ於玄、

会^下融集諸生考^中論^一緯^上、聞^二玄善^レ算^一、乃召見於樓上、玄因從

質^二諸疑義^一、問畢辭歸、融喟然謂門人曰、鄭生今玄、吾道東

矣、玄自遊學十余年、乃歸鄉里、家貧客^上耕東萊^一、學徒相從已

數百千人、及黨事起^一乃与同郡孫嵩等四拾余人俱被禁錮、遂隱修

經業^一、杜^出門不^レ口、本靈帝未黨禁解、大將軍何進聞而辟之、州郡

以進權威不敢違意、遂迫脅、玄不得已而詣之、進為設几杖礼待甚

優、玄不受朝服而以幅巾^一見、一宿逃去、時年六十、後將軍袁隗

表為^二侍中^一以父喪^二不行^一、○袁紹乃举^二玄茂才^一表為在中郎將皆不

就、○表紹与曹操相拒於官渡^二、令其子譚遣^レ使逼^レ玄隨軍、不得

已載^レ病到元城、疾篤不進、其年六月卒、年七十四、本傳

*1 異図本、誤つて一つ書きとする。今改める。

*2 東大本は頭書で「度」

一晏子布衣鹿裘以朝、公曰、夫子之家若此之貧也、奚衣之惡也、

晏子

一季文子相^レ魯、妾不衣帛、馬不食粟、左傳

一齊景公問晏子曰、理^レ国何患、对曰、患社鼠^一、公曰、何謂社鼠

一、对曰、社鼠不可熏、人君之左右亦国之社鼠也、

一宣帝時陰子方者至孝有仁恩、臘日晨^二炊^一、而竈神形見、子方再拜

受^レ慶、家有黄羊、因以祀之、自是已後暴至^二巨富^一、後漢陰識

一子張見魯哀公、七日哀公不礼、子張曰、君之好士有似葉公子高

之好竜也、葉公子高好画竜、天竜聞之降之、窺頭於牖、葉公子高

見之棄而反^テ走^ル、五色無主、是葉公子高好夫似竜而非好真竜也、

新序

一後漢蘇不韋、字公先、父謙、初為^二郡督郵^一、時^二魏郡李嵩為^二美

陽令^一、与^二中常侍具^一暖^一交通^ス、貧暴為^二民患^一、前後監司畏其勢

援^一、莫敢糾問^一、及^二謙至^一部案得^二其賊^一、論^二輸左校^一、謙累^二

迁^テ至^二金城太守^一、去郡歸^二鄉里^一、漢法免罷^レ守令自^レ非^二詔徵

一、不^レ得妄到^二京師^一、而謙後私至^二洛陽^一、時嵩為^二司隸校尉^一、

収^レ謙詰^レ掠^メ死^二獄中^一、嵩又因刑^二其屍^一以報^二昔怨^一、不韋時年

十八、徵^テ詣^二公車^一会^二謙見^レ殺^一、不韋載^レ喪歸鄉里、瘞而不葬仰

天嘆曰、伍子胥独何人也、乃藏^二母於武都山中^一、遂变^二名姓^一、

以^二家財^一募^二劍客^一邀嵩於諸陵、問^二不剋会^一嵩遷^二大司農^一、時右

校^レ郗儼在^二寺北垣^一下、不韋与^二親從兄弟^一潛入^二廡中^一、夜則

鑿^レ地昼則逃^レ伏、如此經月遂得^レ傍^レ達嵩之寢室^一出^中其狀^一、下

亡^二、值^二嵩在^一則^一、因殺^二其妾并及小兒^一留^レ書而去、嵩大驚懼乃布

二棘於室^一以^レ板籍^レ地、一夕九^一徙、雖家人莫^レ知^二其处^一每^レ出輒

劍戟隨^レ身壯士自衛、不韋知^二嵩有^レ備^一、乃日夜飛馳徑到^二魏郡^一、

掘^二其父阜^一冢斷^二取阜^一頭^一以祭^二父墳^一、又標^二之於市^一曰、李君

遷父頭^一嵩匿不敢言^一而自^上退^レ位歸^二鄉里^一、私掩^二塞家^一柳^一、

捕^二求^一不韋^一、歷^レ歲不^レ能^レ得^一、憤恚感傷病嘔^レ血死、不韋後遇

赦還家、乃始改葬行喪、士大夫譏不合^二古義^一、唯任城^一何休方^二

之^二伍員^一大原郭林宗論之曰、比^二之於員^一不以優^二乎議者^一、於是貴之

得^二太伝陳蕃^一辟^一不応為^二郡五官掾^一、初弘農^一張奐睦於蘇氏而武威

段熲与^二嵩素^一善、後^二奐頗有^レ隙^一、及^二熲為^二司隸^一以^レ礼辟^二不韋^一、

不韋懼^レ之稱^レ病不詣、頗既積^二憤於免^一、因發^レ怒、乃追咎^二不韋前報^レ晁事^一、以為晁表治謙事被報見誅、君命天也、而不韋仇之、又令^下長安男子告^中不韋^上、多將^二賓客^一、奪^二舅^一財物、遂使^下從事張賢等^一就^レ家殺^上之、乃先以^レ鳩與^二賢父^一曰、若賢不得不韋、便可飲^レ此、賢到^二扶風^一、郡守使^二不韋奉謁^一迎賢、即時收^レ報并其^一、門六十余人、尽誅滅之、諸蘇以是衰破、及^下段熲為揚球所^上誅、天下以為蘇氏之報焉、後漢本伝

一蘇章、字孺文、順帝時遷^二冀州刺史^一、故人為^二清河太守^一、章行^レ部案^二其姦藏^一、乃請^二太守^一為設^二酒肴^一、陳^二平生之好^一甚觀、太守喜曰、人皆有^二一天^一、我独有^二二天^一、章曰、今夕蘇孺文與^二故人^一、飲者私恩也、明日冀州刺史案^レ事者公法也、遂舉^二正其罪^一、州境知章無^レ私望^レ風畏^レ肅後、微為^二河南尹^一、不就論者舉^レ章、有^二幹国才^一、朝廷不能復用、卒^下于家、本伝

一樊宏、字靡卿、光武之舅、其先封^二干樊^一、因而氏焉、父重、字君雲、世善^二農稼^一、好^二貨殖^一、重性温厚有^二法度^一、三世共^レ財子孫朝夕礼敬常若^二公家^一、其當^二理產業^一、物無^レ所^レ棄、課^二後童隸^一各得^二其宜^一、故能上下勦^レ力財利歲^レ倍、至^下乃開^二田土^一三百余項^上、其所^レ起廬舍皆有^二重堂高閣^一、陂^レ渠灌^レ注^ス、又池魚牧畜有^レ求必^レ給^ス、嘗欲^レ作^二器物^一、先種^二梓漆^一、時人嗤^レ之、然積以^二歲月^一皆得^二其用^一、向之笑者成^レ飯焉、貲至^二巨万^一而賑^レ贍宗族^一、思加^二鄉閭^一、外孫何氏兄弟爭^レ財、重恥之、以^二田二項^一解^二其忿訟^一、県中称^レ美、推為^二三老^一、年八十余^ニ終^フ、其素所^二假貸人間^一數百万、遺令焚^二削文契^一責家聞者皆慙爭往償^レ之、諸子從^レ勅^レ竟不^レ肯受、宏少^ニ有^二志行^一、王莽末^ニ義兵起^一、劉伯升與^二族兄賜^一俱將^レ兵攻^二湖陽^一、城守不^レ下、賜^カ女^一弟

為^二宏妻^一、湖陽由^レ是收^二繫宏^一妻子^一、令^二出譬^一伯升^ニ、宏因^レ留^二不反^一、湖陽軍師欲^レ殺^二其妻子^一、長吏以下共相謂曰、樊重子父礼義恩德行^二於鄉里^一雖^レ有^レ罪且^レ當^レ在^レ後会^ニ漢兵日盛^一湖陽惶^一急^ス、未^ニ敢殺^レ之^一、遂得^二免脱^一更始立欲^二以^レ宏為^レ將^一、宏叩頭辭曰、書生不^レ習^二兵事^一、竟得^二免^一、與^二宗家親屬^一作^二營壘^一自守^ル、老弱婦之者千余家、時赤^二賊^一唐子鄉、多^レ所^レ殘殺、欲^二前攻^二宏營^一、宏遣^下人持^二牛酒^一米穀^一勞^二遣^上赤眉^一、赤眉長老先^ニ聞^一宏仁厚^一、皆称^レ曰、樊君^ニ口善^一、且今見^レ待如此、何心攻之引兵而去遂免^二寇難^一、世祖即位^ニ光祿大夫^一、位特進次^二三公^一、子弟封^レ侯^一十八年帝南祠^二章陵^一、過^二湖陽祠^一重墓^一、追爵^レ諡為^二壽敬侯^一、立^二廟於湖陽^一、車駕每^ニ南巡^一常幸^二其墓^一、賞賜大会、宏為^レ人謙柔畏慎、不^レ求^二苟進^一、常戒^二其子^一曰、富貴盈^レ溢未有^二能終者^一、吾非^レ不^レ喜^二榮勢^一也、天道惡^レ滿而好^レ謙、前世^ニ貴戚皆明戒也、保^レ身全^レ己、豈不^レ樂哉、每^レ當^二一朝会^一輒迎^レ期先到俯伏待^レ事時^一至^レ乃起、帝聞之常勅^二驃騎^一臨^レ朝乃告^レ勿^レ令^二子^一到^レ宏^一所^レ上便^レ宜^レ乃言^レ得失輒手自書寫毀^二削中本^一、公朝訪逮不^ニ敢衆對^一、宗族染^二其化^一、未^ニ嘗犯^レ法^一、帝甚重^レ之、及^二病因^一車駕臨^レ視留宿問^二其所^レ欲^一言、宏頓首自陳無^レ功享^二食大國誠恐^一子孫不^レ能^レ保^二全厚恩^一、令^下臣魂神慙^一負^二黃泉^上、願還^二壽張^一食小鄉亭^一、帝悲^二傷其言^一而竟不^レ許、貳十七年卒遺勅薄葬一無^レ所^レ用、以為棺槨一藏不^レ宜復見^一、如有^二腐敗^一傷^二孝子之心^一、帝令^二其令^一、賻^二錢千万^一布万匹^一、諡為^二恭侯^一、樊氏侯^{タル}者凡五國、本伝

一楚王問莊辛曰、君子之富何如、對曰、佞人^ニ不^レ德^一、不^レ口^レ食^レ人不^レ使^レ不^レ役、親戚愛^レ之、衆人善^レ之、說苑

一孔子行^レ見^二臯魚^カ哭^一、孔子曰、子非^レ有^レ喪何哭悲也、臯魚曰、吾少而好^レ學、周^一流諸侯^一以没^二吾親^一、樹欲^レ靜而風不^レ止、子欲^レ養而親不^レ待住而不^レ可^レ追者年也、去而不^レ見者親也、孔子曰、弟子識^セ之、於是門人辭^レ歸者十有三也、韓詩外伝

一廬江毛義少^二節^{アリ}、家貧^一以^二孝行^一稱^ル、南陽^一張奉慕^二其名^一往^テ候^レ之、坐定而府檄適^至、以^二義守^一令^{トス}、義奉^レ檄而^二喜動^一顏色^一、奉者志尚^ノ士也、心賤^一之自恨^レ來、固辭而去、及^二義母死^一去^レ官行^レ服、數辟^二公府^一為^二県令^一、進退必^レ以^レ礼、後舉^二賢良^一公車徵^ス、遂不^レ至、張奉難^レ曰、賢者固不可測、往日之喜乃為^レ親屈也、斯蓋所謂家貧親老不^レ挾官而仕者也、韓詩外伝

一劉平、〔字〕公子、更始時天下乱、平弟仲為^レ賊所^レ殺、其後賊復忽然而至、平扶^二侍^ス其母^一奔走逃^レ難、仲遺腹女始一歲、平抱^二仲女^一而棄^二其子^一母欲^レ還^テ取^レ之、平不^レ聽曰、力不^レ能兩活^一、仲不^レ可^二以^一絕^レ類遂去不^レ顧、与^レ母俱匿^二野沢中^一、平朝^二出求^一食、逢^二餓賊^一將^レ烹、平^四頭曰、今且為^二老母^一求^レ菜、老母待^レ曠^レ為^レ命、願得^二先婦^一食^レ母畢^テ還就^レ死、因涕泣、賊見^二其至誠^一、哀而遣之、平還^テ既食^レ母^ニ訖因白曰、属^レ与^レ賊期^ス、義不可欺、遂還詣^レ賊、衆皆大驚相謂曰、嘗聞^二烈士^一乃今見之、子去矣、吾不^レ忍^レ食^レ子、於是得^レ全、建武初、平狄將軍龐萌反^二於彭城^一、攻^二敗^一郡守孫萌^一平時復為^二郡吏^一、冒^二白^一及^二伏^一萌身上^一被^二二十創^一因^四頓^一不^レ知^レ所^レ為、号泣不^レ知^レ所^レ為、号泣請曰、願以^レ身代^二府君^一、賊及斂^レ兵止曰、此義士也、勿^レ殺、遂解去、本伝

一趙孝、字長平、及^二天下乱^一人相食、孝弟礼為^二飢賊^一所得、孝聞之即自縛詣^レ賊曰、礼久餓羸瘦不^レ如^二孝肥飽^一、賊大驚並放之謂曰、可^下且歸更持^二米糲来^上、孝求不^レ能^レ得復往報^レ賊、願就^レ

烹、衆異之、遂不^レ害、顯宗詔拜^二諫議大夫遷^一侍中^一、本伝

一蔡順、字君仲、以^二至孝^一稱、順少孤養^レ母、嘗出求^レ薪、有^レ客卒^カ至、母望^レ順不還乃噬^二其指^一、順即心動棄^レ薪馳歸、跪問^二其故^一、母曰、有^二急客^一来、吾噬^レ指以悟^レ汝耳、母年九十以^レ壽終、未^レ乃得^レ葬、里中災火將^レ逼^二其舍^一、順抱^二伏棺柩^一、号哭叫^レ天、^二遂越^一燒^二宅室^一、順独得^レ免、太守韓崇召為^二東閭^一祭酒、母平生畏^レ雷、自^レ亡後每^レ有^二雷震^一順輒^レ圓^二冢泣曰、順在此、崇聞之、每^レ雷輒^レ為^二差^一車馬^一到^二墓所^一、太守鮑衆舉^二孝廉^一、順不^レ能^二遠離^一墳墓、遂不就、年八十終^二于家^一、伝本

一趙咨、字文楚、累遷敦煌太守以病免還、躬率^二子孫^一耕農為^レ養、盜嘗夜往劫^レ之、咨恐^二母驚懼^一、乃先至^レ門迎^レ盜、因請為^レ設^レ食謝曰、老母八十、疾病須^レ養、居貧朝夕無^レ儲、乞少置衣糧妻子^一物余^一無^レ所^レ請、盜皆慙歎跪而辭曰、所^レ犯無^レ狀干^二暴賢者^一、言畢奔出、咨追以^レ物与^レ之不^レ及、後漢書本伝

一子路問孔子曰、昔者管子欲立公子糾而不能、召忽死之、管仲不死、是無^二他^一也、孔子曰、召忽者人臣之村^一、不死則三軍之虜也、死之則名聞^二於天下^一矣、何為不死哉、管子者天子之佐諸侯之相也、死之則不免於溝瀆之中^一、不死則功復^二於天下^一、夫何為死之哉、說苑

一後漢顯宗性褊察、好以^二耳目隱發^一為^レ明、故公卿太^二數被^一詆毀^一、近臣尚書以下至^レ見^二提拽^一、常^テ以事怒^二郎葉崧^一以^レ杖撞^レ之崧走入^二牀下^一、帝怒甚疾言曰、郎出^二々々、崧曰、天子穆々諸侯煌^二々^一、未聞人君自起撞^レ郎、帝赦之、朝廷莫不^二悚慄^一、崧者河内人、天性朴忠、家貧為^レ郎、当独直^二台上^一無^レ〔被〕枕^一杜、食^二糟糠^一、帝每夜入^レ台輒見^レ崧問^二其故^一甚喜之、崧官至^二南陽太

守^一、

一邑名^二勝母^一、曾子不^レ入、水名^二盜泉^一、仲尼不飲、醜^二其名^一也、說苑及尸子

一魯藏孫行猛政、子責非之曰、夫政猶^レ張^二琴瑟^一也、大絃急則小絃絕矣、故曰、罰得則姦邪止、賞得則下歡^一悅、子^一之賊^一心見^{タリ}矣、独不^レ聞子產之相^レ鄭乎、推^レ賢^一拳^一能抑^レ惡^一揚^レ善^一有^二大略^一者不^レ問^二其短^一、有^二厚德^一者不^レ非^二小疵^一、家給人足、囹圄空虛、子產卒、國人皆叩^レ心流^レ涕、三月不^レ聞^二竽琴之音^一、其生也見^レ愛、死也可悲、故曰德莫^レ大^二於仁^一、禍莫^レ大^二於刻^一、今子病而人賀子愈而人相^レ曰、嗟乎何^レ命^一之不^レ善^一子又不^レ死、藏孫慙而避位終^レ身不^レ出、新序

一晋平公問於叔[□]^向曰、國家之患孰為大、對曰、大臣重^レ祿不^二極諫^一、小臣畏^レ罪不^二敢言^一、下情不^二上通^一、此患之大者也、公曰、善、於是下^レ令曰、吾欲^レ進^レ善、有謁而不通、罪至^レ死、新序

一韓子曰、千丈之堤以^二蟻蟻之穴^一而潰、

一後漢班超家貧常為^レ官傭書似供^一養、久勞^一苦、嘗輟^レ業投^レ筆歎

曰、大丈夫無^二它^一志略^一猶當效^二伝介子張騫立^一功異域^一以取^中封侯^上、安能久事^二筆研間^一乎、左右皆笑之、超曰、小子安知^二壯士志^一哉、本伝

一班超曰、不入虎穴^一不得虎子、同上

一班超伐西城略李邑值^二龜茲^一攻疏勒恐懼不^二敢前^一、因上書^レ陳^ス西城之功不可^レ成、又盛毀^レ超擁^二愛妻^一抱^二愛子^一安^二樂外國^一無^二內^一顧心^一、超聞之歎曰、身非曾參而有^二三至之讒^一、恐見^下疑^二於當時^一矣、遂去^二其妻^一、帝知超忠、乃切^二責邑^一曰、從超擁^二愛妻^一抱^二愛子^一思歸之士千余人、何能尽与^レ超同心乎、令^レ邑詣^レ超受^二

節度^一詔[□]^超、若邑任^レ在^レ外便留^テ与^二從^一事^一、超即遣^下邑將烏孫^一侍子^一還^中京師^上、徐幹謂超曰、邑前親毀^レ君欲^レ敗^二西城^一、今何不^下綠^レ詔書^一留^レ之、更遣他^レ吏^一送^中侍子^上乎、超曰、是何言之陋也、以邑毀^レ超故今遣^一之、内省不^レ疚何卹^二人言^一快^レ意留^レ之、非^二忠臣^一也、本伝

一堯舜之民可比屋而封、桀紂之民可比屋而誅、陸賈新語

一僕妾感慨而致死者、非能義勇、顧無慮耳、史記張敖傳贊

一夫鳥以^レ山為^レ埤而增^二巢其上^一、魚以泉為^レ淺而穿穴^一其中、卒所以得者餌也、大戴禮

一時人嫌^二蔡邕得^一異書^一、或搜^二求其帳中^一隱處^一、果得^二論衡^一抱^二數卷^一持去、邕丁寧之曰、唯我与爾共^レ之、勿^レ広也、抱朴子按論衡八十五篇、二十余万言、後漢王充、字仲任、著之、

一後漢永寧元年西南夷掸國王獻^二樂及幼^一人^一、能吐^レ火自支解^ス、易

二牛馬^一頭、明年元会^二作^一之於庭^一、安帝与群臣共觀大奇^一之陳

一禪離^レ席拳^レ手大言曰、昔齊魯為夾谷之会^一齊作^二〔侏〕^一儒之樂^一、仲尼誅之、又曰、放鄭聲^一遠佞人^一、帝王之庭不宜設夷狄之技、本伝

一後漢橋玄拜^二大中大夫^一、就^二医^一里舍^一、玄少子十歲、独游^二門次^一卒^二有^一三人^一、持^レ枝劫^一執^レ之入^レ舍登^レ樓、就玄求^レ貨、玄不^レ

与^レ有^レ項司隸校尉陽球牽^二河南尹^一洛陽令^一圉^二守玄家^一、球等怒

三并殺^二其子^一、未欲迫之、玄瞋^レ目呼曰、姦人無狀、玄豈以^二一子之命^一而縱^二國賊^一乎、促^二令^一兵進^一、於是攻之、玄子亦死、玄乃詣^レ闕謝^レ罪、乞^下天下^一、凡有^二劫質^一皆并殺^レ之、不得^二贖以財宝^一、開^二張姦路^一、詔書^下其章^一、本伝

一魯有男子^一独処^一、夜暴風雨至、婦人趨而託之、男子閉戶不納

曰、吾聞男子不六十不^二間^一居^一、婦人曰、子何不學柳下惠^一然、
嫗^レ不^レ逮^レ間^二之^一女^一、國人^一不稱其乱焉、韓詩外伝

一子張見魯哀公^一、七日哀公不礼焉、而去曰、君之好^レ士有似葉公子高好^レ妾^一、大竜聞而降之窺^二頭^一於牖^一、施^二尾^一於堂^一葉公見之失^二其魂魄^一、五色無^レ主、是葉公非^レ好竜也、好^レ夫似竜而非^レ竜者也、新序

一後漢崔駰曰、交浅而言深者愚也、在賤而望^レ貴者惑也、未信而納^レ忠者謗也、本伝

一崔寔曰、昔高祖令蕭何作^二九章之律^一、有^二夷三族之令^一、黥[・]劓[・]斬[・]趾[・]斷[・]舌[・]梟[・]首[・]、故謂之具^二五刑^一、文帝雖除肉刑^一、当劓者答^二二百^一、当斬左趾者^一〔答〕五百、当斬右趾者棄市^ス、右趾者既殞^二其命^一、答撻者往往至^レ死、雖有輕刑之名^一、其実殺也、当^二此之時^一民皆思復^二肉刑^一、至景帝元年^一乃下^レ詔曰、加^レ答与重罪無異、幸而不死、不可為民、乃定律減答輕^レ極、自是之後答者得^レ全、以此言之、文帝乃重刑非輕之也、以^レ嚴致^レ平、非以寬致平也、政論

一後漢周燮、字彥祖、志行高整、非礼不動、過妻子如君臣^一、鄉党以為儀表、本伝

一後漢虞詡曰、志不求易、事不避難、臣之職也、不過^二槃根^一・錯節^一、何以別^二利器^一乎、本伝

一客為^二齊王^一画者^{アリ}、問画、就難、就對曰、狗馬最難、就易、鬼魅最易、狗馬人所知也、故難、鬼魅無形、故易也、韓子

一孝平^一王皇后莽之女也、及^二莽篡^レ位^一、后嘗称^レ疾不^レ朝、会^二莽誅后自投^二火中^一而死、

一左雄諫後漢順帝^一、人君莫不好忠正而惡讒諛^一、然而歷世之患、莫

不以忠正得罪讒諛蒙倖者蓋聽^レ忠難從^レ諛易也、本伝

一王国子前^一母^一子伯奇、後母^一子伯持、後^一母欲其子立為太子、説^レ王曰、伯奇好^レ妾^一、王不信、其母曰、令伯奇於^二後園^一妾過其旁、王上^レ台視之、即可知王、如其言、伯奇入園、後母陰取蜂十数置^二單衣中^一、取蜂殺之、王遙見乃遂伯奇也、說苑

*東大本【頭書】「伯奇是尹吉甫事□□不詳」

一小小人之情、緩則驕、驕則恣、恣則怨、怨則叛、危則叛謀乱、安則思欲、非威強^一、無以懲^レ之、荀悅語申鑒

一東海有孝婦、少寡無子養^レ姑甚謹、姑欲嫁之終不肯、姑告隣人曰、孝婦養我勤苦、我老久累^二丁壯^一、乃自經^{シテ}死、姑女告吏曰、婦殺我母、吏驗之急、孝婦自誣服具^レ獄、上^レ府^ニ、太守竟論^二殺婦^一、郡中枯旱三年、後太守至自祭孝婦墓^一天立大雨歲熟、前漢書

一宋之愚人得^二燕石^一梧台之東^一、歸而藏之、以為大宝、周^一客聞而觀^レ之、主人^一父齊^一七日端冕之衣、疊^レ之、以特^レ牲、革^一匱十重、緹巾十襲、客見之免而掩^レ口廬^一故而笑曰、此燕石也、与瓦甃不殊、主^一人交^一怨曰、商賈之言^一堅匠之心^一、藏之愈固守之弥謹、子開

一母之於^レ子也、鞠養殷勤、推^レ燥居^レ溼、絕^レ少分^レ耳也、孝經援

一楊康、字叔節、震^一中^一子、從客言曰、我有^二三不惑^一、酒色財也、本伝

一漢武至郎署^一、見一老郎鬢眉皓白、問何時為^レ郎何其老^{タル}也、對曰、〔臣〕姓顏、名駟、以^二文帝時^一為^レ郎、文帝好文而臣好武、景帝好老而臣尚少、陛下好少而臣已^二老^一、是以三葉不過也、上感^二其言^一、擢為会稽都尉也、漢武故事

一天子見怪則修^レ德、諸侯見怪則修^レ政、卿大夫見怪則修^レ職、士庶人見怪則修身、周書

一徐穉及^二黃瑗卒^一徒步赴之、薄祭哭畢而去、不告姓名、時^二会四方

名士郭林宗等數十人聞之疑其穉也、選茅容^一追之、及^二於塗^一謂容曰、為^レ我謝^二郭林宗^一、大樹將^レ顛非^二一繩所^レ維何為栖々不^レ遑^二寧處^一、本伝

一後漢姜肱^ハ与^二季江^一俱乘^レ車行^テ適^二野廬^一、為^レ賊所^レ劫、取^二其衣物^一欲殺其兄弟、肱謂盜曰、弟年幼父母所憐愍、又未^レ娶^一、願自殺身濟^二弟^一、季江言、兄年德在^レ前、家之珍宝、国之英俊、乞自受戮以代兄命、盜戢^レ刃曰、二君所謂賢人、吾等不良妄相侵犯、棄^レ物而去、肱車中尚有數千錢、盜不見也、使從者追以与之、亦復不受、肱以物經歷盜手^一、因以付^二亭吏^一而去也、謝承書

一衛大夫史魚病且^レ死謂其子曰、我數言、蘧伯玉之賢而不能進、弥子瑕不肖不能退、為人臣生不能進賢而退不肖、死不当理喪正堂、殯^一〔我於室足矣、衛君問其故、子以父言聞^レ君、乃立君蘧伯玉而貴之、弥子瑕而退之、徙殯^一〕於正堂成礼而後去也、韓詩外伝

一後漢虞詡曰、法禁者俗之〔堤〕防、刑罰者人之銜轡、今以苟容為賢^一、本伝、賢^レ盡節為愚、

一北叟^ハ塞上^一、叟也、其馬亡入胡中、人皆弔之、叟曰、何知非福、居數月其馬引胡駿馬而歸^ル、人皆賀之、叟曰、何知非禍、及家富馬良、其子好^テ騎墮而折体、人皆弔之、叟曰、何知非福、居一年胡夷大入、丁壯皆戰死者十九、其子獨以跛之〔故〕父子相保、淮南子

一後漢吳祐、字季英、官至酒泉太守^一、祐政唯仁簡以身率物、民有爭訴者輒閉閣自責、然後斷其訟以道譬之、或身到閭里重^レ相和解^一、自是之後爭隙省息、〔吏人〕人吏懷而不欺、嗇夫孫性私賦民錢^一、〔統漢書曰、賦錢二百為一市車衣〕市衣以進其父、父得而怒曰、有君如^レ是何忍欺之、促婦伏罪、性慙懼詣閣持衣自首^一、祐屏左右問其故、性具談父言、祐曰、掾以親故受污穢之名、所謂觀過斯知仁矣、使婦謝其父還以衣遺之、

又安丘^一男子母立長与^レ母俱行市、道遇醉客辱其母、長殺之而亡、安丘追蹤於膠東得之、祐呼^レ長謂曰、子母見辱人情所恥、然孝子忿必慮難、動不累親、今若^テ背^レ親違^レ怨^一、白日殺人赦^一若非義、刑^レ若不忍、將如之何、長以^レ械自繫曰、國家制法囚身犯之、明府雖加哀矜、思無所施、祐問長有妻子乎、對曰、有妻、未有子也、即移安丘送長^一妻^一、妻到^レ解其桎梏、使同宿獄中、妻遂懷孕、至^二冬^一尽^レ行^レ刑^一、長泣謂母曰、負^レ母^一死、當何以報吳君乎、乃齧指而吞之舍^一、血言曰、妻若生^レ子名^二之吳生^一、言我臨死吞指為誓、属兒以報^二吳君^一、因投^レ繯而死、本伝

一廬植、字子幹、少与^二鄭玄俱事^二馬融^一、能通^二古今^一、学好^二研精^一而不守章句^一、融^ハ外戚^一、豪家也、多列^二女倡^一歌^一舞於前、植侍講積^レ年、未嘗輒眄、融以是敬之、性剛毅、有大節常懷^二濟世志^一、不好辭賦、能飲酒一石、初平三年卒、本伝

一孔子曰、夫君者舟也、人者水也、水可載舟亦以覆舟、家語

一後漢張芝、字伯英、勤學文為儒宗、武為將表、尤好草書學^二崔杜之法^一、家之衣帛必書而後練^一、臨^レ池學書、水為^レ之黑^一、下^レ筆則為楷則^一、号^二忽々不暇^一、草書為^レ世所^レ宝、寸紙不遺、韋仲將謂之草聖也、王愔、王愔、王愔

一賈彪補新息^一、長^一、小民因貧多不養子、彪嚴為其制与^レ殺人同罪、城南有盜劫^二害人^一者、北有婦人殺子者、彪出案^一、免^一、而掾吏欲^二引南^一、彪怒曰、賊寇害人、此則常理母子相殘、逆天違^レ道、遂驅車北行案^レ驗其罪^一、城南賊聞之亦面縛自首、數年間人養子者千數、兪曰、賈父所^レ長^一、生^レ男名為^二賈子^一、生^レ女曰^二賈女^一、本伝一兎走於街、百人追之、貪人俱存、人莫^二之^一力^一者^一、以免為^レ未^レ定^一分也、積兎滿^レ市、過不能^レ顧、非不欲兎也、分定之後雖鄙不

争、慎子

一郭林宗雖善^レ人倫^一而不為危言覆論^{（憲）}、故宦官擅政而不能傷也、及党事起^一知名之士多被其害、唯林宗及汝南袁閔得免焉、遂閉^レ門教授弟子以千數、^{本伝}

一孔融、字文舉、魯國人、孔子二十世孫也、^{（幼）}有異才^一、家伝玄兄弟七人、融^{（弟）}第六也、年四歲時每与諸兄共食梨、融輒引小者^一、大人間其故、答曰、我小兒也、法当取小者^一、由^レ是宗族奇之、^{本伝註}
一孔融聞人之善、若出諸己^一、言有可採必演而成之、面告其短而退称所長、^{本伝}

一董卓承之誅伏后与父完^二書^一言、司空殺董卓^一、帝方為報怨、完得書以示荀彧、彧惡之隱而不言、完以示其妻弟樊豐^一、普封以呈^二太祖^一、太祖陰為之備、彧恐事覺^{（恐）}欲自發^一之、因求使至^レ鄴勸太祖以女配帝、太祖曰、今朝廷有伏后、吾女何得配上、彧曰、伏后無子、性又凶邪、往嘗与父書、言詞醜惡、可因此廢也、太祖曰、卿昔何不道之、彧陽驚曰、昔已嘗為^レ公言也、太祖曰、此豈小事而吾忘之、太祖以此恨彧而外舍容之、止^二董卓^一召建^二魏公議^一、彧意不同、欲言之於太祖乃齎璽書犒軍、飲饗礼畢、彧請問、太祖知彧欲言揖而遣之、遂不得留之、卒於寿春、^{獻帝春秋}

* 異図本衍字

一後漢仇覽、字季智、為蒲亭^ノ長、有^二陳元者^一、独与母居而母詣^レ覽告^二元不孝^一、覽驚曰、吾近日過^レ舍廬落整頓耕耘^{（*）}以^レ時、此非^二惡人^一、当是教化未及至耳、母守^レ寡養^レ孤苦^レ身投^レ老^{（二）}奈何肆^二忿於一朝^一、欲致^レ子以不義^一乎、母聞感悔涕泣而去、覽乃親到^二元家^一、与^二其母子^一飲^{（ス）}、因為陳人倫孝行^一、譬^二以禍福之言^一、元卒成孝子、^{本伝}

* 東大本【頭書】「落居也」

一周紆、字文通、召陵候^{（侯）}相^{（タリ）}、廷^ノ掾憚^二紆嚴明^一、欲損^二其威^一、乃晨取^二死人^一斷^二手足^一立^二寺門^一、紆聞便往至^二死人辺^一、若^{（下）}与死人共語狀^{（上）}、陰察^二視口眼^一有稻芒^一、乃蜜門^{（密）}守門人^一曰、悉^{（*）}誰載^レ糞入城者門者^一、对、唯有廷掾耳、又問^二鈴下^一、外^{（二）}頗有^{（下）}疑^{（乙）}令与^二死人^一語^{（甲）}者^{（上）}不、对曰、廷掾疑^レ君、乃収^二廷掾^一考問^{（ス）}、具服^{（ス）}、不殺人取道辺死人^一、後人莫敢欺者、^{本伝}

* 東大本【頭注】「悉猶知也」

一劉昆、字桓公、光武為^二江陵令^一、時累連年火災、昆輒向^レ火叩頭、多^二能降^レ雨止^レ風、徵拜議郎弘農太守^{（タリ）}、先是崤黽驛道多虎災行旅不通、昆為政三年、仁化大行、虎皆負子度河、帝聞異之、二十二年為光祿勳、詔問昆曰、前在江陵反風滅火、後守弘農虎北度河行、何德政而致是事、昆对曰、偶然耳、左右皆笑其質訥、帝歎曰、此乃長者之言也、顧命書諸策、乃令入授皇太子及諸王^{（侯）}小候五十余人、^{本伝}

一山林之士為^レ名、故往而不能反也、朝廷之士為^レ祿、故入而不能出、^{韓詩外伝}

一周宣王嘗夜臥而晏起、姜后乃脱^二簪珥^一待^二罪於永巷^一、使其傳母^{（中）}言^{（上）}王^{（下）}曰、妾不才、妾之淫心見矣、至使君王失礼而晏朝、以見^二君王^一棄色而忘德也、敢請^二婢子之罪^一王乃勤^二於政^一、早朝晏罷、卒成中興焉、^{列女伝}

一後漢范式、字巨卿、与汝南張劭、字元伯、為友、後^二元伯寢^レ疾篤、歎曰、恨不見吾死友、范臣卿尋而卒、式忽夢見元伯^{（巨）}、玄冕垂纓履屨而呼曰、巨卿吾以某日^{（下）}死、当^{（下）}以爾時葬^{（上）}、永帰^二黄泉^一、子未^二我^{（下）}忘^{（上）}、豈能相及、或恍然覺寤悲歎泣下、具告^二太守^一

請往奔喪、太守雖心不信而重違其情、許之、式便服朋友之服、投其葬日、馳往赴之、式未及到而喪已發引、既至、擴將窆而下棺、而柩不肯進、其母撫之曰、元伯豈有望邪、遂停柩移時、乃見有素車白馬号哭而來、其母望之曰、是必范巨卿也、巨卿既至叩喪言曰、行矣元伯、死生路異、永從此辞、会葬者千人、咸為揮涕、式因執紼而引柩、於是乃前、式遂留止冢次、為修墳樹、然後乃去、本伝

一水濁則魚喁、令苛則人乱理、国者譬若張琴然、大絃急則小絃絕矣、故急轡銜者非千里之御也、韓詩外伝

一樊英、字季齊、安帝初詔公車賜策書徵不至、順帝策書、備礼玄纁徵之、復固辞疾篤、乃詔切責郡县載上道、英不得已到京、称病不肯起、乃強輿入殿猶不以礼屈、帝怒謂英曰、朕能殺君、〔能〕生君、能貴君、能賤君、能富君、能貧君、君何以慢朕命、英曰、臣受命於天、生尽其命、天也、死不得其命、亦天也、階下焉能生臣、焉能殺臣、臣見暴君如見仇讎、立其朝猶不肯、可得而貴乎、雖在布衣之列環堵之中、晏然自得、不易万乘之尊、可得而賤乎、階下焉能貴臣、焉能賤臣、臣非礼之祿雖万鍾不受也、若申其志、雖簞食不厭也、階下焉能富臣、焉能貧臣、帝不能屈而敬其名、使出就太医養疾、本伝

一梁鴻、字伯鸞、尚節欲介博覽無不通、而不為章句、勢家慕其高節多欲女之、鴻並絕不娶、同县孟氏有女、状肥醜而黑、力举石臼、挹对不嫁至年三十、父母問其故、女曰、欲得賢如梁伯鸞者、鴻聞而媾之、女求作布衣麻履織作筐緝績之具、及嫁始以裝飾入門七日而鴻不答、妻乃跪狀下請曰、窃聞夫子高義簡斥数婦、妾亦偃蹇数夫矣、今而見挹、敢不請罪、鴻曰、吾欲裘褐之人可

与但隱深山者、爾今乃衣綺縞伝粉墨、豈鴻所願哉、妻曰、以觀夫子之志耳、妾自有隱居之服、乃更為椎髻著布衣操作而前、鴻大喜曰、此真梁鴻妻也、能奉我矣、字之曰德曜孟光、共入霸陵山中以耕織為業、詠詩書彈琴以自娛、遂至吳、依大家臯伯通居廡下、為人賃舂、每歸妻為具食、不敢於鴻前仰視拳案齊眉、伯通察而異之曰、彼傭能使其妻敬之如此、非凡人也、乃方舍之於家、鴻潜閉著書十余篇、終身不仕、本伝

*東大本「頭書」以女妻人曰女

一廣漢姜詩妻者同郡龐盛之女也、詩事母至孝、妻奉順尤篤、母好飲江水、水去舍六七里、妻常泝流而汲、後值風不時得還、母渴、

詩責而遣之、妻乃寄止隣舍、昼夜紡績、市珍羞使隣母以意自遣其姑、如是者久方、姑怪問隣母、隣母具对、姑感慙呼還、恩養愈謹、其子後因遠汲溺死、妻怨姑哀傷不敢言而託以行学不在、姑嗜魚鱸又不能独食、夫婦常力作供鱸、呼隣母共之、舍側忽有涌泉、味如江水、每且輒出双鯉魚常以供二母之膳、永平三年察孝廉、顯宗詔曰、大孝入朝、凡諸举者一聽平之、由是皆拜郎中、詩尋除江陽令、本伝

列女伝

一楚莊王好田獵、樊姬故不食鮮禽以諫王、
一齊桓公好音樂、衛姬不聽五音以公、同

一沛郡周郁妻者同郡趙孝之女也、字阿、少習儀訓、閑於婦道、而郁驕淫輕躁、多行無礼、郁父偉謂何曰、新婦賢者、女、当以道匡夫、郁之不改正婦過也、阿拜而受命退謂左右曰、我無樊衛二姬之行、故君以責我、我言而不用、君必謂我不奉教令、則罪在我矣、若言而見用、是為子違父而從婦、則罪在彼矣、生如此、亦何聊哉、乃自殺、莫不傷之、後漢書本伝

一河南樂羊子嘗行路得遺金一餅、還以與妻、妻曰、妾聞志士不飲盜泉之水、廉者不受嗟承之食、況拾遺求利以汚其行乎、羊子大慙乃捐金於野而遠尋師學、一年承婦、妻跪問其故、羊子曰、久行懷思無它、異也、妻乃引刀趨機而言曰、此織生自蚕繭、一成於機杼、一糸而累以至於寸、累寸不已遂成丈匹、今若斷斯織也、則損失成功、稽^{〔廢〕}發時月、夫子積學、當日知其所亡、以就懿德、若中道而歸、何異斷斯織乎、羊子感其言復還終業、遂七年不返、妻常躬勤養姑、又遠饋羊子、嘗有它舍、雞謬入園中、姑盜殺而食之、妻對^レ雞不餐而泣、姑怪問其故、妻曰、自傷居食使食有它肉、姑竟棄之、後盜欲有犯妻者、乃先刳其姑、妻聞操刀而出、盜人曰、積汝刀從我者可全、不從我者則殺汝姑、妻仰天而歎、舉刀刳頸而死、盜亦不殺其姑、太守聞之、即捕殺賊盜、而賜妻^{〔縑〕}泉以礼葬之、号曰貞義、^{〔本伝〕}

*異國本衍字

一安定皇甫規初喪室家、後更娶之、妻善属文能草書、乃規卒時妻年猶盛而容色美、後董卓為相国承^{〔其〕}其名、嫂以輶輜而乘馬二十四、奴婢錢卓^{〔充〕}路、妻乃輕服詣卓門、跪自陳請、辞甚酸愴、卓使傳奴侍者悉拔刀圍之而謂曰、孤之威教欲令四海風靡、何有不行於一婦人乎、妻知不免乃立罵卓曰、君羌胡之種、毒害天下猶未足邪、妾之先人清德奕^{〔世〕}、皇甫氏文武上才為漢忠臣、君親非其趣使走吏乎、敢欲行非礼於爾君夫人邪、卓乃引^{〔車〕}疾中^{〔疾〕}、以其頭懸^レ輶輜撲交下、妻謂持枝者曰、何不重乎、速盡為惠、遂死車下、後人因画、号曰礼宗玄、^{〔本伝〕}

*東大本【頭注】「輶謂輶端庄牛領者」

一漢中程文矩妻、字穆姜、有二男、而前妻四子、文矩卒、四子以

母非所生憎毀日積、而穆姜慈愛温仁撫字益隆、衣食資供皆兼倍所生、及前妻長子興遇疾因篤、母惻隱自然、親調藥膳恩情篤蜜、興疾久乃瘳、呼三弟謂曰、繼母慈仁出自天受、吾兄弟不識恩養禽獸其心、雖母道益隆、我曹過惡亦已深矣、遂將三弟詣南鄭獄、陳母之德狀已之過、乞就刑辟、県言之於郡、郡守表^{〔異〕}其母^{〔蠲〕}除家徭、遺散四子、許以^{〔修〕}革^{〔並〕}為^{〔良〕}士、^{〔本伝〕}

一南陽陰瑜妻者潁川荀爽之女也、名采、字女荀、聰敏有才藝、年十七適陰氏、十九產一女而瑜卒、采時尚豐少、常處^{〔處〕}為家所逼自防禦甚固、後同郡郭奕喪妻、爽以采許之、因詐称病篤召采、既不得已而婦懷刃自誓、爽令傳婢執奪其刃扶抱載之、猶憂致憤激、勅衛甚嚴、女既致郭氏、乃偽為觀悅之色、謂左右曰、我本立志与陰氏同穴、而不免逼迫遂至於此、素情不遂奈何、乃命使建四灯^{〔盛〕}裝飾、請奕入相見、共談言辞不輟、奕敬憚之遂不敢逼、至曙而出、采因勅^{〔令〕}左右并浴上、既入室而掩戶、權令侍人避之、以粉扉上曰、尸還^{〔陰〕}、陰字未及成、懼有來者遂以衣帶自縊、^{〔本伝〕}

一李充、字大遜、字貧兄弟六人、同衣遞食、妻窃謂充曰、今貧居如此、難以久安、妾有私財、願思分異、元偽酬之曰、如欲別居當醢酒具會、請呼鄉里内外共議其事、婦從^{〔元〕}元置酒譙客、充於坐中前跪白母曰、此婦人無狀、而教充離間母兄、罪合遺斥便呵叱其婦逐出門、婦銜涕而去、坐中驚肅、元後為博士、遷侍中、又遷左中郎將、^{〔本伝〕}

一王恁、字少林、嘗詣京師、於空舍中見一書生疾因^{〔因〕}、慙而視之、書生曰、我当到洛陽而被病命在須臾、腰下有金十斤、願以相贈、死後乞藏体骨、未及問姓名而命絕、恁即鬻一斤當其殯葬、余金悉置棺下、人無知者、後婦數年果署^{〔大〕}度亭長、初到之日有馬馳

入亭中而止、其日大風飄一繡被復隨他前、即言之於梟、梟以婦他、他後乘馬到雒梟、馬遂奔走牽他入它舍、主人見之喜曰、今禽盜矣、問他所由得馬、他具說其狀、并及繡被、主人悵然良久乃曰、被隨旋風一與馬俱亡、卿何陰德而到此二物、他自念、有葬書生吏、因說之、并二道書生、形貌及埋金之處、主人大驚号曰、是我子也、姓金、名彥、前往京師不知所在、何意卿乃葬之、大思久不執、天以此章卿德耳、他悉以被馬還之、彥父不取、又厚遣他、他辭讓而去、時彥父為州從事、因告新都令一假悅休息迎彥喪、余〔金俱〕存、他由是顯名、仕郡功曹州治中從事、舉茂才除郿令、到官至麓亭、亭長曰、亭有鬼數殺過客、〔不〕可宿也、他曰、仁勝凶邪除不祥、何鬼之避、即入亭止宿、夜〔中〕聞有女子稱冤之声、他呪曰、有何枉狀、可前求理乎、女子曰、妾無衣不敢進、他便投衣与之、女子乃前訴曰、〔妾〕夫為涪令之官過宿此亭、亭長無狀枉殺妾家十余口埋在楼下、悉盜取財貨、他問亭長姓名、女子曰即今門下游徼者也、他曰、汝何故數殺過客、對曰、妾不得白日自訴、每夜陳冤、客輒眠不見応、不勝感恚故殺之、他曰、當為汝理侵冤、忽復殺良善也、因解衣投於地、忽然不見、明且召游徼詰問、具服罪、即收繫、及同謀十余人悉伏辜、遣吏送其喪歸鄉里、於是亭遂清安、本伝

*東大本「妾」なし。

一陳重、字景公、少与同郡雷義為友、太守張雲舉重孝廉、重以讓義、前後十余通レ記也書、雲不聽、義明年舉孝廉、重与二但有郎署一、有同署郎負息錢數十万、責主日至詭求無已、重乃蜜密以錢代還、郎後覺知、而厚辭謝之、重曰、非我之為、将有同姓名者、終不言惠、又同舍郎有告歸寧者、誤持隣舍郎袴以去、主疑重所

取、重不自申說而市袴以償之、後寧喪者婦以袴還主、其事乃顯、重後与義俱拜尚書郎、義代同時人受罪以此黜退、重見義去亦以病免、本伝

一雷義、字仲公、嘗濟二人死罪、罪者後以金二斤謝之、義不受金、主伺義不在默投金於承塵上、後葺理屋宇、乃得金、金主已死無得復還、義乃以付梟、曹後舉孝廉、拜尚書侍郎、有同時郎坐吏当居刑形作、義默自表取其罪以此論レ司寇、同台郎覺之委位自上乞贖義罪、順帝詔皆除刑、義歸舉茂才、讓於陳重、刺史不聽、義遂佯狂被髮走不応命、鄉里為之語曰、膠漆自謂堅、不如雷与陳、本伝

一范冉、字史雲、与王奐親善、及奐遷漢陽太守将行、冉乃与弟協一步齎麦酒於道側設壇以待之、冉見奐車徒駱駝、遂不自聞惟与弟共弁論於路、奐識其声即下車与相揖對、奐曰、行路倉卒、非陳契闊之所、可共前亭宿、息以叙二分隔一、冉曰、子前在考城、思欲相從以賤質自絕豪友耳、今子遠適千里、会面無期、故輕行相候以展訣別、如其相迫将有慕遺之譏矣、便起告違扞衣而去、奐瞻望弗及、冉長逝不顧、本伝

一范冉去レ官、嘗使兒招拾麦附待五解、隣人尹台遺之一解、囑兒莫レ道、冉後知即令并送六斛言、麦已雜ト矣、遂誓不受、袁松書

一王烈、字彥方、太原人也、以義行称鄉里、有盜牛者、主得之、盜請罪曰、刑戮是甘、乞不使王彥方知也、烈聞而使人謝之遺布一端、或問其故、烈曰、盜懼吾聞其過、是有恥惡之心、既懷恥惡、必能改レ善、故以此激之、後有老父還遺劍於路、行道一人見而守之、至暮老父還尋得劍、怪而問其姓名以事告烈、烈使推求乃先盜牛者〔也〕、諸有争訟、曲直将質之於烈、或至塗而反、

或望廬而還、举孝廉不就、曹操聞烈高名、遣テ徵不至、建安二十四年終、年七十八、本伝

*『後漢書』王烈伝によつて補う。

一戴就、字景成、会稽人也、仕郡会曹掾、楊州刺史歐陽参奏二太守成公浮藏罪一、遣部從事薛安案倉庫簿領、狀就於錢唐獄、幽囚考掠五毒参至、就愴慨直辞、色不變容、又燒鑊斧一、使就挾於肘腋、就語獄卒、可熟燒斧忽令冷、每上彭考、因正飯食不肯下、肉焦毀墮地者掇而食之、主者窮竭酷慘無復余方、乃臥就覆船下、以馬通薰之、一夜二日皆謂已死、發船視之、就方張眼大罵曰、何不益火而使滅絕、又復燒地以大錢刺指爪中、使以把土爪悉墮落、主者以狀白安、安呼見就謂曰、太守罪穢狼藉、受命考実、何故以骨肉拒扞邪、就抛地答言、太守部符大臣、当以死報国、卿雖衛命固宜申断一冤毒、奈何誣枉忠良、強相掠理、令臣謗其君子、登其父薛安庸駭忸行無義、就考死之日当白於天与群鬼殺汝於亭中、如蒙生全、当手刃相裂、安深奇其壯節、即解械更与差談表其言辞、解积郡事、徵浮還京師、免歸鄉里、太守劉寵卒就孝廉、光禄主事、病卒、本伝

一宋楊簡嘗作書兒人書楊某再拜附之、僕既發忽自思不親拜而書拜是偽也、急呼僕返置書案上設拜而後遣、右義

一漢文帝詔曰、朕聞之、天生民為之置君以養治之、人主不德布政不均則天示之災以戒不治、乃十一月晦、日有食之、適見干天、災就大焉、朕獲保宋宗廟、以微眇之身託于士民君王之上、天下治乱在予一人、唯王執政猶吾股肱也、朕下不能治、育群生、上以累三光之明、其不德大矣、令至其悉思朕之

過失、及知見之所不及、句也以啓告朕、及举賢良方正能直言極諫者、以匡朕之不逮、因各勅以職任務省テ繇費以便民、朕既不能遠德、故憫然念外人之有非、前漢文帝紀

丘濬曰、此後世人主因災異求言之、始自文帝国日食下、此詔後凡遇日食与夫地震川崩水旱疾疫之数皆下詔、求賢遂為故事、

一又曰古之治天下、朝有二進善之旗註曰橋梁切板所以書政令乃後所以通治道而來諫者一也、今法有誹謗詬言之罪、是使衆臣不敢尽情而上無由聞過失也、将何以來遠方之賢良其除之、全上

一漢元帝詔曰、歲比災害民有菜色慘怛於心、已詔吏虛倉廩一開府庫、振救賜寒者衣、其悉意陳朕過靡有所諱元帝紀

一漢宣帝詔曰、獄者万民之命也、所以禁暴止邪、養育群生也、能使生者不怨、死者不恨、則可謂文吏矣、宣帝紀

一又曰、今百姓多上書触諱以犯罪者、朕甚憐之、其更諱詢、全上
一又曰、朕惟耆老之人髮齒墮落血氣衰微、亦亡暴虐之心今或羅文法、拘執囹圄、不終天命、朕甚憐之、自今以來諸年八十以上非誣告殺傷人一佗皆勿坐、全上

恭奉賀

上行仁政下大歡序

大島登世勝

夫大島者上世雖為中山国附庸之地、

日本丁慶長十四癸酉歲

国君命樺山氏・平田氏二大將以殿海邦属

中土迄今一百六十有八年、從爾以來年豐物阜不曾闕其賦是其農功和漢兩朝及南藩琉球国道之島其例不識有諸、況是海内第一、可謂

豐饒之地耳、曰民惟邦本、本固邦寧云云、不若當時十有三郡、知郡坐井而如飲天僉順、世俗徒善不足為政徒法、不能自行而規模蕩盡、風俗益嫵而世丕有變駸々然世人嬌偽之萌日生剽掠竊為弁才利口、固然莫知乃民竊塗炭已極貽患於下民也、或曰、是誰愆乎、民曰、古法雖宜^①干今賢不肖異思而所以不法守者、非知郡之愆乎、是不為也、非不能也、曰、得失利病萃知郡・一官、故歸渠又知郡曰、廢興存亡是惟關係盛衰運而謂非我歲也、歸之造物、造物不自以為愆、二者既皆無所歸、然知郡其愆不亦宜乎、且夫出產在天、而去歲天地不和、弥數月不雨、且三暴風万物吹壞、鄉大田不登、野禽獸偪人而地爪無恒產、且有水旱兇荒之虞、而相尋於戌年耕也、餒在其中而家々久不举火、破甑以生塵、於斯時妻啼飢夫無奈何、挑耕爭罪爭財盜、賊益熾而人民災患無所不至也、不意

天意賜祉福而右族之進士 得能夫子博通今古賢、知見簡拔^②于薩陽、徵承 藩鎮之命、万里越海、今年二月梯航達於敝邑、時人始驚、後隨以喜也、蓋其志純利國在愍惻民、竭心思常好問、取無遺^③無賤無長無少相与格其非、衆人所奏之書參考互觀以察還言本於所折衷、出示制禁以謂勿煩一介之役徒深警有司垂戒後世、乃周廻十有三郡、每郡命知郡發倉廩而救窮民、數百家於要就死以免凶年死亡也諒如此逢明時、既沐

天朝之雨露、又戴藩鎮之恩施、举民喜之、猶解側懸瞻望反側、不勝犬馬之戀主之精、而民歸之由水之就下也、觀數月以來翕然郡吏從事、於斯而移風易俗各自競忠勤、動容周施用心於官吏^④、而有輔相干^⑤當務也、□又勉強奮勵、夜以繼日、糞其田、四時太平墾培茸蔗、曰蔗之耘草、今年初及三次止、天々其葉續紛四境秀也、哥哉人民康奉而至於日至之時、滿目处々稻登場、官吏慶於富歲、農夫

相与扑於野、憂者以喜、病者以愈也、但恨淹留^⑥于爰為五月、於滿數而錦帆既解纜、查惜望於島隱行舟、於民之心以為速而臨其期欲赴懇於 連鎮其情最切也、特懼有浸潤之譖、一非毀其善者出於其間、是所举民大嘆息也、北望

京華、願輔民之志再命 夫子辛勤這地、蒙

啓賜向承命之津^⑦令万代不易之行、則黎民〔不〕饑不寒而年々黑糖相倍蓰、而利國歲々百穀豐積而民家財用足、則隣島之農仰之、皆悅而願耕於大島之野必、然則不要勞鄉党使來民今古所蕪之田疇開広之何乎有矣、吾聞積德累行不知其善、有時用棄義背理不知其德、有時亡此之謂坎、由此觀之 夫子功成、錦歸之後、天運吉星到而他日登金馬列 玉堂・而高車・駟馬之跡、永伝孝子・慈孫、直祝可躋寿域耳、勝也雖不文之才、感為海外之成功喜以溢言表、不得已、謹挥手而島祚記其大略以代昼錦之榮焉、是序並賦小詩一篇統祈 教政

民間運用閑吏官、時立農功雨露新、修憲閑邪多少苦、忘家利國一忠臣、道明天下開宏規、恩洽海隅沐至仁、暇勉德行化蛮貊、男耕女織仰茲辰、

右文中連鎮之句者、大島藩鎮之交代明年再相統祈見命 得能夫子之謂也、以可通其意坎、未審伏請 教正

大島西知郡登世勝頓首百拝撰并書

一未忘事時、常持守此心、勿失、忘^⑧吏時、省察此心勿差、既忘事了、持守此心、勿失

一常主敬則心便存心、存^⑨忘事不錯、

一切不可聽人之言而隨和之、故聽□、外馳、即無知誘物化之失、

一 交人而人不敬信者、□^只當反求諸己、

一 善莫大於取人之差、^善

一 凡事皆當推切讓能干人、不可有一毫自德自能之意、

一 人不能受言者不可妄與一言、

一 謹言最是觀事只與人相交輕發言而人不從、便是失言不可不謹、

一 古之聖人不語人、以未乃一雷二月發聲八月收、聲氣之動靜也、^{公以上文語情}

一 昔人云、誰知盤中飡粒、粒皆辛苦、吾輩安逸享之、豈狼藉以可視之、

一 不疑者可以理論、不忍者可以情動、

一 陳勝曰、嗟乎燕雀安知鴻鵠之志哉、

一 中性道如何、可分別曰中性、道本一也、不可分別者雖然又不可混一之天之命性率性謂道、此贊称性道而謂中也、伊川先生曰、大

臨中即性也之語極未安中也者所以狀性之体段也、如称天円地方

遂謂方円、即天地可乎云々、以見頗分別性送中、^是

一 主暴不諫非忠臣也、畏死不言非勇士也、見過則諫不用則死忠之至也、^{新序}

一 蓬生麻間不扶自直、白沙入緇不染、自黑人相与处自然染習、宝鑑

曰、丹之所藏者赤、漆之所藏者黒、是以君子必慎其与处者焉、^{政要}

一 齊桓公、周襄王九年十二月卒、在位四十二年、主中国盟三十九年、

一 間周公定予州為天下之中、朱子曰、此但以中国地段、

一 朱子曰、地之四边皆海水周流、地浮水上与天接、天包水与地、

一 初間地未成質之時、只是水後來漸々凝結、初結時亦須尚軟、在凡

物皆然如鷄子穀之類、自氣而水、水而質飛分曉、^朱

一 勇猛直前、氣稟之偏自消、^朱

一 心之干仁、猶水之冷火之熱、^朱

一 忠自裏面發出、信是就事上說、^朱

一 凡看文字少看熟讀一也、不要鑽研立說、但反覆體驗二也、埋頭埋

会不要求効三也、學者當守此、^朱

一 安仲舒乃是正人、然見地淺才貝頭晦翁明謂其所見不及莊周、^{朱語註}

一 兵強則滅、木強則折、革□則裂、齒豎於舌而先之、敝是故柔□者

□之幹也、強者死之徒也、^弱

一 譬、若夢為鳥而飛旅天、夢為魚而沒於淵、方其夢也、不知其夢

覺而後知其夢也、今時有大覺、然後知今此之為大夢也、始吾未生

之時、焉知生之樂也、今吾未死、又焉知死之不樂也、

一 達人之學也、欲以通性於遼廓而覺於寂漠也、若夫俗世之學也、則

不然、擢德撓性內愁五臟外勞耳目、

一 水之真清而土汨之、人性安靜而嗜欲乱之^{南以上灌}

一 披帙散書屢觀遺文、有造有写、或草或真、執疏周復想見其人、紙

勞干手涕霑干巾、^干

一 凡人之害于學者驕与怠而已、驕則志盈善不可入、怠則志隨功不可

進、遜則不驕、敏則不怠、^{真西山}

一 俗儒是古非今固不足用、独不当求真儒而用之乎、以俗儒不達時宜

而并儒之通世務者是因噎而廢食也、^{上同}

一 自隱其善、言不輕發守心能容人忍物、內分明外渾厚、不露圭角不

逞、才智之善美、此大德者□、又自隱其惡、口不言是非而存□心^於

藏機挾詐喜動惡靜、一言半句必如針而刺人、是惡之甚者也、此二

者不能察、則有以惡為善以善為惡之誤、

一 喜人之惡、惡人〔之〕善出惡、惡而差人以鞭々奴、是知人而不知

己也、

一奴婢之偷吃者主之与不多也、

一不得文句求於心必有得焉、不得於心求於書、

一逐鹿者不見山、攫金者不見人、

列子

一吳子殺妻求將捨一取十也、漁人以餌致魚、非是肯捨餌也、意在得魚也、畢竟「是貪心所使也」、

真知說

〔裁〕

真知者万理融积而無毫髮之疑也、夫理也者其大無外、其小無內、而無形体之可捉、無声息之可尋、固非聞見臆度之可得而尽也、然学者誠能用力於格物之法、今日格一物明日格一物久而不息、積之既多一旦脱然万流皆為今日之一源也、昨日之千枝万葉皆為今日之一本也、而其所喻者亦足目俱到而非向者聞見臆度之可比也、是以其見善也、猶口食八代珍、然後知其真美於衆味也、其見惡也、猶身傷於虎、然後知其真猛於百獸也、則其好善惡之誠益有不待勉強而然者矣、此謂真知也、或曰、如吾子之言則真知之人好惡必誠然大学知至之後又有誠意工夫者何、曰、以德言之則真知之人好惡必誠、以学言之、則雖既志知而誠意之功不可闕也、曰、真知与聖人之知有異乎、曰、伝不云乎、或生而知之、或学而知之、或因而知之、及其知之一也、夫及〔其〕知之云者真如之謂也、則与夫生知者豈有二哉、曰、然則何有聖人、大賢之分乎、曰、所至雖曰而生熟則異所以有聖賢之分也、曰、七十子之徒誰為真知、曰、此非末学之所敢議也、然窃考朱子之語曰真知善惡而誠好惡之顏曾閔冉之蓋能之矣、然則四子之為真知也固矣、然其曰徒則蓋亦不限四子也、曰、顏曾則已論已其加、閔冉者何、曰、豈其以与於德行之科乎、夫德者誠善身者也、

孟子有於己之謂信註張子曰誠善於身之謂信 曰、曾点漆彫開如何、曰、恕〔恐〕

未能真知也、夫真知之人好惡必誠而点者終於狂矣、真知之人万理融积而開則未免於有毫髮之疑矣、〔萬〕必誠者志如理之理、〔恐〕曰、然則程子謂既見大意見道分明者何、曰、朱子嘗弁之曰、謂見大意則於其細微容或有所未尽、謂見道分明則固未必見其反身而誠也、是亦可以証未盡未誠之病真知矣、〔萬〕必誠者志如理之理、〔恐〕曰然則二子之知果何知乎、曰、既非真知則恕未免於聞見之知也、雖然謂之既見大意則其亦聞見之大者乎、謂之見道分明則其亦聞見之分明者乎、此夫子之所以悅而与之也欤、曰、然則凡謂見道聞道者皆可例以為聞見之知乎、曰、否、言非一端各有攸主、讀者各因文意斷之而可〔開〕事下之口如人之不可不下故亦

擬、義未知当否、伏諸友教尔、

〔恐〕数愆謹撰

敬齋說

小貞幹求号於常經、常經告之以敬齋、昭在傍為其說曰、一身之主謂之心、心之主謂之敬、小則動住威儀、大則礼樂刑政莫不由之、応事接物万變酬酢、敬則的規当矩、不敬則身弑国亡、寔廢興存亡之枢機也、〔恐〕范々堪輿之間、眇々一身之微、以心為三才、心無主則血革肉塊而已、耳目鼻口動靜云為投間抵隙衆欲攻之、操則存、舍則亡、出入無時莫知其卿如一輩之泛泮海、嗚呼危哉、操之有要々也者何敬是也、敬以直內所以敬於內也、義以方外所以敬於外也、太公告武王以敬、〔放〕勝怠者吉也、召公導成王以敬、作弗可弗敬德、学問之道無他、求其旅心而已矣、其所以求之者非敬何欤、敬齋之義止於此、吾子努力敬齋之名庶幾乎不恥哉、

*東大本、左に「矣」と傍書する。

与物茂卿

藪慎庵

曩者始通姓名、展^二拜^一門下、何幸如之、優待疑厚、情信如故、感謝之多、積日渴望、宣如^一濯衣、而翻有倍於前者何也、復欲奉問、公私冗擾、未由而已、此馳崇价、区區布問、伏審先生寬厚之德、卓絕之識而謙虛愛人、諄々誘々親炙久之、必有不知其化者矣、天資所然耶、抑得之學耶、博物詩文〔蓋〕其余事耳、僕聞之、知其言則其人可知矣、嘗讀先生書曰、此必一代偉人乎、其言溫而理勝、文而不浮、而大異於流輩固滯之撰、嘉尚不已、今也知其有大加之者云、飲服欽慕、僕也西藩散士、始游此方、自少如道之可尊、經之可誦、雖徒事于此、而歲垂三十、志氣未壯、於學無得、沉為官絆^{〔七〕}、朱能負笈千里得如先生者取正、則成立之難、可以如矣、而多年所熟在概伊落、自意其伝聖人之意最真而時疏之、未暇外求、但才識駑鈍、雖頗窺其緒而未能揆蹟、則居常不復欲欲立門戶主張之、若或謂別有直訣之可取也、尽〔棄〕旧學、當是之究、固僕之願也、而先生之於程朱〔意〕如少不足者、及就聞其論、則愈不如僕信之、大非所以望先生者也、然先生所以自得者、豈待僕言哉、僕固非言者、願學之也、別錄〔疑問二条、呈左右、暇日賜丙監、所〕發愚昏万一有能、則誠一生之幸、而尽棄旧學、僕不惜也、然後由是有以佐下風、顧先生亦以為幸乎、先生之幸、天下之幸也、千万無罪、文二首親取之稿中、併呈、伏蘄鍾鑒、僕於文未悉其体法、浪摸放^{〔二〕}口而已、恐有語無理而不可讀者、時是寒暄未一、為道保齋、至禱至祝、

* 1 東大本は「欲」を見せ消ちとする。

* 2 □□は原本のまま。

問目

自程朱以居敬窮理為入道之法、後學莫不循此法也、弘篤謂凡天下之吏^{〔事〕}、其自修為成者、皆自寓此法而人不自知耳、官吏幹事、武人能兵、以至衆技之妙、梓匠輪輿之工、皆是雖如出於人、而必然之理、不可誣焉、蓋三代之學、孔門之教、亦宜然、但至程朱、特專言之耳、獨儒者以修己治人為道、則其法一、而所以為道者、大異於〔官〕吏武人之類、而儒者欲修身治人之心、未如官吏・武人的切其衷、則謂居敬也、如以一念縛心、謂窮理也、妄費^{〔三〕}思索、拘^{〔三〕}滯糟粕^{〔一〕}、故終無成、徒差過一生而止、此欲居敬窮理其未真者、不亦悲乎、〔夫〕純美通明之士、必懲^{〔二〕}于此、不屑為之、反得道於別塗、或繇資之所近、駸々有成、其及成也、故說一般易簡法、極口駁居敬窮理、殊不知是亦自居敬窮理來、今自試之、答^{〔四〕}靜慮讀書、心不走作、理義俠洽、豈非居敬窮理之真乎、由是推之、動靜云為、亦思過半矣、但不以是為法、則有心忘走作、理義不明者、是軋^{〔五〕}當加勉耳、益程朱之學自然矣、平易矣、所以鮮得具其門入者也、後之學者、其有力者、以成固滯繆盤、無力者不過資助誦說、則未如象山・陽明之親切、及吾邦藤樹・仁齋之平易也、吾邦如伊藤仁齋、雖口駁居敬窮理、而能用其力者也、然其道異於程朱何也、無他、其見理之差耳、又何病居敬窮理、且彼非專差、未深推之也、弘篤謂天下之理、即其〔実〕体言之、不過謂一元氣、而仁齋專言之、先生大可之、夫人於〔未〕接外物燕閒清一之境、一看其身、溫然和氣而已、即外觀之、块然大虛、元氣外降、是天地之体而人心之心正也、唯人也動物中為殊動者、若不知靜以節之、別^{〔四〕}任生隨遇、一日万機、況為情欲利害累、溫然和氣、剗^{〔五〕}喪而尽、欲見一元氣而可得乎、仁齋能周其力、故知天地只一元〔氣〕、其純熟之妙、必有不可以口舌解者矣、夫其資固平必者、自是近於道、知之亦容易

其否也、心或常不平、纔髣髴於靜處、又隨失之、此仁齋所以度越流輩、先生推之者恕（意）當然也、惜乎即是不能分理與氣、此僕所以謂彼非專差、未深推之也、夫天地之間理氣混融、猶朱与水盛之一孟也、只是一孟赤水不可分、猶理氣不可分也、而理自理、氣自氣（朱子曰理義法二物）、若其實無分、何立其名字邪、唯其混融也、無始無終以不係天地生與「滅」、故曰、天下不有無理氣之又無氣之理、仁齋既知美体、而不知輒即之分理與「氣」、反求理於氣外、宜其摸空捉影、以斥宋儒為禪也、殊不知程子亦就器謂上謂下、未說道在器外、然則其謂一元氣者氣而已、何足以窺上天之載、誠之不已者矣、朱子所謂有理而後有氣、及未有天地之前、畢竟先有此理者（此語與程子仲淹無異之說相為表裏當為定說）、仁齋主非之、以僕視之、混融美体固雖不可分、而理常「取」於氣、氣未能取於理、不得不言理前氣後、且此氣也、誰編滿充美并始無終、先無此理焉又得然哉、若謂之無氣前有一間時、則理有方体、有時處、朱子亦不「至」妄謬如此、但一時答問、未知太極注円備耳、然此語先生以為門人所記率多譌誤、不可据以為証、弘篤惑之、

客歲読態沢「氏」集義外書、僕甚服其為人、此老亦於樂有所發明、且於治道非世儒所及、僕謂當世之士先如此老而後「得」有所裁哉、先生以為如何、

學則簡奧古雅、當世所不見、亦知有先生而能此体也、嘗怪説勝東壁文也、雖甚難句、暗得其意而後能説了、學則也非初難説、然其忘義渾々、有易分流者、益古文之最者邪、文中有不知訓詁者、採録左方、幸賜指南、

*1 『慎庵遺稿』「妄」

*2 東大本「心」なし。

与物大寧書

震庵

不佞与足下相識實懽忽而已矣、第不佞以尊大人之故、其於足下、固知不客「泛々焉」、夫君子之門、英髦賢材朝夕出焉、足下介乎其間、既觀天下之士者、而不佞之以謏劣与疎逖、足下焉有記存至干今耶、祇情之不可已、敢以布問、如其不拒幸甚、是歲春有服子遷及高子式与墨君徵書云、尊大人不幸、於正月十九日棄世、報至、愕然而興、乃与君徵相見、潜々焉感々焉、旬日不能為嘯咏也、吁以僕所嘗度之、尊大人齒髮略邁、精爽完固過乎人、必其躋艾耄相別未甚遠、庸詎有此變耶、伏惟足下也入斷「本宗之後已嗣令音之永、而雖曰克家乎、頓喪義方、昊天不吊、不止罔極之痛也、嗚呼尊大人誠吾邦一大偉人矣、而其學之道与、固未易得而窺也、独其可規者文章煥然者已、業已播諸海内、海内亦風動嚮化焉、蓋其所為古之又故矣、故每高干衆人、而自能兼埤者既得其真矣、故洪纖賦形毫無不称者、以至有天機鼓動未必踐迹者、則天下一人而已、顧夫風動嚮化之不暇者、宣哉、惟其學之与道深矣、不佞屢踵其門、未造堂奥而其所聞者端倪耳、端倪未之窮、輒為睽離乃至於九原不可作、悵々不如所為、噫不佞初聞計音、与君徵計必為發吊問又致奠義、而斯須之際君徵臥病、不佞待候之也、以緩矣、不意君意君徵荏苒之患或緩或劇、卒以至不起也、想其晏病、率因必氣、而適又有如是者、彼特悶々耳、嗟夫君子之門見而知之者敝邑唯有不佞与君徵已、是以相引遊處、輒挹手道「故」不已也、今復「喪君徵撫懷嘆息、不佞所以宿志不果而」獲罪於大方者、一由於此爾、不佞弘篤頓首、尊大臥方弥留、有告門弟子者、「其」所葬為何地、有何人撰行「狀」乃碑碣、其遺稿幾十萬言、公行當世乎、將藏置名山乎山海修阻、寥無所聞、足下幸示一二、陟釐二張謹致下執吏、伏冀其有事於先大「人」、以充庶差

之品、豈謂之奠、祇情之不可已者、顧亦薄物菲礼、〔不拒厚幸焉、君徽挽詞付上、文豈足^レ云、一矚^レ後煩^レ〕示諸子遷及子式兼言其阻滯之狀、不佞所以酬知己者、亦是已臨書不任縷々、統祈亮察、

* 1 悒々：『慎齋遺稿』「悒悒」

* 2 東大本「君意」なし。

* 3 東大本は「臣」を見せ消ちにして右に「人」と書す。

書物茂卿往復書後

裁慎庵

牛間物子〔其〕関内之一人乎、其非常調也、予嘗於護園隨筆觀之、今歲予客江都、主欲見之、乃介福田某遂所志焉、而聞其說礼楽論時体及政道、亶々過人、且梁^{〔原〕}於詞章^{〔當〕}矣、雄偉也、婉轉也、委曲也、時出之、其心無窮、豈〔非〕其難為水者哉、但其論道、異於吾所聞也、予頃投書云云、意謂造端^{〔干〕}此、渠若有心之、則有所〔与〕論定矣、〔然〕渠不相容、猶膏之与水也、其已^{〔矣〕}□乎、予欽〔渠為人〕也、寬綽而質直、開口傾倒、毫無忌諱、其次慊焉乎、且渠答書又尽竭〔所蘊^{〔無所〕}〕所無回避、予未知所以處之也、先是予聞人伝其說、意謂渠近日所見、殆与隨筆異矣、今果見其如此、因自信予言之不謬也、夫辞由理興、又由辞造理、要其相顧、而不可偏廢也、若夫物子及仁斎、其非偏廢者哉、至其要言理也、乃不易以口舌爭者、而予患之、人猶渠患予言理也、仮令重詰問梁、渠復以為賢白必矣、姑以所見書之卷後云、

書返魂丹後

慎庵

天下無虚中無氣而立者、故此虚彼入、彼虚此入、間不容髮、是乃氣之為物也、不可怪夫、邪乘虚入、入則為主、所以人易有癖積也、遽欲除之、人則斃矣、不知其責也、世亦有之、葬祭礼廢^{〔氏〕}司之、真

儒学絶、異学代之、是一類之喻也、

書疑問書

慎庵

日本肥後生裁久左衛門弘篤敬具、弘篤生來議堯舜周孔之道之可尊也、乃就厥遺經、用国読環回之法、目力斯尽、心思亦隨、頗有獲義趣之髮髮^{〔髮〕}矣、夫音之道円、辞之道方、円者無形、方者有形、以是积斯笛^{〔笛〕}之迹、能莫有不合者、但其無形者意變為有形、有形不能不環回、又有時不通局也、且亦辞之無絶^{〔絶〕}極、不可以制字、而我之所有者仮華爾、仮而失其真者亦多、乃所謂髣髴者、又安知不此得而彼失者邪、余重為之彷徨焉、国法禁嚴不許航海、不能西至堯舜周孔之邦、而受有道君子之教、優柔風氣文物之釀郁、則逸志之莫洩、深恨此生之無縁、今此謹録蓄疑、投諸森漫之無涘、以禱神交乎万一尔、冀大邦君子觀而憐之、為下姬黄^{〔姬〕}之筆、夫東漸之化猶徵於今日、而令舍主若弘篤者、益信天日人心之無二焉、伏惟君子者不為不屑者、聊書以為請教之地、

〔彷徨焉下分注〕我本無音又無字、今俱有之者、乃仮而転訛耳、原之其始一一有據、絶無創意者、即今日所用者亦是自有五十音七声悉備、実皆単出字固不可制、昔有聰明者、以華字音相似者割其片旁定之字形、乃所以攢合為辞、又有後人用其巾体者、諸書〔所〕載日本伊呂波是也、然単出者与成文異、則其音之与字実不合焉、抑又有幸於無音無字者、我国以水土之純而惟辞是之由、乃以是积字可以推一之方也、若音辞混駁既二三、其本豈能得推類而通耶、此謂虚能容物可矣、自余外国恕^{〔恕〕}不然、聞紅毛人不読経史、豈非坐是耶、

鹿兒島県史料集刊行一覽

No.	刊行年	史料名	担当委員
1	昭和34	薩藩政要録	桃園恵真・五味克夫
2	35	丁丑日誌(下)	芳 即正
2	36	丁丑日誌(上)	村野守次
3	37	薩摩国新田神社文書	五味克夫
4	38	一向宗禁制関係史料	桃園恵真
5	39	薩摩国山田文書	五味克夫・郡山良光
6	40	諸家大概・別本諸家大概・職掌紀原・御家譜	桃園恵真
7	41	薩摩国阿多郡史料・山田聖栄自記	五味克夫・郡山良光
8	42	御登御道中日帳御下向・列朝制度	原口虎雄
9	43	明治元年戊辰戦役関係史料	村野守次
10	44	伊能忠敬の鹿兒島測量関係資料並に解説	増村 宏
11	45	管窺愚考・雲遊雜記傳	五味克夫
12	46	川上忠塞一流家譜	五味克夫・桑波田興
13	47	本藩人物誌	桃園恵真
14	48	薩陽過去帳	宮下満郎
15	49	備忘抄・家久公御養子御願一件	五味克夫
16	50	鹿兒島縣地誌(上)	桐野利彦
17	51	鹿兒島縣地誌(下)	桐野利彦
18	52	薩藩舊土文章	五味克夫・桑波田興
19	53	薩藩先公貴翰(乾)	五味克夫・桑波田興
20	54	薩藩先公貴翰(坤)	五味克夫・桑波田興
21	55	小松帶刀傳・薩藩小松帶刀履歴・小松公之記事	芳 即正
22	56	小松帶刀日記	芳 即正
23	57	新修舊鹿兒島藩領国・郡・村・浦・町附(上)	原口虎雄
24	58	新修舊鹿兒島藩領国・郡・村・浦・町附(下)	原口虎雄
25	59	三州御治世要覽	宮下満郎・桑波田興
26	60	桂久武日記	村野守次
27	61	明赫記	宮下満郎
28	62	要用集(上)	芳 即正
29	63	要用集(下)	芳 即正
30	平元	桂久武書翰	村野守次
31	平2	本藩地理拾遺集(上)(薩摩国)	桐野利彦
32	4	本藩地理拾遺集(下)(大隅国・諸縣国)	宮下満郎
33	5	江夏十郎関係文書	山田尚二
34	6	示現流関係史料	宮下満郎
35	7	樺山玄佐自記並雜丁未隨筆・樺山紹劍自記	晋 哲哉
36	8	島津世祿記	山田尚二
37	9	島津世家	島中 彬
38	10	譯司冥加録・漂流民関係史料	宮下満郎
39	11	薩摩藩天保改革関係史料一	尾口義男
40	12	薩藩学事一・鹿兒島師範学校史料	宮下満郎
41	13	薩藩学事二・薩藩学事三	島中 彬
42	14	薩藩名勝志(その一)	吉元正幸
43	15	薩藩名勝志(その二)	吉元正幸
44	16	薩藩名勝志(その三)	吉元正幸・塩満郁夫
45	17	鹿兒島県布達(上)	宮下満郎
46	18	鹿兒島県布達(下)	宮下満郎
47	19	先君掖官遺抄・伊地知権左エ門日記	堂満幸子・林 匡
48	20	加治木古老物語・薩藩雜事録・雜事奇談集・舊薩藩奇譚旧記集上・下	安藤 保・徳永和喜
49	21	西藩烈士干城録(一)	徳永和喜
50	22	西藩烈士干城録(二)	徳永和喜
51	23	西藩烈士干城録(三)	徳永和喜
52	24	通昭録(一)	安藤 保・清水 勝
53	25	通昭録(二)	塩満郁夫・尾口義男
54	26	通昭録(三)	丹羽謙治
55	27	通昭録(四)	中山右尚
56	28	通昭録(五)	中野 翠・尾口義男
57	29	通昭録(六)	丹羽謙治
58	30	通昭録(七)	塩満郁夫・堂満幸子・丹羽謙治
59	令元	通昭録(八)	徳永和喜・中野 翠・日隈正守
60	2	通昭録(九)	林 匡・佐藤宏之・三木 靖
61	3	通昭録(十)	尾口義男・丹羽謙治

鹿児島県史料集刊行委員会委員

五十首順

安藤 保 九州大学名誉教授

尾口 義男 前始良市歴史民俗資料館長

金井 静香 鹿児島大学教授

五味 克夫 鹿児島大学名誉教授

崎山 健文 鹿児島県歴史・美術センター黎明館
学芸専門員

佐藤 宏之 鹿児島大学准教授

塩満 郁夫 鹿児島県歴史・美術センター黎明館
史料編纂委員

堂満 幸子 鹿児島県歴史・美術センター黎明館
史料編纂委員

徳永 和喜 西郷南洲顕彰館長

中野 翠 元指宿高等学校長

丹羽 謙治 鹿児島大学教授

林 匡 頤娃高等学校長

原口 泉 志學館大学人間関係学部兼法学部教授

三木 靖 鹿児島国際大学短期大学部名誉教授

「通昭録」(十)

(鹿児島県史料集第六十一集)

令和四年三月

発行

鹿児島市城山町七一
鹿児島県立図書館
電話 〇九九―二二四―九五二一
FAX 〇九九―二二四―五八二四

印刷

鹿児島市南栄三丁目三〇―七
株式会社イースト朝日
電話 〇九九―二六六―五五二二